
君のいるハーレム生活

トモカナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のいるハーレム生活

【Nコード】

N4332S

【作者名】

トモカナ

【あらすじ】

佐藤昴は眼つきも態度も最悪な鬼畜少年。夢は普通の青春恋愛。しかし女の子に避けられまくっている昴には、遠い夢であった。ある日、一人の少女の命を助けるまでは。

助けた少女は昴の嫁にしてほしいと言うが、人外は専門外な昴は拒否。嫁になる条件としてハーレムを作れと無茶振りをする。果たして人外少女は、昴の為にハーレムを作ることができるのか！
？

ブローグ

佐藤昂はいつものように、爽快に夜風を切っていた。

春先の柔らかくなつた空気に全身が包まれて、心地良い。顔はいつも変わらずに無然としているが。

スピード違反にならない程度に原付をかつとばし、無駄にだだっ広いコンビニエンスストアの駐車場へと突入。

田舎のさびれたコンビニには、夕食時だというのに哀しくなるくらい車の一台も見当たらない。

だから、駐車場に落ちているゴミにすぐに気付くことができた。大きな紙くずのように見えるゴミを横目に原付を走らせながら、昂は舌打ちをする。

「ここはゴミ捨て場じゃねえ」

ぼそぼそと口先で呟いて、駐車場の片隅、定位置に原付を停めた。ヘルメットを外して座席に置いてから、ゴミを振り返る。硬質な眼鏡がきらめく。

この世の終わりが来ても変わらないような、しっかりと刻まれた眉間の皺。誰かが面と向かい合えば恐れをなして逃げ出してしまいそうな険しい表情のまま、駐車場の中心に向かって歩いて行く。

コンビニ以外、周囲には見渡す限り何も無い。一応名ばかりの国道が走っているの、コンビニの一件でも建設したのだろうか。車道にはそれなりに車は走っているけれど、高速で通り過ぎていく車ばかりだ。周囲には青々とした田畑が地平線の向こうまであるんじゃないだろうか、なんて感じさせてくれる横長の風景。

こんな田舎町で集客なんて望めやしない。来るのは駄菓子を買ってくる子供たちと、深夜に集う素行のよろしくない奴らばかりだった。

正直な気持ち、コンビニのバイトを選んだのは可愛い女の子とラ
ンデブーを夢見てのことだった。鉄仮面のようにいつも厳しい表情
でも、齒に衣着せない物言いにも天使のような笑顔で返してくれる
女の子と出会うチャンスがあるんじゃないか、なんて。

佐藤昂は、顔には全く出ないが、この上なく女の子が大好きであ
った。

普通の高校生らしく女の子と青春ができれば、なんてささやかな
夢を持っていた。

……しかし夢ははかなく、夢で終わる。

来る客も同僚もおっさんおばちゃん、ガキどもばかりの悲しい職
場。しかも客が来ること自体が奇跡。潰れるのは時間の問題に思え
た。昂にとっては夢破れた場所であっても、現役高校生で無愛想す
ぎる自分を使ってくれている分には感謝している。自分が働いてい
る間ぐらいは存続してくれ、と適当な祈りを信じてでもない神
様にでも捧げておく。

駐車場の清掃もバイトの仕事のうちだ。時間外だが、どうせ後で
片付けに行かなければいけない。このコンビニの店長は、暇なく
せにバイトに対して口うるさく仕事を言いつけてくるのだ。それな
ら、先に拾っておこうという考えだった。

昂は眉間に深く皺を刻ませたまま、大きい紙切れのようなゴミへ
と近付いて行く。頼りになるのは背後にあるコンビニの照明と、滲
んだ月明かりだけ。駐車場は暗く、静寂に満ちている。

生ぬるい風が頬を撫で、少し長めの柔らかな髪も揺らす。強い風
が吹けばゴミは簡単に吹き飛ばされてしまいそうだったので、早足
で近付いていった。

「なんじゃこら。ミイラ？」

昂はその異物を見下ろした。凝視しながら、自然に呟いていた。
自分で言っておきながらミイラという薄ら寒い響きに背筋を凍ら

せる。

見れば見るほど、人間のような造形に見えた。しかし見事なまでに、スカスカに干からびている。とても生きているようには見えな
い、異物。

気味が悪い。さっさと捨ててしまおう。

触りたくない気持ち先走り、ゴミへと恐る恐るといった風に指
を伸ばしていく。

「水がほしい」

喋った。ミイラが喋った。

空耳だろうか。昂は震える指先を引つ込めて眼鏡の縁を触って、
ゴミを改めて見直す。頬がわずかに引き攣っていたが、傍目には表
情は変わっていない。昂がすぐ様その場から逃げ出せなかったのは、
あまりの出来事に固まっていたからだ。

「今すぐ二リットルのミネラルウォーターをそのコンビニで買っ
てきてくれないかな？」

「……生きてる、のか？」

「もちろん生きてるよ！」

ミイラの口元らしき場所がカスカスとうごめく。

「いや、死んでるな。干からびてるもんお前」

昂は青ざめながら、ようやく足を後ろにずり下げることができた。
冷静を保っているような鉄化面のままだが、頭の中はパニックだ
った。

「ちょっと待つて待つてえ！ 行かないで！ このままじゃ死んじやう！ 本当に死んじやうんだから！ 死んだら気分悪いでしょう！？ 今日の夜寝る時にあのミイラ俺が助けなかったから死んだんだなつて枕を濡らすことになるよ！？」

ミイラは焦つていたが、表情は全く変わらなかった。というか、顔がどうなっているのかなんて分かりやしない。身動き一つできない様子だった。

しかし何故ミイラが喋っているんだろうか。しかも流暢に。昂は頭を振つて、現実を振り払う。

「夢だと思いたいから泣かないな。白昼夢見るなんて疲れてるんだなつて思つて、きつと今日の夜は熟睡する」

「……呪うから」

穏やかじゃない言葉を、ミイラがわざとらしく低い声をつくつて、おどろおどろしく囁いてきた。

「夢まくらに立つてやる。金縛りにあわせてやる。ほうら、目を開いたらこのミイラが至近距離でのぞきこむ状況を想像してみてごらん」

ゾツとした。

「ふざけるな。夢まくらに立つたらもう一回殺すからな。そのふざけた口が二度と開けなくなるように、えげつない拷問行為の後にな」

昂はこの上なく冷たい目線で見下ろして、吐き捨てた。

素早く踵を返し、容赦ない足取りでスタスタとコンビニに向かう。

「嘘ですごめんなさい……待ってえええ……」

ミイラの声が遠くなっていく。

腕時計を確認すると八時五十五分。今日は九時からシフトが入れているので、そろそろタイムカードを切らねばならない。

自動ドアが音をたてて開く。先にバイトに入っている大学生のさえない男が、顔を上げた。

昴の顔を見ても軽く会釈をしてくるだけ。昴も声をかけずに会釈で返して入っていく。接客業にあるまじき精魂のなさだが、大学生も昴も魂が抜けているような人種だった。口うるさい店長がいなければ、客に「いらっしやいませ」の挨拶をかけることすらしない。

制服に着替えてさつさとタイムカードを切らねば。

……しかし。

バックヤードに向かう前に、足が止まる。

気付けばドリンクコーナーに立って、ミネラルウォーターを手に取っていた。

レジに走っていき、二リットルのミネラルウォーターをどん、と置く。大学生が少しだけ目を丸くしながら事務的にレジをうつ。

重いペットボトルを片手に持ち、店を出た。

先ほどのミイラの元へと舞い戻り、声をかけることなくおもむろにペットボトルのキャップを外してドボドボと中身をミイラに注いでいく。

「満足か？ あ？」

中身の水を全て注ぎきった後、眼鏡の奥から刺すように鋭い眼を向けながら、昴は吐き捨てる。

ミイラは無反応だった。

……死んだのか？ それとも、やっぱりさっきのは夢だったのか？
ミイラを見下ろしながら、昴は立ち尽くすしかない。生ぬるい空
気と夜闇に落ちた場が気分を悪くさせて、眼つきの悪さが更に増し
た。

「阿呆らしい」

息をつき、その場から去ろうと顔を横に向けた。

「助かったあ、本当は優しいんだね、キミ」

先ほどのミイラの声が聞こえて、昴は目線をそちらに戻す。

「!？」

電撃が走った。

今度こそ、後ずさった。

ミイラがいた場所には、ブレザー制服姿の女の子が、膝を地面に
ぺたりとつけて座り込んでいた。

上から下までびしょ濡れの、華奢な女の子だった。この世には汚
い感情なんて存在しないんだよ、なんて感じさせる底抜けにきれい
な笑顔で昴を見上げている。

長い水色の髪の毛には水が滴り、座り込んでいる地面にまで伸び
ている。

コンビニからの照明の反射で、キラキラ光る水滴に包まれている、
絶世の美少女がそこにいた。小動物のような、吸い込まれそうに深
く大きな瞳。かたちのよい唇。触ったら指先がどこまでも沈んでい
きそうな、柔らかそうな頬。整った顔立ちを最大限に愛らしく見せ
ている、あどけない表情。何もかもが、昴好みの小動物系美少女だ
った。年頃も同じくらいに見える。

外見だけなら、完璧な一目惚れだった。

動揺しながらも視線を女の子から外することができない。ずっと見つめてしまう。

愛らしすぎて見ているだけで鼓動が高鳴っていた。

「本当に死ぬ寸前だったんだ。というわけでキミは命の恩人だね！
どうもありがとう！」

女の子が立ち上がって、昴に一步近付いてきた。

昴は一步さがった。

「やっぱり、さっきのミイラがお前なのか……？」

確認すると、女の子はあっさりと頷いた。そしてまた、全ての壁を取っ払うような満面の笑みを見せてくる。

「ミイラっていうか、まあ水の神様みたいなもの！ 君は神様を助けた素晴らしい人だよ！」

「神様だろうとミイラだろうとつまりは人外ってことか」

女の子が頷く。

昴は表情を変えないまま、ふう、と小さく息を吐き出した。

恋破れた瞬間だった。

胸中は、表情や態度に出ないだけで相当なショックであった。

昴の胸中なんて知る由もないのか、女の子は頬を朱色に染めて、
輝く瞳を向けてきた。

「ありがとう！ 本当にありがとう！ お嫁さんにしてください！」

「……最後に変な言葉がくつついてたぞ」

「お嫁さんにしてください!」

「言い直さなくても理解はできてる」

可愛い女の子が笑顔で求婚してきているという現実には、昂は思わず頬が緩みそうになる。

この恐い顔と口の悪さの所為で女の子に避けられ逃げられ十七年間。告白なんて、初めての経験だった。しかし必死に堪えた。口元をおさえ、冷静になれと自分に強くいい聞かせる。

「嫌だ。断る。人外は専門外なんだ。じゃあな」

「あつ」

簡単に言っただけ、背を向けた。

時計を見るともうバイトの時間がはじまっている。ミイラ事件は解決した。さつさとバイトに入らないと店長にぐちぐちと言われてしまう。

今の出来事は、全て忘れてしまおう。存在ごと忘れてしまった方がいい。

しかし、可愛かったなあ。

昂はコンビ二に戻る前に、名残惜しさから一度女の子を振り返ってしまった。

女の子は瞳をうるうるすると潤ませて、昂を見ていた。

物欲しそうな顔で、じいっと、見ていた。

ぐっと胸に突き刺さる。なんでも言うことを聞いてやりたくなる魅惑の小動物的表情だ。

「……そんなに、俺の嫁になりたいのかよ？」

「うん、うん……っ」

頷き方まで徹底して愛らしい。

なんだろう。刷り込みのようなものだろうか。不思議少女は完全に昂に懷いてしまっている。溜め息が出た。気分は悪くないというか、胸が熱くなる。しかしもったいないことに、昂はどうしても女の子の気持ちに応えることはできなかった。

内心を顔に出さないように無表情を保ち、女の子へと近付いて行く。

そして、口を開いた。

「俺の嫁になりたかったら、俺の為にハーレム作れ。お前が本当に神様だったら可能だろ」

「は、はーれむ？」

「俺の夢は女の子に囲まれたハーレム生活だ。その中の一人がいいんだったら、お前のこと嫁にしてやってもいい」

昂は傲岸不遜に宣言し、女の子を見下ろした。

ここまで言えば、さすがに諦めるだろ。

しばらく女の子は視線を下にしていた。

少しの沈黙の後、無邪気な瞳が、見上げてくる。

「わかったよ。ハーレム作る。嫁の一人で妥協してあげるよ。この鬼畜少年め！」

泣く寸前まで瞳を潤ませて、言ってきた。

ハーレム一人目？

ほかほかとした午後の陽射しが窓から差し込む、六畳の和室。

万年床となつていているべつたんこの布団の上にパジャマのままで寝転がり、佐藤昂は眼鏡の奥に見える瞳を、限りなく細く眇めていた。眼差しだけで人を殺せそうな、殺意すらこもっていそうな目線の先には、水着の女の子が笑顔で艶やかなポーズを取っている。

仰向けになつて、眼鏡を光らせ、真剣な眼差し。顔だけ見ればシリアスな修羅場にでもいるような状態だ。

はたしてどの角度から見れば、水着の中身が見えるのであろうか。頭の中は、そんな状態だった。

お気に入りのグラビアアイドルを縦にしたり横にしたり斜めにしたりして、なんとか小さな布切れに包まれた先にある秘境にたどりつこうとしている。胸は豊満なのに、顔は幼い美少女。昂の好みドストライクな彼女は、こんな自分にも天使の笑顔を向けてくれる素晴らしい女の子だ。

そうして昂にとっての有意義な時間を過ごしていると、焦がすような熱い視線を感じた。

プライベートを守る為にピッチリと閉めていたはずの襖に、気付けば隙間が出来ている。

隙間に目を向ける。

大きなどんぐり眼が、自分をひたすらに純粹に観察していた。この世の穢れをまだ一切知らないであろう、透明かつ深みのある瞳だ。グラビアアイドルに萌えてしまつてごめんなさい、と謝らなければいけない気分に陥りながら、グラビア雑誌を布団の上におろしたお気に入りのグラビアアイドルのページが開いたままになっている。天使な笑顔が全然違う方を見ている。

そして今自分を見つめている丸い瞳の持ち主は

「くっくっくっく」
国生柚季だ。

「なんだよ？」

昴は身体を起こし、柚季に向けて低く問いかける。
と、幼い少女は昴のきつい視線に臆したように、顔を横に向けた。
頭頂部で二つの触角のように縛ってもらっている髪の毛が揺れた。

「……すばるに、おきやくさまなの」

少女の口は重い。昴に向けてうまく言葉を紡げず、どこか違う方向へと呟いている。

自然にため息が漏れた。

昴には、わかつている。

自分を見つめていた少女、柚季がとてつもなく自分を怖がっているということ。わかつてはいるけれど、どう接していいのかなんてことは、わからないのだ。同世代ですらうまくコミュニケーションが取れない自分が、五歳の幼女といい関係なんて築けるわけない。同居を始めて一ヶ月あまりになるが、彼女の名前すら呼んだことがない。

柚季は幼稚園の制服姿のままだった。視線を泳がして立ち尽くしている。

「俺に客だったら早く言えよ」

昴の口から繰り出される言葉は、結局厳しいものだった。

柚季がパタパタと小さな足音をたてて逃げていった。罪悪感に苛まれるのはいつものことだ。

昴はぼさぼさに乱れた後頭部をかきながら、立ち上がった。はだけたままのパジャマだったが、わざわざ着替えるのも面倒だった。バイトの時間まではまだ時間がある。

欠伸をかましつつ、狭い居間を通り過ぎて、玄関前の廊下に出る。

柚季の姿は見えない。狭いアパートの住居の中、隠れられる場所なんて限定されているというのに、柚季はよく行方不明になった。きつと昴と一緒に空間に、息苦しさを感じているのだろう。

どうせ怖がらせるだけなので柚季の姿を捜すのはやめて、玄関の前に立った。

そういえば自分に訪問客なんて、どういった珍事だろうか。

昴は簡素なドアノブに手をかけながら、頭の片隅で考える。

友達だって恋人だって親しいなんて呼べる相手は、誰一人としていやしないのに。

どうせセールスか何かだろう。

と、軽い気持ちでドアを開け放った。

「あ、や、……こんにちは、さ、佐藤君！」

セールスにしては若すぎた。そして見覚えのある制服を着ていた。昴は眉間の皺を深くし、制服の女の子を無言で見つめる。

女の子は分厚い眼鏡に隠された表情までは窺えないが、既に真っ青になっていたし、震えて直立不動になっていた。

きつくひつつめて横にたらした、長い三つ編み。黒縁の分厚い眼鏡。凹凸があまりないやせ細った残念な体型。全く着こなせていない野暮ったいブレザー制服。彼女自身に見覚えがあることに、ようやく気付く。おもに体型を見てから気付いた。

「ああ、アンタ確か同じクラスの……副委員長か」

息を吐きながらのついでに漏らした言葉に、女の子がびくりと大きく反応する。

進級してすぐのクラス委員長決めの際、推薦という名ばかりの貧乏クジを引かされていた地味な女の子だった。見た目から真面目真面目しているので、面倒ごとを押し付けられやすいタイプだ。

「は、はい！ 宮代翔子^{みやしろこ}って言います。今日はあの、佐藤君にたま
ったプリントを渡しに……」

昴のクラスの副委員長、翔子はおずおずと持っていた紙袋を差し
出してきた。受け取って紙袋の中をのぞくと、大量のプリント類が
入っていた。推薦したクラスメイトの判断は正しかったのか、翔子
はやはり真面目な人物らしい。煩わしい雑事をきっちりこなそうと
している。

「こんなものわざわざ持ってこなくてもいいのに。アンタも大変だ
な」

「い、いえいえ！ 持ってくるのが遅くなってしまってごめんなさ
い！ まさか佐藤君が引越してるなんて思わなくてですね」

紙袋を見下ろしていた昴の指先が、ぴくり、と反応を示す。

「ここって佐藤君のお姉さんのおうちなんですよ。一ヶ月前から
ここにいて聞いて、来たんです。こっちの方が私の家からはす
ごく近いので、助かりました。あ、そうそう、それにこの家の隣に
」

「誰に聞いたんだよ？」

昴は顔を上げて、翔子を睨んでいた。

普段から怒っているような表情の昴が睨みをきかせると、相手は
泣いて許しを請う程のレベルにまで達する。

翔子も言葉を止め、凍り付いてしまっていた。

「俺がここにいて、誰に聞いた？」

その翔子に向かって、容赦なく問いかける。

「あ、あ、あの……佐藤君の、お母さんに、です」

消え入る寸前の声で、言ってきた。

少し考えてみればわかることだった。不登校の息子に対して母親は放置を決め込んでいるけれど、クラスの副委員長がわざわざ足を運んでくれば、それなりの対応はするのだろう。露骨に顔が歪む。

「もう用はないだろ。さっさと帰れ」

言って、開け放ったままだったドアノブに手をかける。

固まったままの副委員長が至近距離になる。

髪の毛からシャンプーの甘い香りがし、髪の毛の隙間からわずかに首元がのぞけた。なんで女の子はこんなにいい匂いがするのだろうか、なんてどうでもいいことに思考がとらわれた。

「あの！ 佐藤君！」

せいっぱいの勇気を振り絞った、といった雰囲気翔子が顔を上げて、近くで鼻を見つめてきた。あまりの近さに鼓動がドキリと跳ねた。翔子の眼鏡の奥の瞳まで、はつきりと見えた。きれいな形の瞳だった。想像の範囲内だけれど、おそらく眼鏡を外せば美人の部類だ。

「がっ、学校に、来て、くれないますか……！？」

「アンタに関係ないだろ」

冷やかな目と、冷やかな言葉しか出てこない。母親云々のく
だりから、気分は最悪になっている。

それでも五歳児よりは少しだけ強いのか、翔子は視線を逸らさな
かった。

「関係なくないです！ 一緒のクラスですから！ 一緒のクラスの
人がずっと学校に来てないと、気になってしまふんです！ みんな
も絶対、気にしてるはずですっ 佐藤君のこと、待っていると、思っ
んですっ」

「ふうん」

昂はドアにもたれかかり、至近距離で翔子を見下ろす。翔子はそ
んなに背が低い方ではないが、背丈では確実に昂が勝っている。
昂のはだけたパジャマから胸元がのぞけることに気付いたのか、
さすがに顔が横を向いた。頬が真っ赤に染まっている。

「そんなに俺のことが気になるのかアంత」

「あ、ちが、副委員長長の責任っていうか……」

「関係なくない関係になりたいわけ？」

翔子は震えている。

何故だろうか。昂は泣きそうな女の子を見ると、すぐたたみかけ
てしまふのだ。

更に自分が嫌いになるように。

二度と近付いてこないように。

どうせ、傷つけてしまふ。だったら、最初から近付けなければい

いのだ。

究極の後悔に襲われるのはいつものことだった。

女の子が大好きで近付きたい願望は人一倍なのに、うまく立ち回れない。そんな自分に苛立つ。そうして更に顔が凶悪になっていく。翔子の燃え上がるように真っ赤になった耳が見えた。

その耳元に、口を寄せる。

「そんなに関係なくない関係になりたいなら、犯してやろうか？

副委員長」

息を吹きかけながら、囁いた。

「……っ、」

真っ赤になつて口をぱくぱくさせている翔子から、結局なんの言葉も出てこなかった。背を向けて一目散に逃げ出した。

昴はアパートの通路にその背が見えなくなつてから、深くため息を吐き出した。

自分のことを本当に意地悪な人間だな、と思う。きっと翔子のことは泣かせてしまったのだろう。女の子を泣かせることに慣れてしまつて、どうしたら究極に嫌われるのかその方法だけは詳しくなつてしまつた。

ドアを閉めようと身を引つ込めかけて、隣の住人が少しだけドアを開けていることに気付いた。

昴がそちらに視線を遣ると、隣人はすぐにドアを閉めた。その際、一瞬だけ水色の何かが見えたのは気のせいだろうか。

ここに住みはじめて一ヶ月、隣人も自分同様に必要最低限にしか外にでない人間なのだろうか、一度も顔を合わせたことがない。

姉に尋ねてみたこともある。

姉曰く「父親と娘の二人暮らしみたいだけど、私も全然会つたこ

とないから知らない」なんて居候をはじめてすぐの時に聞いた。

昴はさっさとグラビアアイドルの元に戻ろうと思いを切り替えて、素早く振り返った。現実逃避とも言っ

「おわっ」

柚季が気付けば背後に立っていた。

柚季自身もまさか昴がそんなに早く振り返ると思ってなかったのか、目を白黒させて立ち尽くしている。短い手足が逃げ出す寸前にうずうずと動いていた。

しかし食い殺してくる狼の射程距離にでも入ってしまったとでも思ったのか、どうやら逃げ出すことすら出来ない様子だ。うるうるの瞳が助けを求めて昴を見上げてくる。

子供には笑顔で手を指し伸ばしてやればいいんだろう。

実際、姉に娘を怖がらせるなど何度も跳び膝蹴りを食らっている。働きに出ている姉に代わってこの時間帯の柚季の面倒を見るのが、居候の条件なのだ。

少しは距離を縮めねば、このままでは姉に追い出されかねない。それに、幼女だって立派な女の子だ。やっぱり女の子には、好かれるたい。

同世代女の子攻略の前に、まずは姪っ子攻略を頑張ってみよう。穏やかに、穏やかに。心の中で呟き、言い聞かせる。

昴は自分の限界まで口元を吊り上げ、笑っていない目を柚季に向けた。

眼鏡がキラリと光った。

「そんなに怖がらなくても、取って食べやしないさ。子羊ちゃん」

言っと、

柚季の顔が、この世の終わりを見たみたいに蒼白になった。

「たべないでええ！！ 鬼いいいい！！」

絶叫して、やっぱり逃げられた。

ハーレム一人目？

「たっだいまー」

がちゃがちゃと鍵を開ける音の後、ドアが開いて姉の由梨絵が顔を出した。

居間でテレビを見ていた昴はスーツ姿の姉を一瞥したが、愛想よく言葉を返すことはしない。姉も昴の性格は把握しきっているのか、特に何も言っていない。

由梨絵はうつむきがちな柚季の手を握っていた。

いつも同じ、決められた時間。夕刻に差し掛かる少し前に柚季は姉に連れられて帰ってくる。

灰色の雲が厚く空一面を覆っている本日も、変わらず同じ。柚季は幼稚園の黄色い帽子の下に顔を隠すようにして、靴をもそもそと脱いでいた。平日の見慣れた動作。柚季は決して昴に声をかけない。昴も柚季に何を言っているのかわからない。

由梨絵が玄関で腰を屈め、柚季と目線の高さを同じにしている。昴はその様子を見て、すぐに視線を逸らした。

「じゃあ仕事に戻るから、柚季はおじちゃんと遊んで待っててね」

「おじちゃん言うな。俺はまだ高校二年生だ」

特に興味のないワイドショーに目を向けたままで、突っ込みを入れる。

「高校にも行ってないニートが何を偉そうに」

由梨絵の辛らつな言葉に、昴は眼鏡越しに睨みをきかす。由梨絵

は昴同様の鋭い眼の持ち主であるから、睨みあうと結局昴が先に折れる。昴も姉だけには敵わないのだ。

「働いて生活費は入れてるだろ。だからニートとは言えないね」

負け犬の遠吠え状態で、弱弱しく反論するしかない。

「高校に行くのか、それともやめて働くのか、いつまでもウダウダしてないでそこらへんをはっきりさせなさいよ。いつまでもうちで引き取るわけにもいかないんだから」

「……わかってるよ」

「柚季のこと、頼んだからね。きちんと面倒見てなかったら、即刻追い出す」

「はいはい」

適当な返事をして、手をひらひら振っておく。

嘆息しているのが聞こえてきて、ちらりと目線を遣ると由梨絵は柚季をぎゅうぎゅう抱き締めていた。

一通りハグしつくした後でようやく出て行く。

柚季は普通の子供なのだ。そして由梨絵も普通の母親だ。昴はその光景を見る度に普通じゃない自分を思い知らされて、胸がギュッと締め付けられる。だから直視ができなかった。

ドアが閉まった音。柚季は名残惜しそうに、玄関の方を見たままだ。

なんだかんだで由梨絵は面倒見がいいのだ。年の離れた昴のことを、幼い頃からずっと面倒を見てくれていたのも由梨絵だ。その点からも昴は姉には頭が上がらない。こうして今居候させてくれてい

るのだった、由梨絵の好意に甘えてのことだ。結婚して出て行った姉にとって、もう佐藤家の問題は関係ないというのに、言葉はキツイけれど昴のことを心配してくれている。共働きでギリギリの生活をしている家庭に高校生一人抱える余裕なんて、本当はないだろうに。

その姉の子供なのだから、やはり仲良くせねばいけない。とは思うのだ。

洗面所で手洗いを済ませた柚季が、居間へと入ってくる。帽子は取っていた。トレードマークの触覚が揺れている。

昴は寝転んでいた身を起こし、改めてじつくりと柚季へと目を向けた。父親似なのだろう、姉には似ていないどんぐり眼だ。昴の視線から逃げるようにして、部屋のすみっこに膝をたてて座る。

隠れるようにして絵本を読み出した。昴が部屋にこもっている時間帯は、父親や母親とはしゃいでいる柚季の声が聞こえてきたりする。しかし昴との時間を過ごす柚季はどこまでも陰気だ。

今日の天気のような、重たい雰囲気が部屋の中を支配している。

「おい」

今日こそは少しでも重い空気を緩和させてみようと、昴は思い切って柚季に声をかけてみた。

柚季がびくり、と顔を上げる。

ぐりぐりの瞳が昴を見つめてくる。自分の姪ながら、将来が楽しみな可愛らしい女の子だと思う。

「何読んでるんだよ？」

うわずった声で訊ねながら、腰をあげて近付いて行った。柚季の表情がわかりやすく強張った。

「なにも、よんでないの」

「読んでないって、本見てるだろ？」

柚季が無言でぶんぶんと首を振る。こっちに来ないで。幼い瞳が訴えている。

それでも距離を縮めなければという思いが先立ち、昴は更に一歩近付く。

「その絵本、俺が読んで」

読んでやろうか、と言おうとした言葉は止まってしまふ。

柚季が投げつけてきた本が、身体にあたったからだ。小さな女の子が投げつけてくる力なんて、大したものじゃない。胸元にあたった本は、ぱさり、と床に落ちていく。

それでも、昴の表情はやはり険しくなってしまう。

完全に、拒絶されている。

そのことが、どうしようもなく昴の心を追い詰める。

柚季の方は思わずやってしまった行為に、おびえた瞳が揺れていた。怒られるとも思っただのか、眉を下げて小さな身体を更に縮こませている。

「そんなに俺が嫌いだよ」

柚季は唇を噛み、応えない。

「そんなに嫌いだったら、出てってやるよ。お前も俺も結局一人ぼっちが性に合ってるんだ。一人で留守番してろ」

冷たく言い放つ。

柚季の瞳から、ぼろり、と涙がこぼれ落ちていった。

何もかもがうまくいかない。

行くあてもなく滅茶苦茶に原付を走らせ、舌打ちばかりが出た。湿気を帯びた空気がまとわりついてきて、原付に乗っていることすらうんざりする。

お気に入りのグラフィア雑誌を買おうと思い立ち、目に入った小さな本屋に入っていく。

近所に位置しているが、入ったこともない本屋の中で意外な人物と鉢合わせた。

「きゃああ！ 出た！」

雑誌コーナーにたどりついた昴に向けて、悲鳴がぶつかってきた。ここではまだ何もしてないぞ。昴は沈痛な面持ちで、悲鳴を上げてきた人物を見る。

長い三つ編みと貧相ながっかり体型に見覚えがある。数日前にも目にしていた。

「ああ、どうも副委員長さん」

昴が声をかけると、副委員長の宮代翔子は分厚い眼鏡をちやきちやきと何度もかけなおしている。よっぱど動揺させてしまったらしい。

「こ、ここ、こんにちは佐藤君」

それでも怯えた声で一生懸命な挨拶が返ってきた。
雑誌コーナーの前に立つと、自然に翔子の横に並ぶかたちになっ
てしまう。

翔子がわかりやすく一定の距離を開けた。数日前の昴の言葉は、
かなり効力があつたようだ。翔子はもう昴に寄りつく気は一切ない
様子だった。少しガツカリしなかったこともない。

翔子は胸に雑誌を抱えていた。女子高生が好みそうなファッショ
ン雑誌だった。表紙には昴の好みではないモデルの女の子がポーズ
を取っている。

「へえ。副委員長さん、そんな雑誌読むんだ。意外だな」

他意はなく、言ってみたのだが。

翔子の顔が真っ赤に染まっていく。ふるふると震えていた。

「悪いですか？」

「あ、いや別に悪いっていうか……」

「私がこういう雑誌読むのは変だって言いたいんですか！」

しまった。どうやら、地雷を踏んでしまったらしい。感情的にな
っている翔子を前にして、昴は落ち着きなく視線を泳がす。

今日はとことんダメな日だ。毎日ダメな日が続いている気もする。
しかし翔子の噴火は、すぐにおさまった。

怒らせていた肩もがっくりと落ち、雑誌を元の場所に戻している。
ホッと胸を撫で下ろした。

「いいんです。わかってるんです。私だってこんな雑誌、本当は全

く興味なんてないんですから気にしないでください」

そう言っている割に、翔子は名残惜しそうに雑誌をチラチラ盗み見ている気がする。

「佐藤君は何を買いに？」

「グラビア雑誌」

即答すると、翔子の口元が引き攣った。

「そ、そうですか……」

昂は視線を雑誌コーナーへと向け、グラビアアイドルてんこもりのまさにハーレムへと気持ちをダイブさせる。現実なんてもう興味ない。アイドルの笑顔に埋もれて夢の世界へようこそだ。

自然と不気味な笑みが浮かんだ。

立ち去る機会を逃してしまった翔子が、隣でひいっと悲鳴を漏らした。何か見てはいけないものを見てしまったようだ。

お気に入りのグラビアアイドルが特集されている雑誌を見つけて、ほくほくしながらそれを手に取る。

「あ、その女の子って」

翔子が雑誌の表紙をのぞき見て、眼鏡をかけ直しながら確認している。

「なんだ副委員長、ファッション雑誌に続いてグラビアアイドルにも興味があるのか」

「ファッション雑誌には決して興味はないです！ さっきのことは忘れてください！ ……じゃなくて、その女の子、うちの学校の子ですよ」

「……は？」

何言ってるんだこの眼鏡かぶってるキャラは。

昴は怪訝な表情で翔子を見遣る。

翔子が青ざめて後ずさる。

「何か悪いこと言いましたか！？ 私もその子のことは全く知らないんですけど、今年の新入生の注目株の一人ってみんな言ってるひいひいこっちに来ないでくださいいい！」

後ずさる翔子に構わず、昴は翔子へとずんずん迫り、その両肩をがっしり掴んだ。

至近距離で翔子を見下ろす。顔は青ざめ、眼鏡の奥のキレイな瞳が可哀相なくらい潤んでいた。

「それは、本当の話か？」

「な、何がでしょう！？ お金は持っていません今月のお小遣いは全て服やアクセサリー代に消えてしまったんですう！ なにとぞご勘弁を！ 堪忍してくださいいい」

「カツアゲしてるわけじゃない。このグラビアアイドル、とりい みその鳥居美園は同じ学校だったのか！？ って聞いているんだよ！」

雑誌をつきつけて、表紙をばんばん叩いて昴は言い放つ。
笑顔のアイドルはばんばん叩かれても笑顔のままだ。

「は、はいそうです。そういえば佐藤君は新一年生の入学式の日から、学校に来なくなつたから知らなかつたんですね。みんな大騒ぎだつたんですよ。何せ有名なアイドルがうちの高校に入学してきたんですから。元々地元だつたみたいですけど、雑誌とかに出るようになったのは最近みたいです。まあアイドルですから、学校は休みがちですけど……すごい騒ぎになつたのに、誰からも聞かなかつたんですか？」

「俺には友達がいなから誰からも聞いてないな。ねちねちと反撃しているのかそうかそうか」

「違います！ 決して佐藤君に友達がいなことを責めているんじゃないありませんよ！？」

いっぱいいっぱいな翔子の言葉は、胸に容赦なくグサグサとくる。昴はがっくりと頭を項垂れた。

しかし、今日初めての明るい話題も耳にした。気分が浮き立つた部分の方が大きい。

現実に、光が差してきたかもしれない。

まさか鳥居美園が、同じ学校の生徒だつたなんて。わざわざペラペラの紙に印刷された鳥居美園を購入せずとも、学校に行けば、鳥居美園に会えるんじゃないか。天使の笑顔が昴を現実世界へと呼んでいた。

そこまで考えて、しかしすぐに気持ち沈みこんだ。

……学校には、行きたくない。

翔子の前で気分を浮き沈みさせていた昴だつたが、表情はほとんど変わらず険しいままだ。

それでも察する部分があつたのか、翔子が昴を見上げてきた。

「佐藤君が、新人生の入学式の日は何をしたのかは私も見てました。見てたから、だから、佐藤君に学校に来てほしいんです」

あの日言った言葉を、翔子がもう一度紡いでくる。
誠実で、真つ直ぐで、嘘偽りない言葉だと感じる。翔子の真面目な雰囲気、余計にそう感じさせた。

「だって佐藤君は何も悪くないんです。ただ少し雰囲気怖いのと、不器用なだけで」

「……」

「学校に来れば、鳥居さんにも会えますよ……？」

魅力的な提案だ。思わず頷いてしまいそうなほど。

翔子の気持ちは嬉しくもあった。そんな風に言ってくれる人は、昂の周囲にはいないのだ。

けど、昂は頷けない。ぐっと拳を握り締めた。

そんなに簡単じゃないんだ。

気持ちは、言葉に出来ない。

結局なんの言葉も出てこない役立たずな口をきゅっと結び、昂は翔子から背を向ける。現実からも目を背ける。

「佐藤君、あの、」

「帰る」

「……そうですか」

昂は振り返らなかった。

翔子の声が寂しそうに聞こえたのは、気のせいだったのだろうか。

雨が降り出したので急いで帰宅したら、柚季がいなくなっていた。

胸がざわつく。

昂は顔を強張らせて、いつも以上に眉間に皺を寄せて、柚季の姿を捜す。

どこにもいない。居間にも、台所にも、寝室にも、昂が使っている部屋にも、押入れもゴミ箱も全てすみずみまで探し尽くした。

後悔が胸に押し寄せた。心臓が締め付けられる。

柚季を一人にしまったこと。ひどい言葉を投げつけたこと。幼い女の子を泣かせてしまったこと。

「俺は最低だ……！」

昂は外へと飛び出す。

どうしたらいい、と視線を巡らすと、隣の家ドアが開いていることに気付いた。

誘いこむように、わずかに。

ドアに近付いてみると、玄関に見覚えのある靴が置いてあった。

小さな靴。柚季が今日履いていた靴だ。

喉がごくり、と鳴った。

昂は意を決し、隣の住居へと踏み込んでいく。

本降りになりだした雨の音が、世界を支配している。

そして。

水色髪の女の子が居間の大きな窓にもたれかかって、座っていた。

その瞳は一点に雨を見ている。まだ昴の侵入に気付いた様子はない。

水色少女の足元には、柚季が縛られて、転がされていた。

ハーレム一人目？

ユズのおうちには、『鬼』がいるの。

『鬼』は、ある日とつぜん、ゆずの遊ぶおへやをとって、いつつもみずぎのおねえさんの絵本をよnderの。

ママが『鬼』はママの弟だから、ちよつとのあいだガマンしてねって言ったの。

『鬼』のお名前をよんでも、『鬼』はいつつも怒ってるの。

名前をよんだらおへんじしようね、って先生にならわなかったのかな。

ママもパパも『鬼』を『ほうち』してるから、いつかみんな食べられちゃうかもしれないの。

ママもパパもすごいそがしいの。おしことがたいへんなんだって。

でもユズは、さびしくなんかないよ。もう五つだもん。大きいもん。ママとパパがえらいねってほめてくれるもん。

でも『鬼』と二人きりになると、こわいの。

『鬼』のはなしをしたら、じゃあユズは『鬼』をたいじする桃太郎だねって、ミイちゃんが言った。あ、モモじゃなくてユズだから、ユズ太郎だねってわらった。

「じゃあ行こうか」

「…………どこに行くの？」

「もちろん鬼退治だよ。えっへっへ！」

カーテンが開ききった窓の向こうに、真っ直ぐ地面へと落ちていく雨が見える。

雨特有の匂いが、室内に満ちている。さあさあと、遠く水の音が聞こえる。

昴の居候しているアパートの住居をそっくり逆向きにした間取り。二階の角部屋に位置する狭い住居の居間に、昴は立ち尽くしていた。太陽が出ていないし、照明は落ちている。この部屋は妙な息苦しさを感じた。

この住居に入っすぐ、衝撃的な光景が目飛び込んできて、口を開くことも、動くことすらしばらくままならなかった。

眼鏡に水滴がついてしまっている。袖口で乱暴に水滴を拭い、改めてその光景を現実のものだと受け入れる。

五歳の姪が、縛られて転がっていた。

後ろ手に細い手首が縛られ、ご丁寧にさるぐつわと目隠しつき。

そんなプレイは好みじゃない。

袖季がムガムガと息苦しそうに呻きを漏らす。必死にじたばたしている様子だが、殆ど身動き一つ取れていない。

「何してんだよお前！」

昴は水色少女に向けて、引き攣った声をあげた。

窓際に座り込んでひたすら雨粒を見つめている少女へと、精一杯の視線を突き刺す。

水色少女は足元でジタバタともがいている袖季を一度流し目で見遣り、妖しげな眼差しをそのまま昴へと向け

「あ！ おかえりなさいませご主人様！」

ぱああ、と花が一気に開花したようだった。破顔している少女の顔は先ほどの妖しい眼が幻だったように、幼くなった。昴の睨みにも、全く動じていない。

見覚えのありすぎる長いストレートの水色髪。深く純粋な色を宿した瞳。

昴は脱力した。緊張感に満ちた空間が、水色少女の笑顔でガラガラと崩れ去った音を聞く。

「俺はお前のご主人様になった覚えはない」

「わたしもキミをご主人様だとは思ってない！」

「ああそつかよ。幼女誘拐拉致監禁犯とは関わりたくないからホツとした」

「昴はわたしの旦那様になってくれる人だもん！」

昴の言葉が全く耳に入っていない様子の水色少女が、生き生きと言い放ってくる。

「……旦那、だ、と？ 更に関係が縮まってる！？」

「挨拶はやっぱりそれが萌えの鉄則かなって！ 昴も萌えてわたしのこと嫁にしたいくなったでしょう？ でしょうでしょう？」

「どこでそんな知識を身につけたんだ人外」

「毎日引きこもってPCばかり触ってるわたしを舐めちゃあいけませんぜ」

人外のくせにか。昴は突っ込む気力すら失せる。

水色髪の美少女　数日前、コンビニのアルバイトに行った時に遭遇した、人外の化け物だ。干からびていたミイラ状態の時から想像もつかなくらい、ふつくとみずみずしく新鮮。ピチピチ活き活き。その姿を見るだけで、胸がキュンときめいてしまう。

昴は見惚れてしまっていたことで自己嫌悪に陥りながら、水色少女を睨む。

女の子に昴の睨みはきかない。それは、初めて会った時から立証済みだった。

どこまでもニッコニコの笑顔なのだ。彼女は。

「なんで俺の名前を知ってる？　それに俺の姪に何してんだよお前」
力なく問いかけた。

「ハーレム作れって言ったから、ハーレムを作る為に頑張ったんだ！」

ささやかな胸を張って、水色少女が言う。
柚季はもがいていてむうむう鳴いている。

「それで俺の姪を縛ることに、なんの意味が？」

「ユズちゃんは昴様ハーレム計画生け贄第一号なんだ！　捕獲した！　頑張った！　はい惚れたー！」

「えーと……ちょっと、考えさせてくれ」

昴は頭を抱え、現実から目を逸らした。
確かに、昴は彼女に向けて『俺様ハーレム作ったら嫁の一人にし

てやる』と鬼畜宣言をした。まさかそれを真に受けるバカが現実にいるなんて、想像もしていなかった。彼女にハーレムを作ると返されて、昴は直後に逃げ出した。さすがに人外はバイト先まではついてこなかった。バイトが終わって外に出たら、もう彼女はいなかったのだ。やはり逃げたか、と安心していたのに。

数日後に、まさかの幼女拉致監禁。という展開が待ち受けているとは。

真に受けて正攻法のハーレム作りに精を出すのではなく、いきなり犯罪に手を染めているところでもう彼女は雲の上より遠い存在だと、考えてそういえばこの水色妖怪が自分は神様だと言っていたことを思い出した。

「お前確か神様なんだよな？」

「そうだよ。偉いんだよ」

「だったらなんか不思議パワー使って、いきなり女の子ワンサカ素敵展開にしろよ。昴様がみんな大好きキャッキャウフフがハーレムというものだろうが！ 姪っ子一人と妖怪一人でハーレムが築けたなんて思っうな？」

「正直に言っと、わたしに不思議パワーはない！」

「偉そうに言っうな！」

「でも昴のお嫁さんになりたいから、ハーレム作るって決めた！」

「……」

昴は片手で口元を覆い隠す。思わずニヤけてしまいそうになった

のを隠す為だ。

女の子に直球ストレートを投げられた経験のない昴にとって、嬉しすぎて笑みが浮かぶのを止められない。しかも相手は昴好みの美少女なのだ。

「……とにかく、姪を解放してやれ。話はそれからだ」

「嫌だね」

「即答すぎるだろ。お前一体どういう」

水色少女は、昴が自室に入った時同様の、妖しげな瞳を柚季に向けた。その豹変ぶりに、昴は声を失う。

猫のような瞳が、薄暗闇で光っているように見えた。ますます薄ら寒さを感じる。

やはり目の前にいる少女は、人外なのだ。その事実を思い知らされる。

「だって、昴はハーレムを作ってほしいんでしょう？ だから、この子は解放しない。ずっと監禁するの」

瞳に映るのは 狂気。

昴の背筋にゾゾ、と悪寒が走った。

軽い考えで目の前の水色少女に接していたことを後悔する。彼女は普通じゃない。まるで捕まえた幼子を食べてしまうのではないかという、恐ろしい空気が発せられている。

雨がどんどんひどくなってきた。

ベランダに叩きつけられて、水滴が跳ねている。雨と薄暗闇の閉鎖空間に、縛られて転がされた幼女。状況はやはり、切羽詰っている。

昴は今度こそ、真剣な眼差しを水色妖怪に向けた。
目の前にいるのは美少女なんかじゃない。元ミイラで自分の姪に害をなそうとしている妖怪だ。

「ふざけるな。あんまり俺を怒らせるなよ。さつさと姪を解放しろって言うてるんだよ！」

「なんで怒るの？ 喜んでくれると思ったのに」

昴は大腿に水色妖怪へと近付いていく。ブレザー制服を着ている彼女の胸倉を掴んで、強引に引き上げた。
間近で怒りの眼差しをぶつける。

「喜ぶ？ なんで身内が縛られてるのを見て喜ぶんだよ！？」

「だって昴はどう接していいのかわからないんでしょう？ だから、縛って転がして言うこと聞かせればいいんだよ。抵抗してきたら、お仕置きすればいいんだよ」

水色妖怪の瞳は揺るがない。挑戦的な眼差しで、昴を見上げてくる。

昴はカツと腹の底が熱くなっていくのを感じた。

「お前が柚季をどうにかするつもりなら、俺はお前を本気で殺すぞ」

「なんで？ 別にどうなってもいいじゃんこんな子供」

「柚季は俺の大事な姪っ子だ！ どうでもいいなんて思ったことなんてない！」

腹がカツカと熱くて、感情のままに叫んでいた。

全く抵抗する気がなさそうならりと弛緩したままの水色妖怪を、襟首を掴んだまま投げ捨てる。

華奢な身体は、あっさりと床の上に倒れこんでいった。

荒い息を吐き出して、倒れている柚季の方へ走っていく。

もう水色妖怪に目もくれず、柚季の前で腰をおろした。

いつの間にか柚季はもぐくのをやめて、大人しくなっている。目隠しされた状態で、昴の気配を感じたのか顔を向けてきた。

「大丈夫か柚季」

昴は声をかけて、すぐに猿ぐつわと目隠し布を外してやる。

はらり、と布が外れると、大きな瞳がびっくりしたように昴を見つめている。ぽかん、と口が開いていた。

柚季の瞳には、涙の跡は全くなかった。一筋も泣いていない。

てっきり怖がって泣いているものだと思った昴は、拍子抜けする。首を捻りながら、後ろ手に縛られている縄を外してやる。全然キツく縛られていなかった。簡単にスルリ、と抜けた。

「あれ……？」

なんだこのお芝居感は。

昴は柚季を見て、それからゆっくりと水色妖怪を振り返った。

床にぶつけて頬を擦りむいたのか、片頬赤く腫れあがって痛々しい。

水色少女はぺたりと座り込んでいて、全く邪気のない笑顔だった。

「ほら、ユズちゃん。鬼退治できちゃった」

水色少女からのどうやら柚季に向けての言葉に、昴は柚季を振り

返る。

鬼？ なんのことだ？

「ユズちゃんの怖かった鬼は、ユズちゃんのことすごく大切に思ってるから！ 守ってくれたよきちんと！」

「なっ……」

言葉を失って、二人の少女を交互に見遣る。

どうやら騙されたのだ、と事実がゆっくり浸透していつて、同時に頬が熱くなっていく。

自分は一体何を真剣に叫んだ？

あんな言葉が、自分の口から出てくるなんて想像もしたことがなかった。それでも、頭の中が真っ白になって、出てきた言葉は心からの声だ。

柚季が立ち上がり、ととと、と水色少女に駆け寄っていく。

水色少女の背中に隠れて、いつものようにひょこつと昴をのぞき見てくる。澄んだ瞳が見上げてきて、昴は目を逸らす。どんな顔をしたらいいのか、わからない。

「……騙したな」

弱弱しい言葉しか出てこない。

のぞかれてしまった本心に、恥ずかしさがマックス状態だった。

「えっへっへ！ 騙してやった！」

やっぱり胸を張っている美少女の顔を傷つけてしまったことに、少し罪悪感を覚えた。

彼女は柚季の為に悪者を演じ、昴に突き飛ばされたのだ。

人外美少女は全く怒った様子もなく、嬉しそうに口の端を上げている。畜生、悔しいくらいに可愛い。

「俺は謝らないからな」

「わたしも謝らないよ。これでおあいこなかよしこよし！ みんなでなかよしハーレム生活！」

「……聞いていいか？」

「趣味？ 特技？ 理想のタイプ？ 結婚相手？ 答えはもちろん全部昂德斯！」

昂は水色少女を前にすると、どんどん力が抜けていく。これも魔力なのかもしれない。おそろべし。

まず最初にするべき根本的な質問を忘れていた。

昂は彼女に向けて、口を開いた。

「なんでお前がここにいる？」

「それはもちろん、キミとわたしが運命の糸で繋がってるからだよ！」

全然答えになっていない。昂はその場にぐしゃりとくずおれる。

「ね、昂は全然怖くないでしょう？」

水色少女が、笑顔で言った。

応えるように、柚季のお腹がぐう、と鳴った。

ハーレム一人目？

柚季と水色少女は前々から仲良しだったらしい。

たまに柚季がいなくなるのは、水色少女の家に逃げ込んでいたのだ。昴は水色少女からその話を聞いて、溜め息を吐き出すしかなかった。

想像以上に、自分が柚季を追いつめてしまっていたのかもしれない。

昴は国生家の方へ戻ろうと靴を履いて玄関を開ける。

外に出ると、雨の音が強くなった。イソイソとついてきている水色少女を振り返る。柚季も水色少女の後ろからついてきていた。

「なんだお前ついてくるな」

言うつと、水色少女はにへら、と笑う。

「だつてお腹空いたもん。ユズちゃんと一緒におやつ食べるー。おやつ、おやつ！」

「……柚季、なんか食べたいのか？」

昴は少し考えてから柚季の方を見て聞いてみる。柚季が俯きがちに昴へと歩み寄ってきた。

自然な動きで 手を取られた。

そつと触れてくる小さな手の温もりに、ドキリとした。なんて柔らかい。そして、なんてあたたかい。

そうしてから、柚季が昴を見上げてきた。

「おやつ、食べたいの」

そんな風に言われて、拒否できる奴なんているんだろうか。

昴は柚季と手を繋いだまま、ぎこちなく歩きだす。どういう顔を
しているのか分からず、表情は強張ったままだった。

住居の方へと戻り、棚の中やら冷蔵庫の中を漁ってみたが、こ
ういう時に限って何も見つからない。

柚季と水色少女は楽しそうにテレビを見ながら、昴がおやつを運
んでくるのを待っている様子だ。

「おやつくらい用意しとけよバカ姉」

舌打ちし、顎に手をあてて黙考する。

「……仕方ねえな」

昴は言いつつ、眼鏡をキラーンと光らせた。

……というわけで。

「わあ！ わあ！ おだんごー！」

五歳児以上にはしゃいでいる水色少女と、頬をピンク色に上気さ
せて、瞳を輝かせている柚季がローテーブルの前に座している。

エプロン姿の昴は、彼女らの前にどん、とお皿に山盛りの自作き
なこ団子を置いてやった。

実は昴には、人に言えない特技があるのだ。それが、お菓子作り。
特に甘い物に興味があるとか、料理が好きというわけではない。

しかし昴の作るお菓子は、見目も美しく、味もプロ並の出来ばえ
となる。どうしてこんな特技を身につけてしまったのかと考えると、
幼少の頃姉と一緒にお菓子作りばかりしていた思い出が蘇る。お菓
子作り自体は久々にしてみたのだが、腕はなまっていなかった。

甘いきなこの匂いを漂わせる、山盛りのふかふか団子。

すぐに手を伸ばして口いっぱい頬張りだした水色少女を横にして、柚季は動かない。

遠慮がちにおずおずと、大きな瞳が昂を見上げてくる。

「なんだよ？」

まだ昂のことを恐れているのか、柚季は口を結んで眉を下げている。

やっぱりまだ、昂と柚季の間にある空気は、ぎこちない。

「ユズちゃん食べないの？ 全部わたしが食べちゃっていいの！？」

ぎこちない空気を漂わせている間に、気付けば水色少女は凄まじい速度でお団子を口の中におさめている。くるみを口いっぱい含んだリスが浮かんだ。幸せそうな表情で、指先がベトベトで、口の周りもベトベトだった。

「お前はちよつと遠慮しろ。これはお前の為に作ったわけじゃ」

お皿の上からどんどん消えていく団子に焦りを覚えたのか、俯いていた柚季がきなこ団子にサツと手を伸ばしてきた。

おもむろに掴み取ったそれを、はぐつと口の中に入れる。

頬を膨らませてもぐもぐとゆっくり噛み、少しずつ口の中を減らしていく。

全てを食べきった後、柚季はようやく顔を上げた。

「すぐく、おいしかったの」

昂に満面の笑顔を向けて、言うてきた。

「そ、そうかよ」

昴は咄嗟に口元を隠す。

ニコニコ笑顔で次のお団子に手を伸ばす柚季を見て、胸がほつこりと熱くなる。

他人との距離感ばかり気にしていたけれど、実は、人との繋がりなんてそんなに難しくないのかもしれない。なんて、考えて浮かびそうになった笑みを慌てて消す。

「すばる」

名前を呼ばれて昴は柚季を見る。

その時になって、彼女はいつでも昴のことをきちんと名前前で呼んでくれるのに気付いた。

ずっと背中を向けていたのは、自分の方だったのかもしれない。

「ユズ、すばるの『はーれむ』に入ってあげるの」

「な……っ」

昴は絶句してしまった。柚季は意味までは深く分かっていないのだろうが、どうやら昴と水色少女の会話をきちんと聞いていたらしい。

「そうしたら、またユズにおやつ作ってくれる？」

そんな風に言われて、拒否出来る奴なんているんだろうか。

昴は赤面してしまっているのを感じつつ、そっぽを向く。

こうなったら、ハーレムでもなんでもいいか、なんて気分

なる。

だから昴は真顔で、柚季と水色少女に向けて問いかけるのだ。

「で、明日はなんのおやつがいいんだ？」

コンビニのバイト中に、本日二度目の凄まじい悲鳴を聞いた。昴はレジカウンター越しに、店に入ってきてすぐに悲鳴を上げてきた客を見遣る。

「ああ、副委員長さん。今日はよく会うな」

翔子は動揺してアワアワと口を動かし、既に逃げ腰になっている。時刻は既に夜の十時。夜になって雨はやんだが、路面はまだ濡れていた。照明が反射して光っている。そんな野外からコンビニに入ってきた制服姿の女子高生が翔子だった。日中と変わらずにひつめた三つ編みと、黒縁眼鏡の真面目な雰囲気。

ただでさえ客数の少ない寂れたコンビニ内に制服姿の女の子がいたら、一輪の花が咲いたようだ。地味な花だが。

「な、なななどとして佐藤君がここにいますか!？」

「バイトだよ。もうけっこう長くバイトしてるぞ。副委員長こそ、こんな時間に何しに来たんだよ？」

「わ、私はですね、栄養ドリンクを切らせてしまって、薬局もスーパーも閉店時間だし、仕方なくここに……」

翔子がブツブツと言いつつ、視線を合わせずに言ってくる。

「栄養ドリンク？ 親父みたいな奴だな」

昂はレジカウンターを出て、翔子を栄養ドリンクコーナーへと案内してやる。

「だって仕方ないんですよ……二重生活なんかしてるせいで寝不足がひどくてですね……」

独り言のようにブツブツと漏らしている翔子を横に、昂は肩をすくめた。

「何にせよ、気をつけて帰れよ」

声をかけてやると、ぽかん、と口が開きっぱなしの翔子が見上げてきた。

「なんだよ？」

昂はやっぱり眉間に皺を寄せたままで、問いかける。

「何かいいことがあったんですか？ なんか昼間よりもずっと柔らかくなってる気がします」

翔子が栄養ドリンクを品定めしながら言ってきた。眼鏡をかけなおしながら栄養ドリンクを探す姿は真剣そのものだ。

昂は肩をすくめ、息を吐き出す。

「別にいいことなんて何も無い。隣に妖怪が住んでるっていう憂鬱な事实は知っただけだ」

「ああ、潮水知さんうしおみずちですよ」

「は？ 何言ってるの？」

潮水知とは誰のことだ。昴は翔子の方を見たままで固まる。

「佐藤君のお隣の家に住んでるのって、入学式の日一日来ただけでそれ以来、ずっと学校に来てない潮水知さんの家ですよ、って言ったんです」

「説明どうも。って、アイツ俺と同じ学校だったのか」

人外のくせに、華の女子高生だという事実には驚愕する。ますます彼女の存在は謎が深まるばかりだった。

しかも昴と同じで、不登校児。彼女は一体何者なのだ、と腕を組んで改めて考え込む。

そういえば水色少女の着ている服は、昴の通う学校のブレザー制服だった。なんで気付かなかったのか。人外少女のあどけなく可愛らしい顔にばかり注目していたからだだった。

その人外美少女はというと、窓から雨がやみそうな空をじっと見てから、姉が帰宅する前に逃げるように帰っていった。

柚季に笑顔いっぱいの手を振って。

「今年の一年生の注目株は鳥居美園さんと、もう一人は、彼女なんですよ。幻の美少女、なんてみんなに言われてる有名人ですよ。何せ入学式一日しか来てないんですから。……佐藤君、知らなかったんですか？」

「ああ、どうせ俺には友達がいらないからな」

「知ってるとばかり思っていました……」

翔子が啞然としている。

「そんなに俺に友達がいなかったことが啞然とすることなのか」

「いえいえそういうことじゃなくて……まあいいです。私から言うことでもない気がしますし」

嘆息する翔子を見て、昴ははたと気付く。

副委員長と普通に会話している。同じ学校の、クラスメイト、しかも女の子だというのに。その事実気付いて、少し動揺してしまった。それでも顔のムツリは崩れない。

翔子がレジの方に栄養ドリンクを数本置いてきたので、昴はレジ側にまわった。

「潮さんも佐藤君も、学校に来てほしいです。やっぱり不登校なのは寂しいです」

翔子が財布からお金を取り出しながら、言ってくる。

「それにしてもなんでこんなに佐藤君によく会うんでしょうね」

「俺とお前は運命の糸で繋がっているのかもしれないな」

昴は特に何も考えず、水知という名前の少女から聞いた言葉をそのまま言った。

「……っ、」

真っ赤になつて翔子が口をぱくぱくさせている。こんな顔を数日前にもさせたような気がする、と昂は首を傾げる。

そしてやつぱり、翔子は背中を向けて一目散に逃げ去った。

ハーレム一人目？（後書き）

いつも読んでくださっている読者様、本当にありがとうございます。諸事情により、現在連載中のもう一作、『雪のお姫様』はしばらくおやすみします。

しばらくこっちの作品を集中して投稿していくと思います。

駆け足気味で書いていくので、雑になってしまったらごめんなさいorz

また、ちょっと忙しくなって休載になってしまいかもしれません。そうなる前に、一気に完結まで書き上げたいところです。頑張ります。

ハーレム二人目？

『街を汚す悪い子はピカピカがお掃除しちゃいます！　ぷんぷん！』

国生家の小さな居間に、可愛らしいアニメ声が響き渡る、午後四時過ぎ。

ブラウン管の向こうで、女の子がポーズとともに、決めゼリフを発している。昴は耳をくすぐられるような感覚に襲われ、わずかに身をよじった。

現在昴と柚季の二人は、夕方に放映されているアニメに釘付けであつた。柚季が毎週この時間はこのアニメを見るのは、欠かせない恒例行事となつている。昴が本日のおやつに作つたガレット・ブルトンヌを片手に、柚季が真剣な眼差しをテレビに向けている。

柚季は膝をたてて座している昴の前に、ちょこんと、小さくおさまって座っている。

昴としては、体温を感じそうなほど柚季がすぐそばにいることでこそばゆくて少しも身体を動かすことができずにいる。しかも先ほどさらに耳を弄られているような甘い響きに、身体が火照って仕方がない。

誤魔化すように、ショートブレッドのようなお菓子をサクサクと頬張る。うん、我ながら最高の出来だ。

柚季のトレードマークである触覚髪が視界を遮っているので、テレビの内容はあまり頭に入ってこない。

しかしストーリーは正直どうでもよかった。先程から昴の気持ちを抱んで離さないのは、テレビのアニメキャラが発する声なのだ。

「すばる、このおかしとってもおいしいの！」

柚季が一度昴を振り仰いで、言ってきた。口の周りに食べかすが

たくさん付いてしまっている。

「そんなもんで大喜びするなんて、単純な奴だな。ハッ」

わざとらしく険しい顔を作って鼻で笑ったものの、柚季が昴に対して気を許してくれている事実に、昴は内心で歓喜に打ち震えていたりする。幼女趣味はないと思っていたのに、柚季の仕草、言葉、笑顔、全てに対して顔が綻んでしまいそうになる。

ここ最近では、感情を隠すのに必死な日々だ。

『ピカピカキーク！』

ブラウン管の中の美少女戦士が、鈴の鳴るような声で必殺技を決めた。昴の腰元にビリビリと電流が駆け抜けた。

柚季はテレビ画面の方へと目を戻す。昴の様子に全く気付いた様子もなく、ハラハラと戦いを見守っている。

昴は息をつき、少し身体の火照りを冷やす為に立ち上がる。ベランダ側の窓を開け放ち、涼しい風を頬へとあてる。ここ最近天気の良い日が続いているので、空を見上げると今日もどんよりと黒雲が空一面を覆っていた。

程なくして、アニメが終わった。柚季がほう、と大きく息を吐き出している。上気した頬を小さな両手で覆い、興奮冷めやらぬ様子だ。

「おもしろかったの。ユズおっきくなったら、ピカピカになるのぜったい」

子供らしい夢を聞き、昴は口の端を吊り上げる。

「柚季、アニメの世界がそんなに易しいと思ったら大間違いだ」

ぬるい瞳で柚季を見下ろし、眼鏡を光らせた。

「そうなの？ やさしくないの？ ユズ、ピカピカになれないの？」

柚季が眉を下げ、眼鏡の奥の瞳をのぞきこむようにして見上げてきた。泣きそうな表情をされて、昴はぐつと詰まる。

なれるさきつと。と、普通の大人なら、子供に対して優しく言うてやるのかもしれない。しかし昴は普通の大人ではなくて、コミュニケーションが苦手な高校二年生だった。

「一つ教えてやろう。あのキャラの最大の魅力は、萌え声だ」

「もえごえ？」

柚季が小首を傾げ、触覚髪を揺らす。

「そうだ。もしあのキャラのような美少女戦士になりたいのなら、萌え声を身につけて声優を目指せ。そうしたら柚季もアニメ出演だって夢じゃない」

「せいゆうになったら、ピカピカになれるの？」

「ああ、ピカピカにだってなれるかもしれない」

柚季は昴が語る一語一語を聞き漏らさないようにと、真っ直ぐな眼差しを昴へと向け、唇を引き結んでいる。

「天使のささやきのような、小鳥のさえずりのような、あの萌え声が堪らないということに俺は気付いてしまった。男を惑わす魅惑の

声の持ち主、声優ってのは恐ろしいな」

言っていることは非常に馬鹿らしいのだが、柚季はうんうん、と神妙に頷いている。

「あんな可愛い声で囁かれたら、男はイチコロだ」

「イチコロなの」

「よく覚えておけよ、柚季」

「うん。おぼえておくの。イチコロなの」

イチコロ、という響きが気に入ったのか、しばらく柚季はその言葉を繰り返していた。

昴はその柚季を見守りながら、
グラビアアイドルもいいけど、萌えアニメも悪くない、と思考を腐らせていた。

夢を見ている、ということにはすぐに気付いた。

昴はじつとりと全身を汗ばませ、幼少の自分を見下ろしていた。
暗闇でうずくまって泣いている少年。

これは自分自身だ。この光景に、見覚えがあった。

過去のトラウマが、悪夢となって再現されている。

大きなテーマパーク内のお化け屋敷の中。何歳の頃だっただろうか、昴はここで迷子になってしまったのだ。

最初は姉に手を引かれていた。しかし姉もそんなに大きくなくて、あまりの怖さに逃げ出した昴を見失ってしまったらしい。姉はずつと必死で昴のことを探していたのだとか。

昴にとつては全てが後から聞いた話なので、その時の恐怖は計り知れないほど根深く自分の中に残ってしまっている。

『一人にしないで』

うずくまる少年の心の声が、聞こえてくる。

隠れるように小さくなっている少年の姿は闇に埋もれ、ほぼ見えなくなってしまうている。そのことが発見を遅らせた。昴がこのお化け屋敷内にいた時間は一時間以上だった。その時は、一時間どころか、永遠よりも長い時間に思えたことを思い出す。

『みんな、ぼくを置いてかないで』

昴は顔を歪ませる。こんな夢は見たくない。

『おねえちゃんまで、ぼくを捨てて行っちゃったんだ。みんな、ぼくからはなれていくんだ』

自分の本心など、のぞき見たくなかった。

昴が少年から逸らした視線の先に、おどろおどろしい雰囲気の本殿がある。幼少の頃には気付きもしなかった。神社を模してつくったであろう本殿の向こう側から、今にも何か恐ろしいものが飛び出してきそうだ。

『お願いだから。ぼくのこと、みんな好きになつて』

少年は祈る。懇願する。

神様に向けて。

いつの間にか雨が降り出していたらしい。

パラパラと窓ガラスを叩く水滴の音が耳に届き、昴は薄く瞼を上げる。

時期的には暑くないはずなのに、全身から汗が噴き出していた。不快だった。頭も重く、湿気に満ちた部屋で全身が気だるい。悪夢なんか見た所為だ、と昴は吐息し、過去の映像を頭から拭い去る。雨が降っているとはいえ、カーテンの向こうからわずかな明るみが差し込んでいた。もう朝なのだと理解する。

かぶっていた布団を持ち上げ、重たい身をなんとか起こす。

昴の横には、水知がすすよと寝息をたてていた。

「……は？」

昴はギシリと固まって、水知を見下ろす。眼鏡をかけていないので、視界はぼんやりと滲んでいる。

レース刺繍がされた、白いスリッパ一枚を身につけただけの少女が横向きになって、昴にしがみつくような恰好で眠っていた。

露になっている白い太腿から足の指先、やせ細った肩、腕、薄闇にきれいに浮かぶ、鎖骨。

滑らかに女の子らしいラインを見せた肢体を前に、昴は完全に思考がストップした。

唐突に、見下ろす昴の視線を感じ取ったのか、水知が薄目を開いてきた。

幸せそうに蕩けるような笑みを昴に向けてくる。

「おはよう昴」

「……」

「窓から忍び込んだんだけど、昴が気持ち良さそうに寝てたから一緒に寝ちゃったよ。わたしってバドジっ子だなあもう」

水知が身体を起こしながら、てへ、と舌を軽く出している。
そして身動き一つとらず、石像のようになってしまった昴の肩に、両腕をのせてきた。

「ね、昴。繋がろう？」

水知がニツコリと微笑み、言った。
ゆっくりと顔を寄せてくる水知に対して昴は

「……っ、」

ようやく現実だと気付き、喉が切れるかというほどの、大絶叫を上げた。

至近距離で絶叫の洗礼を浴びた水知が、耳を塞いでいる。
アパートの部屋中に響いた大声のすぐ後、昴が使わせてもらっている和室が開け放たれる。

「なにがあつたの昴！？ ……って、誰よあんた！」

まだ出勤前だったらしい、姉の由梨絵が、顔を出した。
その横で、園服姿の柚季が、ひよこっとのぞきこんできた。

「あ、ミイちゃん。おはようなの」

柚季が嬉しそうに頬を緩めて、手を振ってくる。
蒼白になっている由梨絵が、慌てた様子で柚季の両目を塞いだ。

「見ちゃいけません！」

布団に入って抱き合っているほどに身を寄せ合っている二人、おまけに昴はパジャマ、水知は下着姿なのだ。由梨絵が慌てるのも無理はなかった。

由梨絵は柚季を和室から外に追いやって、襖を後ろ手に閉める。
その顔は際限なく怒気を孕み、全身はふるふると震えていた。

「昴、居候先の家で女の子連れ込むなんていい度胸してるわね……」

昴は姉と柚季の登場により、ようやく少し冷静さを取り戻していた。布団の脇に置いてあった眼鏡を拾ってかける。

布団から出て、下着姿で座り込んでいる水知から距離を取った。
心臓がありえない程の早鐘を打っていた。怒りに震えている姉ですら、昴にとっての救世主に見えた。

「柚季の教育上、アンタたちをここに置いておくわけにはいかないわ」

俯きがちに低い声を放ってくる姉に、昴は喉をこくり、と鳴らす。
どうやら、本気で姉を怒らせてしまったらしい。

「……つまり？」

昴は分かりきった問いかけを姉にする。

「つまりね……アンタたち……」

由梨絵が獣のように目を光らせ、近付いてくる。

ガシ、ガシとおもむろに昴と水知、二人の腕をわし掴んできた。

「ちょっと待っ、」

昴の言い分を聞くつもりはないらしい。ずんずんと引きずられる。居間を通り過ぎる際、袖季がニコニコと手を振ってきた。

「さっさと出て行けええっ!!」

由梨絵が怒鳴り、ゴミのように二人ともがポイ捨てされた。

すぐにばたん、と容赦なくドアは閉められてしまう。

「追い出されちゃったね」

しとしと雨が降りしきる中、裸足の水知は呑気にも言ってくる。

「お前のせいだろうが……!」

首でも絞めてやろうか、と水知の細首に注目してしまい、艶やかな水知の姿を改めて観察してしまった。昴は慌てて目を逸らす。

「と、とにかくユリ姉の怒りが冷めるまでは、お前の家にいさせてもらうからな! お前はさっさと服を着ろ!」

「昴、わたしの家に来るの?」

性懲りもなく、水知の瞳が輝く。

そういえば、柚季からのハーレム入る宣言を聞いてから数日間、水知の姿を見かけていなかったことに思い当たる。柚季との楽しく幸せなハートフルライフに昂は満足しきって、存在を忘れかけていた。というか、あまり考えなくなかったのが正直なところだった。

「パジャマのままこんなところにいられるか！ さっさと行け妖怪！」

昂が厳しい言葉を投げつけても、幸せそうな水知の表情は崩れない。

鼻歌を歌いながら自分の家へと入っていく水知の後を追う。

家に入ると、水知は濡れた足のままペタペタと上がっていく。

改めて観察してみると、潮水知の家には、家具がほとんど置かれていない。

不気味さが醸し出している空間に、昂はここに来たことを後悔する。

水知は居間の中心部で立ち止まり、振り返ってきた。

「二人きりだね」

ゾツとした。

この場合、美少女が下着姿で言ったセリフに身を悶えさえるのが、普通の反応なのかもしれないが、昂は戦慄し、身を震わせた。

「さっきの続き、しょ？」

水知が言いながら、一步一步と近付いてきている。その時。ガタリ、と押入れから物音がした。

この家の和室に続く襖は開け放たれていた。その和室の押入れから大きな音が聞こえてきたのだ、と気付く。

何かいる……！ 昴は更なる恐怖で、歯の根が噛み合わなくなる。

「二人きりじゃない！ 押入れに何かいる！」

「気のせいだよきっと」

簡単に返してくる水知。昴はドアに背中をつけ、がくがくと首を横に振る。

「絶対なんかいる！ なんか音がしたんだ！」

「誰もいないってアハハ」

そらぞらしく紡ぐ水知に、昴はプツリと、限界点を迎えた。

片手を前へと差し出し、それ以上近付くなどの意思表示を見せる。水知が素直に足を止めた。動機息切れが激しい昴は、まず落ち着かねばと深呼吸をする。

それから、水知をまっすぐ見つめた。

「あのな、潮水知。俺がお前と結ばれるのは、絶対に不可能だ」

なんとか言葉を絞り出す。

水知がわけが分からない、と言った風に首を傾げている。その可愛らしい仕草に、鼓動が跳ねる。それでも、昴はこの美少女を受け入れることは、絶対に出来ないのだ。

……このことだけは言いたくなかったが、仕方あるまい。

昴は意を決して口を開く。

「俺はな……究極の怖がりなんだよ。昔オバケ屋敷でユリ姉に置き去りにされて以来、幽霊、妖怪、なんかその類、つまりは人間以外

の何かが、無茶苦茶に怖い。トラウマなんだ。だから、俺はお前が怖い。どう足掻いたって、絶対にお前を受け入れることはできない」

「……」

きよとん、と水知が目を丸くして昴を見つめてきた。

昴はその眼差しにいたたまれない気持ちになって、目線を逸らす。背中を張り付かせたドアの向こうから、雨の音が響いている。早鐘を打ち続ける鼓動は、おさまらない。

「……そつかあ。ふられちゃったあ。じゃあわたしは、昴のハーレムに入るの諦めるね」

水知はそれでも、笑顔になって言ってきた。

「いやハーレム自体作らんでいい」

水知がしゅんと眉を下げているのが視界の端に映る。昴は齒を噛み締めた。なんで、こんなに罪悪感が溢れてくるのだろうか。

この少女の真っ直ぐな気持ちは、正直に嬉しいのだ。だけれども、どうしても水知に対して恐怖心を抱いてしまう自分が齒痒い。どうにもならない。

目を逸らしたままの昴に気を使ったのか、水知が離れていく。

「ハーレムは諦めないよ」

ぼつり、と水知が呟いたので、昴は顔を上げた。

「絶対に、昴のこと幸せにしてあげるから!」

なんでコイツは、こんなにも俺の為に？

昂は今更になって、胸にどっしりともなく響いた言葉と共に、そんなことを考えた。

ハーレム二人目？

『昂様のハーレム。随時会員募集中！』

そんな紙を、鼻歌交じりにペタペタとガムテープで貼り付けている少女が一人。

少女自身の家の前で、ご機嫌に長い水色髪を揺らしている。

「お前本気か」

ドアから顔をのぞかせた昂は脱力しきり、突っ込みのキレも悪く、彼女へと言葉をかける。

あの後、スリップ姿だった潮水知は一旦洗面所に姿を消した。シヤワーを浴びてきたのか、髪が濡れそぼっていた。濡れた頭のまま、ブレザーの制服姿となって再び昂の前へと現れたのだ。

水知はどこから持ってきたのかスケッチブックの紙を一枚破り、何かを書き込んでいた。

その内容が、今、昂の目の前にある。

「本気も本気！　こうやって書いておけば、誰か入ってくれるよ！」

「……お前の思考回路は一体どうなってる……」

先ほど昂が放った言葉によって、水知の気持ちをおおいに傷つけてしまったのではないか、と心配していたというのに。水知は全く変わらず、ハチャメチャっぷりを発揮している。昂としては、少し安堵した部分もある。

水知の笑顔は、昂に安心感を与えていた。

作業を終えた水知が、満足気に家の中へと戻ってくる。

「それにしても最近さ、外に少し出たり窓辺に立ったりすると、誰かの視線を感じるんだよね。今も誰かに見られてる気がした」

「気味の悪いこと言うな」

昴も顔を青ざめさせながら、再び家の中へと入った。

水知の乾ききつてない髪は、更なる雨の雫が降り注いだことによつて、ずぶ濡れ状態だ。

「頭拭けよ。風邪ひくぞ」

言つと、昴を追い越して先を歩いていた水知は、振り返つてきた。

「いいのいいのこれで。水もしたたるいい女つて昴が惚れ直すかもしれないし」

「……」

にこやかな水知は、結局昴のことを諦めていないということだろう。昴は嘆息し、国生家に帰る際にはあの恥ずかしい貼り紙を剥がしておかねば、と胸に誓う。

まだ午前中であるし、やみそうにない雨が続けている。先ほど確認したところ、国生家はばつちり鍵をかけられてしまっていたし、しばらくここにいるしかない。

昴は水知の住まう住居によやく慣れてきたこともあつて、居間の床へと腰をおろし、あぐらをかいた。欠伸をしながら、きよろきよろと居間を見回す。

フローリングには絨毯がひかれておらず、冷たい感触が伝わってくる。テーブルも椅子も、柵一つ見当たらない。キッチンスペース

は使われていない様子で、やはり全体的に生活感がない。冷蔵庫もなかった。食生活はどうなってるんだろうか、とどうでもいいことが心配になった。

「チツ、テレビくらい置いとけって」

娯楽品が一切ないこの部屋で、昴は時間を持て余す。もちろん時計も置いていないので、時間の流れも曖昧になってしまう。

「ごめんね何も出せなくてー。お茶くらい用意しとけばよかったなあ。まさか昴がわたしの家に来て既成事実をつくるチャンス到来な事態は考えてなかったよ」

「俺も全く考えてなかった。そして二度と考えるな」

居心地が悪すぎる空間で、昴は逃げ出したい衝動に駆られるものの、やはり身動きが取れない。パジャマのままなので由梨絵の帰りを待つしかない。柚季の幼稚園が終わったら、由梨絵は一度家に帰ってくる。そのタイミングで頭を下げて家に入れてもらおう。土下座覚悟で。

頭の中で計画を反芻している間に、水知の姿が見えなくなっていた。

キョロキョロと周囲を見回すと、開け放たれた和室に目が留まった。

先ほど聞こえてきた、和室の押入れからの物音は一体なんだったのだろう……気にはなるものの、究極に怖がりな昴は確認することすらできずにいる。

和室に注目していたら、その和室からひょっこりと水知が出てきた。

どうやら死角になる位置に、水知がいたらしい。昴は心臓が張り

裂けんばかりに驚いたが、なんとか強面を保つことに成功した。これ以上恰好悪い自分は見られたくない。

「じゃーん！」

水知は小脇に抱えていた冊子を、昴の前へと差し出して見せてきた。

自慢げに、にんまりとしている。

「なんだよ？ …… ってえええ！！ ぬわあああ！！」

水知の差し出してきた冊子。眼鏡のフレームを指で押し上げて確認し、またも簡単に自分が崩れ去った。

水知の持っていたのは、グラビアアイドル鳥居美園の写真集だったのだ。

切り取った雑誌のページなんかも数枚あるし、古い雑誌なんかは擦り切れてしまっている。見覚えがありすぎた。

「これは俺のだ！」

昴は眉を吊り上げて立ち上がり、大股に水知へと迫って鳥居美園集団を奪い返す。

「盗んだのかお前！」

「借りたんだよ」

「かしてほしいなんて一言も聞いてないぞ！」

「かーしーてッ」

「今更遅いわあ！　なんで盗んだ！？　嫌がらせか！？　ストーカ―か！？」

まくしたてた昴は肩を上下させ、荒い息を吐き出す。
水知は平和な笑顔のままだ。

「昴の部屋に忍び込んだ時にね、押入れの中に隠してあるのを見つけたの。とりあえず回収しとかなきゃって思ってたうちに持ってきておいたんだ」

「とりあえず回収する意味がわからない！」

「昴は、この女の子が大好きなんだよね？」

水知に聞かれて、ドキリ、と鼓動が跳ねた。

「な、なんだよ突然……」

好きか好きじゃないかと聞かれれば、彼女が好きだから写真を収集しているに決まっている。しかしその感情がどれほどのものなのかと問われれば、昴には答えることができない。実際、鳥居美園に会ったこともないのだ。

「昴がこの女の子が好きだって知っちゃったから、決めたのです！」

「……何をだよ？」

「鳥居美園ちゃんを昴のハーレムに入れる！」

「は？ 何言つてんだこの妖怪？」

昴は大真面目な顔を向けてくる水知へと、可哀相な子を見る瞳を向けた。

水知は気付いた様子もなく、ガッツポーズを作っている。

「まず彼女を誘拐する方法を、昴と詰めていかなきゃね」

人差し指で、額を小突いた。

「あうっ」

水知が顔を仰け反らせる。顔を戻した時には泣きそうに瞳が潤んでいた。

「なにするんだよ」

「誘拐は犯罪だ。まずそのへんの常識を身につける妖怪」

「だってさ、グラビアアイドルだよ？ 誘拐でもしなきゃ、昴のハーレムに入ってくれるわけない」

「そういう常識は身につけてるんかい」

「とは言っても、わたしはなかなか身動きが取れないし……ね、昴、ちよろつと学校に行つて彼女を勧誘してきてよ」

簡単に言つてのける水知に、昴は眉間に皺を寄せた。眼鏡の奥から冷たい眼差しを、水知へと向けて放つ。

「嫌だね。俺は学校に行くつもりはない。お前だって俺と同じ学校

なんたる。しかも鳥居美園と同じ学年。声をかけるならお前の方が最適じゃないか。むしろ友達になって俺に紹介しろ」

「……うーん。行けるものなら学校に行きたいんだけどね　へくちっ」

水知が困ったように苦笑いを見せた後、小さくくしゃみをした。身震いし、鼻をすすっている。

「ほら、言っただろうが。やっぱり濡れたままだから、風邪ひいたんじゃないか」

「ずぶ濡れの方が元気が出るんだよ」

「なんでだよ」

昴は不機嫌に問いかける。学校の話題が出たあたりから、気分は沈んだものになっていた。自分でも分かっているけれど、学校の話題に対して頑なになっている。

「だって、わたし　乾いちゃうんだ」

「え？」

昴は呆けたように、水知を見つめた。

水知がベランダに続く窓際へと歩いて行く。その場所に立ち、昴に背中を向ける。

窓の向こうに見える雨を、穏やかな瞳で見上げている横顔が見えた。

「どんどん身体が乾いていつちゃうの。雨の日だったらなんとか動けたりするんだけどね。それでも昴の部屋に行くくらいが精一杯かなあ。学校には行きたいけど、やっぱり、今のわたしには無理で」

「

「ちょ、ちよつと待てよお前。乾いていくつてどういうことだ？」

昴が強張った面持ちで、水知の背中へうわずった声をかける。

水知は、やはり穏やかな瞳を昴に向けてきた。

「見たでしょう？ ミイラみたいになっちゃうの。完全に乾ききっちゃうと、死ぬの」

なんと声をかけてよいか分からないまま、気付けば長い時間が過ぎていた。

水知はぼんやりと雨を見ていたし、昴は無言で座っているしかなかった。

聞きたいことはたくさんあった。

でも、昴は何一つ問いかけられなかった。

他人の懐へと、踏み込むことができなかった。だから、聞けなかった。自分が嫌になり、昴は険しい顔を俯かせることしかできない。あまりのことに、空腹感もなかった。雨の音だけが聞こえてくる空間に身を委ねて、数時間。

昴はようやく立ち上がる。

「どこ行くの？ 昴？」

水知は外を見ているのかと思ったが、昴の気配は感じていたらしい。声をかけてくる。

「……帰るんだよ。お前と一緒にいると、息苦しい」

時間は分らないけれど、パジャマだろうと裸足だろうと、この空間から逃れたかった。

外で姉と柚季の帰りを待とう、と決意する。

「来てくれて嬉しかったよ。昴と一緒に過ごせて、楽しかった。……また、会えるかな？」

昴は水知の言葉に応えず、背中を向けた。

逃げるように早足で家を出て、後ろ手にドアを閉める。

ドアの向こうにいる、水知という少女の存在を頭から追い払うように、頭を振る。

「あ、佐藤、君」

傘を差した宮代翔子が、タイミングよくアパートの外階段を昇ってくる場所だった。

「ちょうどよかったです。今日もたまった学校のプリントを持ってきました」

性懲りもなく翔子が昴に近づいてきて、紙袋を差し出してきた。見慣れた大真面目な固い表情で、昴を見た後、頬を赤く染めた。

「なんでいつもパジャマなんですか」

「知るかよ。副委員長が俺のパジャマ姿が拝みたいんだろ」

「ちがつ……あのですね！ 今日来たのはそれだけじゃないんです！」

翔子が意を決したように、顔を上げる。眼鏡の奥の瞳が、昴を真っ直ぐ見つめてきた。

「佐藤君が学校に来ない理由を考えてみたんです。それで、あの、佐藤君も友達が出来たら学校が楽しくなるんじゃないかって！」

「は？」

雨が雑音のようにうるさくて、昴は忌々しげに顔を歪ませる。雨の音は不快だった。先ほどの少女の存在を、嫌でも感じさせた。

翔子が紙切れを差し出してきた。紙切れを持つ翔子の指先は震えている。

「だから、これ！」

昴は紙切れを見下ろす。

おそらく翔子の携帯の番号である、数字の羅列。ご丁寧にメールアドレスまで書いてあった。翔子は震えながら顔を俯かせ、ひたすらに紙を差し出している。

昴は その紙を、翔子の手を、はねのけた。
翔子が息を呑む。

「俺に友達がいらないから、友達になってあげる？ ふざけてんのかよ、お前」

「……あ、ごめんな」

「失せろよ。二度と俺の前に現れるな」

昴が言い放つと、翔子がくしゃりと顔を歪ませた。

背中を向けて、逃げていく。

昴はもう一度、水知の家のドアに身を預けた。深い息を吐き出す。濡れた髪を、耄り取るように掴む。

「なんでお前ら、俺の中に、踏み込んでくるんだよ……」

地面に落ちた紙が、雨の雫に叩かれて水分を含み、柔らかくなっ
ていく。

数字の羅列が、滲んでいく。

ハーレム二人目？

キーボードのキーが押しにくい。

イライラとしながら、なんとかマウスをスクロールさせていく。

エンターキー一つ押すのにも、一苦労だ。

「や、イズミちゃん」

唐突に、水知が顔をのぞかせてきた。

この場で明かりになっていたのは、繋いだパソコンのディスプレイだけだった。押入れを開けられて光が差し込んできたことで、目が眩む。

わずかに目を細め、水知を見た。水知は、儂げな笑顔を見せてきた。

「なんで無理矢理にでも襲わなかったんじゃ？」

問いかける。

水知は誤魔化すように視線を逸らし、四つんばいになってのそのそと押入れの中に入ってきた。押入れの敷かれた布団の上に座り、横に並んでパソコンの画面を見つめている。その横顔はやはり切なげで、本当はパソコン画面なんて見ていないことはすぐに分かる。

「うひょー！ 再生回数ハンパないねイズミちゃん！」

無理に造った明るい声が届いてきたので、わざと難しい顔を造って首を振る。

「今はそんなことを話してる場合ではないぞ」

脅すように言うと、水知は肩をすくめた。

「そんなこと言って、パソコンで遊んでばっかなのはイズミちゃんだつて一緒じゃないかー。目指せミリオン再生！ このままずっとこんな生活続けていくのも悪くないって思ったりしてるんでしょー」

ぐつと詰まってしまう。否定はできない。

こんな場所ですつと隠れるように過ごしてきて、幾数日。人目に触れられるわけにもいかず、肝心の水知はミイラ化現象で引きこもり。絶望的状况下で心の安息場になっているのは、パソコンぐらいなのだ。

動画投稿なんてしている場合ではないというのに。最近チャットにもはまってしまっている。タイピングが遅すぎるという弱点はあるけれど。

本当は、そんなのんびりとしていられる状況でもないのだ。

水知の身体は、限界に近い。

だからもう 手段は選んでいられない。

試してみる価値はあるかもしれない。柚季の情報を、信じるならば。

水知の方へとくるりと向き直り、真っ直ぐ視線で捉えた。

「水知、お前が助かる為には……乾いていく身体を止める為には、昴と夫婦の繋がりを持ってもらわねばならんのじゃ」

「知ってるよそんなことは」

ふう、と水知が頬を膨らませている。

「でも、昴はわたしみたいな人外が怖いんだ。だから無理なんだよ」

「ならば、死ぬことを選ぶというのか？」

「……仕方ない、のかなあ」

胸が苦しくなつて、目を伏せる。

水知は運命を受け入れようとしている。全て分かっていて、その上で昴の幸せだけを願っている。

イライラした。水知は本物のバカだと思った。昴という人物に、憎しみすら覚えた。

「我は、運命にあらがうぞ。その為には手段だって選ばない。どんな手を使つてでも、水知の命を助ける」

昴は国生家のドアの前で、かなりの長時間、雨に打たれていた。激しく降っているわけではなかったが、さわさわと細かい霧状の雨が絶え間なく降り注いでくる。まだわずかに肌寒さを感じる季節、パジャマ姿の昴の身は冷え切ってしまった。

柚季と由梨絵が傘を差して帰ってきた時には、昴の唇は青く、歯の根が噛み合わないほどになっていた。

「すばる、ただいま！ ユズ帰ってきたの」

「あれ、昴。アンタお隣さんの家にいたんじゃないの？」

のうのうと由梨絵が言ってくる。昴が無言のままでドアの前から

退くと、家の鍵を開けた。家に入る由梨絵の後についていく。昂の状態にさすがに同情的になったのか、由梨絵は何も言わずに、昂の中に迎え入れてくれた。

由梨絵が部屋の中に急ぎ足で上がって、タオルを取って戻ってきた。昂へと差し出してくる。

「柚季に聞いたのよ。昂と一緒に寝てた子、お隣に住んでる女の子なんだってね。私がない間、柚季もよく遊んでもらってるとか。何も聞かずに追い出して、あの子に悪いことしちゃったわ」

昂は玄関に立ち、濡れた髪や眼鏡をタオルで拭いていく。落ちたままの気分なので、言葉を発する気にもならなかった。横で柚季が長靴を脱いで、部屋へと入っていった。

どうやら柚季に助けられたらしい。誤解が解けたことで、昂は息をついた。

それでも表情は鬱々として、生気のない空ろな瞳が虚空を見ていた。

「ねえ昂。ちょっと手土産持つて、お隣さんに謝ってきてくれる？ ほら私は急いで仕事に戻らなきゃいけないから。今度改めて挨拶には行こうと思ってるけど。今日のところは頼んだわよ」

昂は由梨絵の言葉に耳を疑った。焦点の合わない瞳を、由梨絵に向ける。

「お隣の潮さん、母親と娘の二人暮らしなのよね？ 昨日昂が作ったお菓子と、特上のワインがあるから。ワインはよかったらお母様について言っておいて。お願いね。じゃあ柚季、いい子にしててね」

「ママいつてらっしゃいな」

柚季が元気よく、手を振っている。

呆然と立ち尽くす昴の横を、慌ただしく姉が通り過ぎていく。昴が正常な思考回路を取り戻した頃には、ボタン、と扉は閉められてしまった。

ダイニングテーブルには、袋にラッピングされたガレットとワインが籐の編み上げ籠にまとめて入れられている。

昴の手からタオルが落ちていき、ぱさり、と音をたてた。

「あの妖怪屋敷に戻れ、と？」

呟いても、時既に遅しかった。姉はもういない。

柚季が近付いてきて、昴を見上げてくるだけだ。

「ミイちゃんのおうちに行くの？ ユズも行きたいの！」

何も分かっていない柚季の平和な笑顔には、心が安らぐ。しかし、今から行く場所のことを考えると、暗鬱としてしまう。

それでも居候という立場上、姉の命令には逆らわない方が賢明なのは分かっている。朝の事件で追い出されるかもしれない方が賢明なを考えると、手土産一つで姉の機嫌がなおるならば万々歳だ。

玄関先で手土産だけ渡して帰ろう、と昴は諦めから溜め息を吐きだす。

一度自室に戻って、普段着に着替えた。朝からずっとパジャマのままだったので、ようやく心地ついた気分だった。

居間に戻ると、玄関で既に柚季が立って待ち構えていた。

真っ赤なカッパを着込んで、てるてる坊主みたいになってニコニコしている。

「すばる、いこ」

なんだか有名な童話を彷彿とさせるなあ、なんて考えながら、昴は手土産の入った籠を手にとった。

ドアを開けると、長く続いていた雨が、ようやく途切れ途切れになっ

てきていた。長靴で路面の水を撥ねさせて遊んでいる柚季の後ろを歩いていく。すぐに隣室にたどりついてしまった。

柚季では手が届かないので、昴がインタフォンを押してやる。

……反応はなかった。

二、三度押しても反応がない。

やっぱり帰ろうか、と踵を返しかけたところで、柚季が勝手にドアを開けてしまった。鍵がかかっていないドアは簡単に開いていく。

「おい柚季、何勝手に開けてるんだよ」

「だってユズがミイちゃんのおうちに行くときは、勝手に入ってきていいよ、ってミイちゃん言ってたの」

柚季が悪びれもせずに、中に入っていく。

昴は嘆息し、柚季の後に続いた。玄関で靴を脱いで、家にかかる。居間は静寂に満ち、誰の姿も見えなかった。家具もないので、がらんとしすぎている。ベランダに続く窓の向こうに、霧状のような雨が見えるだけだ。先ほど水知が窓辺で雨を見上げたい光景が、フラッシュバックする。すぐに振り払った。

彼女のことを考えると、苦しくなった。だから、目を背けることしかできないのだ。

「いたいたミイちゃん！ あれ、どうしたの？」

柚季が和室の方へと、パタパタ走っていく。

昴も柚季の声を聞き、恐る恐る、和室に視線を遣った。

先ほどと違って、和室には布団が敷かれていた。

分厚い掛け布団をすっぽりと被っている水知の顔半分は、隠れて見えなくなっていた。布団の上に散らばる鮮やかな水色の髪、透き通るような白い肌と、潤んだ大きな瞳。何度見ても胸がときめいてしまう美しい少女が、じつと昴と柚季を見つめていた。

「どうしたのミイちゃん？　ぐあいがわるいの？」

昴はドキリ、とした。

先ほど水知から聞いた言葉を思い出していた。彼女は、どんどん乾いていく。最終的にミイラとなって死んでいく。もしかして、今がその時なのではないだろうか

遠くから水知を見下ろすと、布団がもごもごと動いた。

『お土産を持ってきてくれたんだね、どうもありがとう昴』

昴はくわつと目を見開き、眼鏡がずり落ちていった。くぐもった声が耳に届いた瞬間、腰元にビリビリと電流が駆け抜けたのだ。慌てて眼鏡をかけ直し、落ち着くなく周囲に視線を巡らす。

「ミイちゃん、だいじょうぶ？」

柚季が首を傾げ、水知の布団の前に腰を下ろしている。

『風邪をひいちゃったみたいじゃ……みたいだよ？』

不自然に言い直してから、水知がゴホゴホと咳払いした。布団が揺れる。

水知の声が耳に届く度、身体に力が入らなくなっていく。甘く蕩

けるような、美声が耳を鷲っているようで、昴は耳元をおさえる。頬が熱く、心拍数は急上昇だった。

「お風邪をひいてるんだ……でもおふとんそんなにかぶってて、苦しくないの？」

柚季が問いかけている。昴は腰くだけ状態で、その場にへたりこむ。

『それはお口を隠してないと、ばれ……じゃなくて、寒気がするから布団をかぶってるんだよ』

「そうかあ。じゃあミイちゃん」

『なあにユズちゃん？』

「なんでそんなにかわいいお声なの？」

『それはね……昴を惚れさせて、昴を食べ』

最後まで聞くつもりはなかった。

昴は力を振り絞ってなんとか立ち上がり、ずかずかと大股に和室へと踏み込む。

「そこかあああああ！！」

絶叫し、押入れを開け放った。

緑色のぬいぐるみが、押入れの中にいた。昴の方を見て驚いているのか、持っていた台本を取り落とし、尖った口をパクパクさせていた。

昂も驚いた。想定外の事態に、悲鳴を上げることすら出来ず、緑色のぬいぐるみを見下ろす。

そこにいたのは カップがかわいらしくデフォルメされた感じの、二頭身サイズの小さなぬいぐるみ。明らかにアワアワと口が動いているし、ボタンで造られたつぶらな瞳が白黒している。

「何故ばれたんじゃ！」

カップが喋った。それは、先ほど水知が発したように聞こえた、究極に可愛い声だった。カップのくせに。

「ばれるに決まってるだろうが！ 明らかに声は、押入れの方から聞こえてきたんだからな！」

幼い柚季は騙せたとしても、昂はそこまで鈍くはない。天使の囁きのような声を聞いて鼓動を高鳴らせつつも、しっかりとその声がどこから聞こえてくるのかを確認していた。

水知が布団から這い出してきた。

「やー失敗失敗。やっぱりこんなんで昂を惚れさせるのは無理だよ、イズミちゃん」

イズミ、と呼ばれたカップがしゅん、と項垂れている。

昂はそれを見て、少し胸がキュン、としてしまったのは嘘だと思いたい。

「可愛い声で迫られたら昂はイチコロなんじゃ。だから、水知が可愛い声だったら水知に惚れるはずなんじゃ」

「そんなんでは惚れるか。俺がどれだけ単純な人間だと思ってるんだ」

「だってだって、ユズが言ってたんじゃああ。イチコロだって言ったんじゃああ」

うるうるボタンを潤ませているイズミ。その様子があまりにいじらしくて、頭の皿を撫で回してやりたい衝動に駆られてしまったのは嘘だと思いたい。

究極に短い手足で、のそのそと押入れの中から出てくる。カッパのぬいぐるみが動いているというシユールな光景に、柚季はこれ以上ないくらいに瞳を輝かせていた。

触覚髪を揺らしながら走り寄ってきて、イズミを抱き上げる。

「うあ、何をするんじゃっ」

「とってもかわいいの！ すっごくかわいいの！ ユズ、このぬいぐるみほしいの！」

ぐりぐりと頬ずりされて、カッパのぬいぐるみは焦って逃げ出そうとしている。

「そういえば、昨日ユズちゃんが家に来た時に、わたしとユズちゃん、そんな会話したっけ。聞いてたんだねイズミちゃん」

水知が肩をすくめている。水知に肩をすくめさせるとは、イズミはどれだけ問題児なのだ、と昂は愕然としてしまった。

「呆れてないで助けるんじゃ水知！ もげる！ 千切られるううう！」

完全に喋るぬいぐるみに勘違いされているイズミがぎゅうぎゅう

と抱きすくめられて、鈴のなるような声で悲鳴を上げている。

昴は水知に向き直って、問いかけた。

「こいつ、誰だよ？」

「そういえば紹介がまだだったね。ここにおわすのは、カッパのぬいぐるみ　じゃなくて、潮和泉ちゃん！　わたしのお母さんだよ！　水の神様だよ！」

突っ込みどころが満載すぎて、昴は頬を引き攣らせることしかできなかった。

ハーレム二人目？（前書き）

ちよつと設定の開示がー気すぎたかもしれません><
ややこしいorz

分かりにくかったら申し訳ないです。要改稿部分かもです。

ハーレム二人目？

「仕方ないからおぬしのハーレムに入ってやるのじゃ」

ようやく袖季に解放された全身緑色のぬいぐるみが、のっぺりした胴体をふんぞり返らせている。お腹の中には綿がいっぱい詰まっているに違いない。そのらぶりー容姿に似合わず、全身から高慢なオーラを発しながらの宣言だった。

魔力でも込められているかのような魅了の声が耳に届く度に、昂の頬は緩みかけてしまう。慌てて頬を引き締め、眼鏡の奥から冷たい眼差しを、イズミへと向けた。

「何か言ったか？」

昂は立ち上がった状態で、高度から小さなぬいぐるみを見下ろす。ドスのきいた声で問いかけると、イズミが瞳を潤ませてぺしゃんこな表情となる。威厳はあっさりと崩れ去った。亀のこうら背負っているところで、最初から威厳なんてあったものじゃない。

「いいから入れるのじゃ！ 我は昂のハーレムに入らねばならんのじゃ！」

今度は駄々っ子のように全身をばたつかせて、言ってくる。イズミの声に昂の全身がゾクゾクと震えた。正気を保つ為にぐっと腹に力を込める。何故謎のカッパごときに惑わされているのか、悔しい思いもある。

鋭い睨みで、イズミを見据えた。

「水知にハーレム作れって言ったのは、俺の適当な嘘だ。そもそも

俺はハーレムを作ろうなんて思ってもいないし、ハーレムにカップはいらない。カップはいらない」

「二回も言う必要があるんじゃないか!？」

昴にハーレム作れ宣言された水知はというと、イズミと昴の会話する横で、我関せず状態でお菓子を頬張っている。昼下がり、程よく小腹が空いてくる時間帯である。水知の横で柚季も座って、二人でほのぼのとおやつタイムを楽しんでいる様子だ。

イズミが緊張感のない顔を、眉をキリリと上げてなんとか真面目に取り繕った。

「確かに、俺様ハーレム作れなんてよくもそんな鬼畜なことを言うてのけるなと我も思った。でも、その話を水知から聞いた時、我は一筋の希望の光を見た気がしたのじゃ。昴の願いを聞き入れる為にここにきた我らにとって、ハーレムを作ることこそが、一番の方法なのではないかと」

「ちょっと待て」

昴はイズミの言葉を遮る。イズミが今、聞き逃せないことを言っただからだ。

「俺の願いを聞き入れる為にここにきた？」

イズミは深刻な表情のまま、こくりと頷く。

「そうじゃ。我はおぬしの願いを叶える為にここにいる」

「意味がわからん。俺の願い？ 俺が何を前にも願ったっていうん

だよ？」

「忘れたとは言わせんぞ！ おぬしは昔、オバケ屋敷でハリボテの神社に必死に願ったじやろうが！ 長時間に渡って何度も、何度も！ みんな僕のこと好きになっ 「わあああああ！」」

今度こそ、昴はイズミの言葉を必死になって打ち消す。頬に熱を帯びていくのを感じ、眼鏡を指で押し上げながらさりげなく顔を隠す。動揺で指先が震えてしまっていた。

「な、んで……そのことを知ってる？」

幼少の頃、オバケ屋敷の中で姉とはぐれて、数時間うずくまって泣き続けた記憶。それがトラウマとなつて、幽霊妖怪系が全くダメになつてしまったのだ。覚えていないはずがない。昴にとつて黒歴史であるのと同じ、今でもどの記憶より鮮やかなまでに思い出せる。昴がうわずった声で聞くと、イズミは深く息を吐き出した。

「知ってるも何も。おぬしがハリボテでつくられた水神様を祀った神社に祈ったことが原因で、我という神格が宿ってしまったんじゃない」

「……は？」

「おぬしの願いでつくられたのが我だから、おぬしの願いを叶えることができれば、我は本物の神様にはなれない。それこそ未完成のハリボテの水神様なんじゃ。いちきしまひめのかみ（偽）ってところじゃ」

昴は言葉を失い、カップのぬいぐるみを見つめることしかできない。

水知と柚季は全く話を聞いていない様子で、二人で手遊びをはじめてしまった。潮家の和室は今、深刻な空気とほのぼのした空気が混在する、おかしい空間となりつつあった。

「俺が願ったから、お前みたいな人外が生まれたってことなのか……？」

「そうじゃ。おぬしの願いを聞き入れる為に、我は少しずつ力を溜めて、ようやくここまでたどりついた。神通力をほぼ使い果たしてしまった我は、このぬいぐるみに精神を宿らせるのが精一杯じゃった。大体に、我の力の源となるおぬしが全く頼りないせいなんじゃ。引きこもり？ 不登校？ 冗談じゃない。おぬしが願いと全く真逆の立場にいるせいで、我の力までほぼなくなってしまったじゃないか！ アホめが！」

ここぞとばかりに罵声を浴びせてくるイズミに対して、昴は強く出ることはできなかった。混乱していたが、イズミの様子は真剣そのものだったし、切羽詰った様子だったからだ。

「じゃあ、こいつは　こいつは、なんなんだよ？」

昴は水知を乱暴に指差した。水知が昴の方を見て、ほえ？　と首を傾げてきた。やっぱり話を全く聞いていなかったらしい。

「水知は、我が召喚した使い魔じゃ。……最初は、水知が昴の願いを叶えて、我に神通力が戻ってくる手筈だったんじゃ」

イズミが自嘲気味に漏らす。

昴はボロボロと出てくる事実についていけず、俯いて考え込むことしかできない。

みんな、僕のこと好きになつて。

昴が幼少の頃に強く願ったことを叶える為に、イズミという神様が水知という使い魔を引き連れて昴の目の前にやってきた。そこまではやつとのことで理解できた。受け入れがたい事実ではあるが。

「で、なんでハーレムは必然なんだよ？」

「ハーレム」昴のことをみんな好き。つまり、昴がハーレム状態であればあるほど、我は昴の願いを叶えていることになるのじゃ。力もどんどん増長されていく。なんと素晴らしい提案をしてくれたんじゃ、と我は目から鱗が落ちたぞ。神通力が戻ってくれば、奇跡だつて起こせるんじゃ。完全な神様となれば、おぬしなどもう用無しじゃ。ぺっ」

「今お前の本音が垣間見えたのは気のせいかな？」

目の前でハツと口をつぐんでいるイズミは放っておき、昴は水知へと視線を移す。

気付けば無意識に、眼鏡の奥の目を細めて、唇を引き結んでいた。首を傾げて、わずかな微笑みを昴に向けている美少女　水神様（偽）の使い魔、水知。つまりは

昴は顔を俯かせる。

つまりは、水知が昴が好きだという気持ちは、昴の願いによつてねつ造され、歪みの上にできあがった感情なんじゃないか。胸が締め付けられるように、痛くなった。再び息苦しさに戻ってくる。

目の前の少女が、直視できなくなる。

「あ！　そういえば、わたし、ちゃんと自分の口で言ってなかったよ！」

水知が言ってくる。

「……なんだよ」

「あのね、わたし、昴のこと　大好き」

よりによって、このタイミングで。

昴は唇を噛み、拳を固く握り締める。顔を上げることはできなかった。

表情は強張り、眉間に寄せていた皺が、いつもよりも深くなっていた。

「……言っな」

「んー？」

「二度と、俺にその言葉を言っな」

昴は意を決して顔を上げ、水知を挑むように睨みつける。

水知は、笑みが顔に張り付いたまま、固まってしまった。

「いいか妖怪ども。俺の願いによってお前たちが大変な目に遭ってるっていうのはわかった。その責任は取ってやる。ハーレム作りに協力はしてやる。でもそれだけだ。それ以上の干渉は、二度と、一切してくるな」

昴はこれ以上ないくらいに冷たい言葉を投げつけた後、水知から視線を逸らした。

視界の端で袖季までもが固まって、昴をこわごわと見上げていた。

イズミはあわあわとしている。

「帰るぞ、柚季」

「う、うん」

柚季が立ち上がり、昴の近くに寄ってきた。

「あ、あのう。それで、我のハーレム参加の件は……？」

揉み手をしながら、イズミがおずおずと聞いてくる。

「誰かがハーレムに参入しなきゃ、お前の神通力が戻ってこないんだろ？ だったら勝手に入ってる」

「あ、ありがとうございます昴様ああ」

ははあ、とひれ伏してくるカップアのぬいぐるみ。完全に立場が逆転している。

昴は背を向けて、足早にその場を離れていく。水知のことは敢えて意識して、見なかった。視界に入れることすら、拒絶した。

ドアを開き、外に出た。アパートの庇に遮られた、狭い空を見上げる。

雨はやんでいた。どんよりと灰色の雲に覆われている。

『わたし、昴のこと 大好き』

「全部嘘なんだろ」

今更、吐き捨てる。胸が痛くて、泣いてしまいそうなのが悔し

くて、全部、拒絶することしかできなかった。
雨なんて、大嫌いだ。本心からそう思った。

夜がすっかり深まった時刻、昴はバイトに行く為に国生家を出た。
住宅街のアパート周辺は静寂に満ち、薄闇に覆われている。昴が
外階段を降りていく音ですら、大きく響く。

駐車場に停めておいた原付の前に立って、息を吐き出した。生温
かい風の中にまだ湿気が残っていて、昴は眉を顰めた。

意を決してポケットから取り出したのは、携帯電話だ。国生家に
いる間は、人目が気になって行動できなかった。今だったら周囲に
は誰もいない。

「協力するって言っちゃったしな……これは、仕方ないんだ……あの妖怪どもの為なんだからな……」

誰に言うでもなく、暗がりの中でブツブツと言い訳じみた呟きを漏らす。

先ほど登録した番号を、思いきって押した。回収しておいたメモは雨に滲んでしまった所為で、アドレスまでは読み解くことができなかったが、かろうじて電話番号の暗号解読には成功したのだ。かなりの時間を労してしまったが。

『はい？』

耳にあてていた携帯電話から、相手が出た声が届く。

「もしもし！」

声が裏返ってしまった。顔から火を噴くかという思いで、言葉が出てこなくなってしまう。心臓が早鐘を打ちすぎて、飛び出しているさうだった。今喋ったら、心臓が飛び出す。昴は結局何も言えず、無言で立ち尽くす。

しばらく、無言の時間が続いた。

『もしかして……佐藤君？』

翔子の声が届く。

「あ、ああ。俺だ。その、あの、なんていうか、」

さつきはごめん。俺と、友達になってください。

あんな風にひどく傷つけた相手に、今更言えるのか？

昴は思考の波に溺れ、またも黙り込む。やっぱり、ダメなのだ。

自分には、人と繋がりを持つ努力なんて、どう足掻いたって、できない。

『さつきは本当に、ごめんなさい！』

謝ってきたのは、翔子の方だった。昴はハッと息を呑む。

『あんな言い方して、佐藤君の気持ちを考えていませんでした。本当にごめんなさい。私、恥ずかしかったんです。だから、言い訳みたいに、あんな言い方しちゃって……』

昴は翔子の言葉を耳元で聞く。

『私、佐藤君と、友達になりたいんです。友達に、なってください。……あの、ダメ、ですか？』

昴は俯き、ただ、すごいなあと思う。胸が熱くなって、携帯電話を強く握り締めていた。

翔子は、傷つくことを恐れずに踏み込んできた。

自分がずっと出来なかったことを、真面目そうで脆そうな女の子が、やってのけてしまった。

彼女には、敵わない。

昴は、深く息を吐き出し、口元を吊り上げた。

「ああ」

肯定の言葉を紡ぐ為に、顔を上げた、瞬間だった。

昴の手から、携帯電話が落ちていく。

外灯の頼りない光の下、電信柱のかげに隠れるようにして立っていた人物に、目が留まったのだ。下がっていた目元が、大きく見開かれていく。

かしゃり、と地面に落ちた携帯電話から、翔子の声が遠く聞こえてくる。

相手は見つかったことに気付いたのか、それとも昴のニヤケ顔を間近で見て恐れをなしたのか、表情を強張らせてじっと昴を見ていた。

「あ、あ、あ」

「み、見てないわよ！？ 笑った顔がこの世の終焉のようだったなんて思っただけだよ！？」 あまりの恐ろしさに心臓が冷えてガクガクブルブル状態なんかじゃないわよ！？」

後ずさりながら、昂に向けて必死な言葉を投げかけてくる女の子。
グラビアアイドル、鳥居美園だった。

ハーレム三人目？

昴の目の前には今、現実離れしている程のオーラを放つ美少女がいる。彼女自身が光輝いているようだ。

アパートの駐車場には外灯が申し訳程度に、周囲を鈍く照らしている。視界が悪い中でも、鳥居美園の姿は鮮明に見えた。

緩くウェーブさせている髪を盛り上がった胸の上まで垂らし、変装のつもりなのか帽子を目深に被っている。その帽子の下からのぞき込むようにして、黒目のくつきりとした大きな瞳が昴を観察している。

服装はチェックのシャツにショートパンツと、カジュアルだ。しかし素晴らしい体型は隠しきれていない。ほぼ水着姿の美園しか見たことがなかったので、想像していなかった可愛らしい私服姿。昴は眼鏡がずり下がっていることにも気付かず、しばし見惚れていた。

「君、このアパートの住人よね？ 夜になるとよく、このアパートから出てくるし……」

ようやく平静を取り戻したのか、美園が近付きながら話しかけてくる。

昴はいまだ、これが現実とは思えなかった。自分の大好きだったアイドルが目の前にいる。写真でしか知らなかった彼女が、実際に動き、声を出している。

「……よく？」

それでも何度も美園の言葉を頭の中で反芻させ、美園の言葉に引っかかりを感じた。

「よくって……なんでそんなこと知ってるんだ？」

美園が自分の失言に気付いたのか、慌てた様子で口を覆う。

「よくなんて言っていないわよ！？ 空耳じゃないの！？」

「あ、その、アンタって鳥居美園、だよな……？」

昴は拳動不審になりながら、なんとか言葉を絞り出す。心臓が高鳴りすぎて、夢見心地で足が地面についている感覚すらない。

美園がこくり、と頷いた。

美園が自分と同じ学校だという情報は、翔子から聞いて知っていた。しかし同じ学校と言えど、まさか自分の住居前で美園に会うという事態は予測していなかった。

ふ、と水知の言葉が脳裏を過ぎった。

『鳥居美園ちゃんをハーレムに入れる！』

水知がなんらかの不思議な力でも使って、美園をここに呼び寄せたのだろうか。昴は考えて、すぐに首を振った。水知は不思議な力を持っていないと言っていた。だとしたらこれは完全なる、偶然の奇跡なのだろうか。

「ありがとう神様……！」

舞い上がったまま、昴は小さく呟く。不審げな眼を美園から向けられているが、その眼差しすら眩しい。

神様と呟いて頭の中に浮き上がってきたカップを消去した。

「ね、君。このアパートに潮水知って住んでるの、知ってる？」

「は？」

「潮水知。同じ学校なの。って言っても、入学式の日に一回来ただけの子なんだけど。ここに住んでるって調べ……じゃなくて、人に聞いて」

昴は固まったまま、美園の言葉を聞く。

まさか美園から水知の名前を聞くとは思わなかった。やはり美園がここに現れたのは、水知に関係しているということだろうか。

「水知は俺の隣に住んでるけど」

言つと、美園が一步、いや、二歩、三歩、ずんずんと大股で歩み寄ってきた。

触れられそうなほど至近距離まで迫ってきた美園が、見上げてくる。

「本当に！？　もしかして、君、潮水知と親しかったりする！？　家が上がったりしたことある！？」

魅力全開の美園が近すぎて、昴は思考がショートした。爆発した。心配停止状態だった。

棒立ちになったまま、がくがくと何度も頷くことしかできない。

「お願いがあるの。あたしを潮水知の家に連れていつてくれない！？」

やはりがくがく頷くしかない昴。

「ありがとう！」

昴の両手を取って、弾けるように、美園が笑顔になった。

昴も弾けた。自分が人間として機能していることが申し訳なくなるくらい、完璧なエンジェルスマイルを間近で見てしまった。すぐに美園は昴の手を解放してきたが、手の平が燃え上がるように熱かった。

「ところで君、携帯電話落としたままだけど、いいの？」

蕩けた思考のまま、美園の言葉に従って地面に落ちた携帯電話を見遣る。機械のようにぎこちなく拾い上げた。

携帯電話はまだ通話中のままだった。昴は何も考えられないまま、携帯電話を耳にあてる。

『佐藤君聞こえてますか！？ 何があったんですか！？』

こちらの状況を把握していない翔子の、切羽詰った声が耳に届いた。

「何も問題ない」

昴は応える。

『そ、そうですか。よかったです。何も問題ないならいいんですけど……』

「愛してるぜ副委員長」

昴は囁く。

『はい？』

「また後で電話するから。じゃあな」

言つて、すぐに電話を切った。漏れ出しそうな笑みを必死で堪え、既に歩き出していた美園の背中を追う。こんなに至福のひとときを過ごすのは、久しくない。

世界中の人たちに、愛を振りまきたい気分だった。

コンビニのバイトも完全に忘却の彼方へと追いやられ、昴と美園は潮家に向かっていた。

暗がりの中で恐ろしい貼り紙が潮家のドアに貼られているのが見えて、昴は早足で駆け寄っていく。

躊躇なくその紙を剥がし、その場でビリビリと破り捨てた。

「何してるの？」

「気にするな。処理を忘れていたんだ」

時刻は九時過ぎ。静まり返った小さなアパートに、美園という存在はどこまでも異質な空気を放っている。CGで合成した映像のようだ。

さすがにまだ寝ている時間帯ではないだろう、と昴は遠慮なくインタフォンを押した。

期待の眼差しでスバルを見つめる美少女にいいところを見せる為

だ。いつもより積極的な昴は、インタフォンの反応がなかったので、ドアを数回叩いてみる。

「留守か？」

待つてみても誰も出てこない。

そこまでして、ようやく冷静な思考回路が戻ってきた。

ハッと空を仰ぐ。無数の星が散りばめられた、澄み渡った夜空がひろがっていた。

水知が、動けるはずがないのだ。雨が降っていない。

そして同居しているイズミは、出るわけにはいかない容姿だ。

「今日はいないみたいだ。また今度の機会に……」

昴が美園を振り返り、気まずそうに言いかけた時だった。

ガチャリ、とドアが開いた。

まさかの音に驚いて、昴はすぐ様そちらに顔を向ける。

顔をのぞかせた水知と目が合ってしまった。

水知は相変わらず全身が濡れそぼった状態で、ぶかぶかとしたパジャマ姿になっていた。

「ごめんねシャワー浴びてたから出るの遅くなっちゃったよ。どうしたの昴？」

先ほどの別れ際の気まずさが蘇り、昴は咄嗟に視線を逸らす。

水知の方は、いつも通りの柔らかい微笑みを昴に向けてきていたのが視界の端に映る。途端に後悔した。美園という存在に浮かれて、自分から踏み込んでしまった。

「あたしが頼んだの。どうも、潮水知さん」

美園が昴の前にずっと出てきた。挑むような瞳で水知を見ている。

「……えーと」

水知は首を傾げている。

「誰でしたっけ？」

笑顔のままで言ってきた水知に、美園がぐくりと頂垂れた。

「鳥居美園！ あなたと同じ学校で、同じクラスの！ 知らないとは言わせないわよ！？ これでも有名人なんですからね！」

胸を張って宣言する美園。水知はしばらく新生物を見つけた学者のようにまじまじと興味深げに見入り続け……

「ああああああ！！ 鳥居美園ちゃん！！」

大声を上げた。アパート中に、大声が響き渡る。

「ちょ、ちよっと！ 声が大きい！ とにかく中に入れなさいよ！」

「うんうん！ どうぞどうぞ！」

想像以上に元気な様子の水知が、昴と美園の二人を中へと招き入れてくれた。

雨が降ってなくても全然大丈夫なんじゃないか、と昴は内心で安堵の息をつき、部屋へと上がっていく。すぐに和室へと目を遣った

が、カッパのぬいぐるみの姿は当然ない。相変わらずの、生活感のないがらんとした居住空間だった。

美園が住居内を物珍しそうに観察している間に、昴は水知にさりげなく近付いていく。

「カッパは押入れか？」

背後から小さく問いかけた。

水知が昴の方を振り仰いできたので、昴はそちらに目を向けられないようにして、眼鏡のフレームを指先でいじる。

「イズミちゃんは押入れでチャット中だよ」

「カッパのくせにチャットしてんのか」

「カッパのくせにチャットしてるんだよ」

昴は呆れて肩をすくめるしかない。先ほどのイズミの話しっぷりでは深刻な事態だと言っていたのに、呑気なものだ。

水知の様子も元氣澆刺としているし、大袈裟に考えるほどのことでもないんだろう、と昴は考える。

乾いていく少女は、変わらずに水色髪を揺らしているし、つやつやとした肌も、ふっくらした頬も健全だ。

「ね、ね！ 美園ちゃん！」

水知が元氣よく美園へと駆け寄っていく。

美園が水知を見つめている。美園の方がわずかに背が高い。その場だけ見れば、二人の美少女がいる空間は昴にとって素晴らしい目の保養だった。普段は常時鋭い眼なのだが、垂れ下がっていきそう

だった。

「昴のハーレムに入ろうよ！」

昴の緩かった眼差しが、ぐわつと殺意を帯びた。

「昴のハーレム？」

美園が眼をきょとんとさせている。驚いた表情はあどけなく、大人びた容姿が幼くなる。

「そうそうハーレム！ 昴のハーレム！」

最悪なことに、全く悪意ない様子で水知が昴を指差して言う。
る。

「君…… 昴って言うの。ハーレムなんて作ってるの？」

美園が昴の方へと視線を移して、聞いて来た。その眼は厳しいものとなっている。当然だろう。ハーレムを作ってる男なんて、女の子から見たら最低野郎にしか映らないものだ。

心臓がヒヤリとして、美園の厳しい眼差しの前に何も言えなくなつた。

「そうだよ！ わたしは昴のハーレムを作る為に日々頑張っているのです！」

美園と並ぶと、水知のささやかな胸が更にささやかに見える。その胸を張って、自慢げに語る水知。

昴は更なる殺意に、ふるふると拳を奮わせた。しかし美園の前に

するといつもの毒舌もなりをひそめてしまう。結局棒立ちのまま、眼鏡の奥から呪いの眼差しで水知を刺すしかない。

「昴は美園ちゃんのこと大好きなんだよ。だからハーレムに入っ
て、みんなで仲良くしよう?」

水知は全く昴の殺人ビームに気付いていない。

空気を読まずに、へらへらと笑みを浮かべ、戯れ言を繰り出して
いる。

「嫌に決まってる」

あっさりと美園に一蹴されていた。

「ハーレム? 冗談じゃないわよ。そんなものにみんなのアイドル
のあたしが入るとでも? 大勢の中の一人になるなんて死んだ方が
マシ」

写真の中の美園は、いつでも清純そのものの天使の笑顔だったが、
今日の前にいる美園は蔑むように昴を見据えていた。高慢な雰囲気
を放ち、プライドの塊のような宣言。どうやら美園という少女は、
キツイ性格の持ち主らしいと知る。

しかし美園の本性を知って、尚、昴は美園の可愛さにノックアウ
ト状態だった。

高慢ちきな彼女も可愛い、と腐った思考で考えていた。

「水知、あなたは、昴のことが好きなわけ?」

呆れ顔の美園が、ずばりと遠慮なく水知へと問いかけている。
水知の笑みが、ずっと顔から消えた。

「……うつん」

俯き、弱弱しく首を振っている。先ほどまでの元気が、完全になくなってしまった。

「どう見ても、好きなようにしか見えないけど？」

「……好きじゃないもん」

水知が眉を下げて、呟いた。

昴はその言葉に、胸がちくり、と痛んだ。自分で望んだことなのに、実際そんな風に言われると、もやもやとしてしまう。

「好きじゃないよ。昴のことなんか、ミジンコほども、ちっとも、好きじゃ、ないんだよ……？」

言った直後　水知の瞳から、涙がこぼれ落ち、頬を伝っていった。

せきをきったように、ぼろぼろと、大粒の涙が落ちていく。自分が泣いていることに気付いている様子もなく、一生懸命に首を振り続けている。

「好きじゃない。好きじゃないもん……」

昴は言葉を失う。締め付けられるような苦しさに再び襲われて、その場から逃げ出したくなる。

「……あたし、帰るわ」

先に動いたのは美園だった。

早足で玄関へと歩いて行き、一度も振り返らずにドアの向こうへと消えてしまった。素早い退出に、昴は啞然と見守ることしかできなかった。

水知は泣き続けている。しゃくりあげて、肩が何度も上下している。

堪えようとしているのか、唇を噛んでいるけれど、涙は全く止まらない。

タイミングを逃した昴は、困ったように立ち尽くす。

「鳥居美園は、ここに何しに来たんだろうな」

ぼつりと呟いてみるものの、泣きやむ様子のない水知の方が気になって、そんなことはどうでもよくなってくる。

「泣きすぎると、全部水分抜けちゃうんじゃないのか……？」

「昴のことなんか、好きじゃないんだよ」

「分かったよ……」

痛いほどに伝わってくる気持ちに、昴は応えてやることはできない。

それでもなんとか勇気を振り絞り、指先を伸ばす。

水知の頭を、そっと撫でてやった。

ハーレム三人目？

土曜日、昴は底抜けに青い空を見上げていた。

眩しい陽射しに目を細める。雲の一つも見当たらない。

制服の衣替えも間近、半袖でくればよかったなと思う生暖かい空気を肌を感じる。十時の待ち合わせに現れた女の子は、ぴっちり到着込んだブレザー制服姿だった。見ているだけで暑苦しい。

「こんにちは佐藤くん！ 今日のはあの、よろしくお願いします！」

昴の元に駆け寄ってきた女の子、宮代翔子は深く腰を折り、丁寧なお辞儀をしてきた。

駅前ロータリー広場は閑散としているが、人の目が気になって仕方ない。息を弾ませている翔子を見ると、昴の緊張は一気に高まっていた。

「休みの日まで制服か」

昴はわざとらしく舌打ちし、口先で小さく呟いた。

翔子の分厚い黒フレームの眼鏡と、野暮ったく長い三つ編みもやはり変わらず。それでも数日前に晴れて友達になった翔子を前にすると、本音は心が躍って仕方ない。はじめて出来た、異性の友達だ。翔子の方は昴の小声に気付かなかったのか、顔を上げて昴を見つめてきた。その頬はほのかに染まっている。

「な、なんかこういうのって、緊張しますね……なんていうか、その……」

翔子が言わんとしていることは、なんとなく理解できた。

昂は座っていたベンチから腰を上げ、凝り固まった背筋を伸ばす。実際、緊張度では翔子を勝っている自信がある。神経が張り詰めているあまりに、一睡も出来なかった。一時間も早く待ち合わせ場所に来てしまった。

「デートみたいだな」

昂が自然を装って言ってみると、翔子の顔が更にヒートアップした。

「ちっち違いますよ！？ そうつつもりで誘ったわけじゃあ！」

「分かってるそんなことは」

翔子から「せっかく友達になったのだし、二人で遊びに行きませんか！？」とお誘いがあったのは、一昨日のこと。

その日は美園と初めて会った日であり、水知を初めて泣かせてしまった日であり、翔子と友達になった日だ。ついでにバイトをさぼった日でもある。あまりの出来事の連続で、呆然と自室に戻った昂は、翔子に折り返し電話をする約束をしていたことを思い出した。

電話してみると、すでに友達ということになっていた。そして何故か、翔子の声は浮かれていた。

『外で遊んでみるのも、楽しいと思うんです！ ほら、友達と一緒に遊びに出かけますよね。友達ですから、二人で出かけるお誘いをするのは、変なことじゃないです。友達ですからね』

言い訳がましい言葉を繰り返す翔子の目論見が読めた。家にこもっている昂を外に連れ出して、外の楽しさを教えようというところだろう。翔子が昂を学校に連れ出したいという気持ちは、言葉に出

さずともヒシヒシと伝わってくる。

お節介な副委員長だ、と横目で翔子を見遣る。翔子はきよるきよる周囲を見ながら、口の端がむずむずと動いている。表情が緩んでしまいそうになるのを、必死で引き締めている様子だ。何がそんなに楽しいのだろうか。

「どこに行きましょうか。駅前くらいしか何もありませんし、この辺りで何か探しましょうか」

翔子が足取り軽く、歩き出す。昴は横に並び、歩調を合わせた。

「お昼にはまだ早いですよね。佐藤君は、こういった場所が好きですか？ ショッピング？ カラオケ？ ゲームセンター？ 映画？ それともアウトドア派ですかね？ 男の子とのお出かけなんて初めてなので、結局何も思いつかなくて」

「俺だって初めてだ。副委員長の行きたいところでいい」

「私の行きたいところですか……あ、あのあのあのその、ゲームセンターとかとかとか！」

「なんでそんな壊れてるんだ。でも意外だな、副委員長がゲーセンとか行くんだ」

「決して、決してプ、プププリクラとかが目的なわけでは」

「よしゲームセンター行くぞ」

昴は翔子の言葉を遮り、先に立って歩き出す。眼鏡を光らせ、早足に目的の場所へと向かう。

ゲームセンターには、昴が手を伸ばしても決して届かなかった、憧れの聖地があるということを忘れていた。プリクラコーナーという聖地が。手に入れたプリクラは私物やら手帳やらに貼って、楽しむもよし。そのまま取っておいて、ことあるごとに見返して不気味な笑みを浮かべるもよし。なんとという素敵な友達アイテム。

駅前に雑居に並ぶ建物の中に、ゲームセンターを発見した。更に足が速まる。

一人じゃない。産まれて初めて友達の証が手に入る……！

情熱の炎を燃やした般若のような昴と、青ざめた翔子のプリクラが出来上がった。

その後も、昴は翔子を引き連れて一通りゲームを堪能した。二人でゲームをするなんて状況が初めてな昴は、分かりにくくはしゃぎ、とにかくゲームをするという情熱一点に燃えに燃えまくっていた。

……数時間後。

昴はプリクラをすっかりと手に持って、満足気にゲームセンターを出た。翔子が戦い終えた兵士のようにげっそりと後から出てくる。

「そろそろお腹が空きましたよね。少し休みましょうそうしましょう。何が食べたいですか？」

「副委員長の行きたいところでいい」

「……で、ではそこらへんのファーストフード店で済ませましょうか」

昴はよろよろと歩き出す翔子についていく。

本屋の前を通りかかった時、そういえば翔子と本屋で会ったことを思い出す。

「副委員長はやっぱり本屋が好きなのか？ 参考書とか似合いそうだな」

翔子が足を止めて、横に立つ昴を見遣ってきた。少し不機嫌そうに見える。

「佐藤君はグラビア雑誌がお似合いですよね」

嫌味っぽく言われ、鳥居美園のことを思い出した。一昨日の不可解な美園の行動は一体なんだったのだろう、と首を捻るばかりだ。

「なあ副委員長」

「なんでしょうか」

「鳥居美園って、俺たちの学校の一年生なんだよな？」

「はい。そうですけど」

「潮水知と何か関係があつたりするの？」

聞くと、翔子はわずかに首をかしげる。

「さあ？ そんな話は聞いたことないですけど。なんでですか？」

「美園が、水知の家に来たんだ。なんか、水知のことを探ってる風だったな」

昴が言ってみると、翔子はしばらく考え込んでから、顔を上げて

きた。

「……鳥居美園さんが、潮水知さんを気にしているとしたら、学校の噂が関連しているのではないでしょうか」

「学校の噂？」

「はい。今年の一年生で鳥居美園さんは注目株で、当然のように学校でもアイドルとして君臨しています。けど、派閥みたいなものができあがっているんです。入学式一日だけ来た女の子、潮水知さんのファンクラブと、鳥居美園さんファンクラブで」

「まじか」

昴は口が開いたままになってしまった。

確かに水知は絶世の美少女だ。何度も見惚れてしまうほどに、不思議な魅力を持っている。しかし入学式一日だけで、そんなにも生徒たちから注目を浴びる存在になっていたとは驚きを隠せない。

「だから、鳥居さんが気にしているとしたら、その辺りなのかなあ、と。私の勝手な予想ですけど」

「まあ、ありうるよな」

美園の性格を思い起こしてみても、プライドが高く、常に自分が注目を浴びていたいタイプに見てとれた。人気が二分してしまっていることが許せない、ということか。

昴は肩をすくめる。女子の感情は理解しがたい。

「……二人のことは名前で呼ぶんですね」

翔子が小声でぼつり、と呟いてきた。昴には何のことなのか分からなかった。ただの独り言だろう、と片付けておく。再び歩き出した翔子を追いかける。

「……」

「……」

何故かぎこちない空気が漂っている。昴はどう話しかけたらいいか分からずに、ただ翔子の背中を見つめる。

翔子の背中では先を急いでいる様子だった。若干肩が怒っているように見える。昴は無言で後を追った。

と、唐突に翔子が立ち止まり、振り返ってきた。

口をへの字に曲げて、昴を見据えてきた。間近で目が合う。

「佐藤君は、とっても鈍い人だと思います!」

「……は?」

「それに、なんだか勘違いさせることをたくさん言ってくるので、ずるいです!」

「何を突然怒ってるんだ?」

「どうせ私は、参考書がお似合いの副委員長です!」

昴としては、困惑するしかない。

翔子は顔を真っ赤にして、ふるふると震えていた。しばらくその睨みあいが続いた後。

ぶしゅう、と翔子から蒸気が抜けていった。

「ごめんなさい何を言ってるんでしょか私……意味がわかりませんよね」

「確かに意味がわからん」

頷くと、翔子が諦めたように溜め息を吐く。

「でも、でもですね。佐藤君はもうちょっと色々気付くべきだと思います。入学式のことにしたって、潮さんはきつとすごく感謝してるだろうし。みんなも、佐藤君のことを悪く思ってるんじゃないかもしれません。それが原因で学校に来なくなっただったとしたら、やっぱり私は佐藤君に学校に来てほしいです」

「水知が感謝してる？」

「ほら、やっぱり気付いてないんですね。佐藤君、入学式の日、潮さんを助けたじゃないですか」

「……俺が、水知を、助けた？」

昂はわけがわからず、思考がこんがらがってしまっ。

とりあえず、記憶を掘り起こしてみることにする。

思い出したくもない忌まわしい記憶だったので、半ば封印してしまっていた、入学式の日を記憶を

『昴、私とお父さん、どっちと一緒に住むの？　ずっと育ててあげたのは私よね？』

そんな言葉を平気な顔して吐き出してきた母親。

『さっさと決めてくれ。新しい住む場所の手配もしなければならなし、引越しの準備もあるんだ』

こちらを一度も見ようとしない父親。

そんな前日の出来事もあって、昴はその日とても気分が悪かった。

新一年生の入学式だというのは知っていたが、気だるさが勝って遅刻してきた。駐輪場に原付を停めて周囲を見渡してみても人気は全くない。

既に全校生徒は体育館内に移動し終え、入学式は始まっているようだった。

在校生の始業式は、既に数日前に行われている。昴は自分の新しいクラスとなった教室に行つて、カバンを置く。教室にも廊下にも誰一人姿がない。どうせ話す相手なんていない。話し方も分からない。

昴は体育館シューズに履き替え、憂鬱な足取りで体育館へと向う。二階渡り廊下を過ぎ、階段を降りていくと体育館の入り口は目の前だ。

「なんで入れてくれないんだよー」

そんな声が聞こえてきて、昴は階段を降りきる前に顔を上げる。教師と、どうやら女生徒がいた。どうやらというのは、首から下が女の子のブレザー制服だったからだ。首から上は、紙袋を頭から

被っている。

紙袋だった。紙袋女だった。

あまりの怪しげな人物を前に、昴は呆然と立ち止まった。

紙袋女の前にいる教師は、昴の担任であることに気付く。嫌味っぽい顔立ちの中年教師は、紙袋女の前に立ちほだかり、険しい顔を見せている。

「その紙袋を頭から外せ！ そんなふざけた恰好で式に参加できるわけがないだろうが！」

「だって恥ずかしいじゃないか。なるべく目立ちたくないし」

「紙袋をかぶっている時点で、お前は朝からずっと注目の的だ！」

「やっぱりダメ。無理。緊張で吐きそう。人間の前に顔を出すの、はじめてなんだよ」

目の部分にだけ小さく穴を開けている女の子の声は、紙袋越しでもごもごとくぐもっている。

「わけがわからんことを！ いいから外しなさい！」

体育館の入り口はわずかに開いている。

入学式は行われている様子だが、生徒たちは体育館の入り口で悶着している二人に注目してしまっている。ざわざわと騒がしく、視線は集中している。

教師が手を伸ばして、無理に女の子の紙袋を取ろうとしたのを見て。

「邪魔だよお前ら」

咄嗟に、昂は声を上げていた。

教師が女の子へと伸ばしかけた手を止め、視線が昂へと移動した。昂の姿に気付き、わかりやすいくらい不快感を露にしてくる。

「佐藤、なんのつもりだお前は。遅刻してきた上に教師に口出しするのか」

「さつさと退けよ。入れないだろ」

昂は教師の蔑みの眼差しにも物怖じせず、階段を降りていく。下までたどり着くと、紙袋の女の子がじつと自分を見ていた。不気味だ。教師の顔は怒りで真っ赤になっている。

「ほら、お前も行くぞ。入学式はじまつてる」

昂が言うつと、教師が女の子の紙袋を鷲掴んだ。

「あうっ」

女の子が悲鳴を上げる。

「さつさと外せ　っ!？」

昂は、教師の手首を掴み、女の子から引き剥がした。力の限りに捻りあげる。

教師の憎悪すら込められた瞳が、近くにあった。昂も睨みあげる。担任になった時から、ソリが合わないと思っていたのだ。

「佐藤、貴様……」

「何だよ」

「孤独な俺カッコイイとか思ってるのかお前は。一匹狼気取りで、クラス連中から浮きやがって。これから一年間、貴様と付き合わんとならんと思うと、ゾツとする」

「……」

間近で囁くように毒を吐いてくる教師に、吐き気を催した。

「お前みたいな異分子は俺のクラスに必要ない。まあ、お前は俺のクラスどころか、両親にすら見放されているみたいだけだな」

その瞬間、頭に一気に血が昇っていき。

昂は、教師を思い切り殴っていた。

「あ」

思い出した途端、すぐに思い当たった。

「……もしかして、入学式の時の紙袋女が水知か？」

「もしかしなくても、そうなんです」

翔子に突っ込まれて、昂は愕然とした。昂は紙袋女を助けたつも

りなど毛頭ない。ただ目の前にいて邪魔だった教師とケンカしたただけだ。教師を殴った後、昴は結局家に帰った。一週間の停学処分となったのだが、結局停学期間が明けた後も、昴は学校に行っていない。

不登校のキツカケと言えばキツカケだが。昴はただ親への抵抗をしているだけなのかもしれない。

「潮さんはその後、紙袋を取って入学式に出ました。ずっと頑なだったのに、佐藤君が帰った後はけっこうあっさり顔を出してました。すごくキレイな女の子で、みんな見惚れてましたよ。何故か潮さん自身も、ぼんやりしてて。結局次の日から、来なくなっちゃったんですけどね」

「……ふーん」

コンビニの駐車場が、最初の出会いではなかったということか。その事実が分かったとしても、昴にとって水知が不思議少女であることに変わりはない。

昴は手に持つプリクラを、見下ろしていた。

水知は、学校に行きたくても、行けないのだ。こんな風に、自分の様に誰かとプリクラを撮ることだって。友達と遊ぶことすら、出来ない。

「あいつは、外で遊びたいのかな」

「もちろんです。佐藤君と一緒に学校に行くのが、潮さんの望みなんですよ」

「……やけに詳しいな」

「き、気のせいです」

翔子はそそくさと早足で、昴の先を行ってしまった。ファーストフード店は目の前だ。

見上げる空は、先ほどと変わらない雲一つない晴天だった。

何度も空を確認してしまうのは、ここ最近の癖になっている。

毎日雨が降らないことを祈っている。それなのに。

青空を見ては、溜め息がこぼれていた。

ハーレム三人目？

『恋の魔法使い アドバイザー コシヨー様のお部屋
　ネズミを御者に、かぼちゃを馬車に、あなたを素敵にドレスアップ
　プー！』

イズミンがINしました。

コシヨー『あららウフフ、こんばんはイズミン！ 毎日ご来訪ありがとうございます』

トリイ『はじめましてイズミンさん！ 俺はトリイ、よろしくな！』

コシヨー『トリイも同じ恋に悩むお仲間同士よ みんなで仲良くしましょうね』

トリイ『コシヨー様のアドバイスはすぐく為になったぜ！ 好きな相手には押せ押せだよなっば！ また服装のアドバイスもよろしくな』

コシヨー『お役に立ててよかったわーウフフ』

コシヨー『イズミンは娘さんが片想いしてて、一緒にすっごく悩んでるの。いいお母様よね』

トリイ『へー。娘さんの恋の悩みかあ』

コシヨー『イズミンの娘さんもたまにここに来てくれるのヨ。名前聞いたリアルでも知ってる子で、びっくりしちゃった』

トリイ『そうなのか。ネットって意外なところで繋がりがあつたりするからな！ 案外コシヨー様と俺もどつかで会ってたりして』

コシヨー『会ったらわかるかしらウフフ』

トリイ『わからないと思う（笑）』

イズミン『よろしくトリ』

トリイ『今更！？ しかも小さいイが打ててない！？』

トリイ『……さて、俺はもう寝るとするか。また来るよ。今日はありがとうコシヨー様！』

コシヨー『いい夢見てね おやすみなさいトリイ』

トリイがOUTしました。

イズミン『たすけてコシヨさま』

コシヨー『どうしたの？ ミズミズに何かあったの？ 私でできることだったら、なんでも言ってネ』

コシヨー『そういえば最近ミズミズ、チャットに来ないね』

コシヨー『ミズミズはチャットで話せないの？ いつもみたいにアバイスしてあげれば、元気になるんじゃないかな？』

イズミン『うちにきて、ちよくせつ』

コシヨ『えっお、おうちに直接！？ そりゃ、確かにミズミズの家は知ってるけど……私が行ったところでもならないんじゃない？あ』

イズミン『コシヨさまそんけいしてるからミズげんきになる』

イズミン『まってる』

イズミンがOUTしました。

翔子は青ざめ、こうこうと光を放つデスクトップを見つめるしかなかった。

「……ど、どうしよう」

昼下がり、日課になっているお菓子作りの最中だった。

ガタガタと物音が聞こえてきて、昴は裏ごし作業を中断して顔を上げる。リビングでは柚季がテレビに夢中になっている。柚季は動いた様子もないし、物音にも気付かないくらいにテレビ画面に集中している。

昴は険しい顔つきになり、眼鏡の奥の目を細め、視線を巡らす。エプロンの端で軽く手を拭きながら、警戒した足取りで自室をのぞいてみた。

押入れがわずかに開いていた。

隙間から、カップのぬいぐるみが手招きをしていた。

「なっ……」

「しいーっ、しいーっなのじゃ!」

昴は声を荒げそうになったのだが、イズミの声を殺しながらの必死なジェスチャーに何とかおし留める。おそらくイズミは柚季に見つかりたくないんだろう。先日の柚季からのデレデレスリスリ抱擁攻撃がよっぽど効いたらしい。

柚季を振り返ってみると、柚季の背中では微動だにしていなかった。イズミと同時に、ほっと息を吐き出してしまった。

昴はハッと正気に返る。自室に踏み込み、無言でずかずかとイズミに近付いて行く。

「お前どうやって侵入しやがった!」

腰を屈め、程近くなったイズミを睨みつける。最小限に声を落とすと言いつつ放った。

「こんな時密かに侵入する為に押入れに穴を開けていたことは、今はどうでもいいのじゃ」

「お前を訴えることを今心に決めた」

「いいから聞くのじゃバカ者め!」

「この状況下でよく上から目線でいられるな?」

昴は沸点に達しそうな怒りで顔を赤くし、ぶるぶると震えている。それでもカップのぬいぐるみを完全に拒絶できないのは、やはり罪

悪感があるからかもしれない。

気持ちを鎮める為に、一度深く息を吐き出した。

「なんの用だよ？ 手短に話せ」

「さつさとハーレムの人員を増やすのじゃ」

「は？」

イズミは眉根を寄せ、緊張感のない顔を一生懸命真剣なものにしている。昴としては、啞然とするしかない。

「いいか昴、よく聞け。我は日々力が弱まっている。それもこれも昴のことを好きな者が極端に少ないせいじゃ」

「……」

「な、なんじゃその眼は。真実なのだから仕方がないじゃろう！？ 我をハーレムに入れたところで、よくよく考えてみたら我はちつともお主のことを好きでもなんでもないから無意味なのじゃ！ バカ者め！」

「ハーレムに入れてくれとか懇願した口はどの口だ？ ああ？」

「いやっ、いやあつねらないでえ！ ごめんなさい！」

カップのぬいぐるみが涙目になって、じたばたともがいている。昴はさすがに哀れになって、イズミのほっぺをぎゅうぎゅうつつねっていた指先を離してやる。

「昴のことが好きで好きで仕方ない人間を、昴の側に置くこと。それをしなければ私の力はなくなってしまうのじゃ。ユズだけではもう足りぬ」

「つまりは、お前の為に俺を好きな人間を引っ張ってこいと？」

「私の為でもあり、水知の為でもある。私の力が弱まれば、水知の力も弱まる。我らは運命共同体なのじゃ」

昴の表情が、水知の名前を聞いてわかりやすく強張ってしまった。イズミも視線を床へと落とし、哀しげに瞳を揺らしている。

「そんなにマズイのかよ、アイツの症状」

「最近晴れ続きじゃから余計なのかもしれない。とにかく、一刻の猶予もないんじゃない！ お主はさっさとハーレム人員を連れてくるんじゃない！ いいな！」

イズミは言いたいことだけ言い切った後、早足でさっさと押入れの向こうへと消えていく。

取り残された昴は、押入れをじっと見つめることしかできず。自然に溜め息が漏れていた。

「すばる、どうしたの？」

気付けば柚季が背後に立っていた。柚季はイズミに会って以来、毎日イズミを見つけたくて探し回っているの、一步遅かったらしい。カップのぬいぐるみは巢に帰っていった後だ。

昴は立ち上がり、首を傾げている柚季の頭に、ばん、と手を置く。

「なんでもない。さつさとオヤツ作っちゃうから待ってる」

言っと、柚季は頬を赤らめ、ムズムズと嬉しそうに口の端を上げている。

柚季は昂にとても懐いてくれている。その懐き方は日々、深まっている。手を繋いで歩くのは当たり前。抱っこをせがまれることもしばしば。柚季との愛は順調に育ち、昂としてはそれだけで満たされた日々なのだが。

イズミ曰く、ユズの愛だけでは足りないらしい。

「どうしたもんか……」

台所に移動しながら、自然に呟きが漏れる。

柚季が後ろからついてきていた。振り向くと、柚季はくんくんと鼻を動かしていた。触覚も嬉しそうにぴよこぴよこおどっている。

「かぼちゃのおかしなの？」

「ああ、よく分かったな。ユリ姉が職場でいっぱいもらってたって言うたから。今日はパンプキンプリン」

「たのしみなの！」

満面の笑みで顔を綻ばせている柚季を見ると、昂の胸はあたたかくなる。

いそいで作業を再開する。かぼちゃの裏ごしは終わったので、次はカラメルソース作りだ。鍋を取り出して、砂糖と水を投入し、コンクの火を入れる。

「……なあ、柚季」

「なあに？」

昴は鍋に目を落としたままで、口を開く。

「たぶん、プリンいっぱい出来そうだから。……だからさ、お隣さんにおすそ分け、するか？」

「うん！ いっしょにいくの！」

昴はほつと胸を撫で下ろす。

プリンを持っていったところで、なんの解決にもならない。それでも、何も出来なくても 水知の顔を一目見ておきたかった。そうしなきゃソワソワとしてしまって、作業に集中できないのだ。それだけだと自分に言い聞かせる。

昴は駆け足でお菓子作りをこなしていく。洗練された手つきで素早く全ての工程を終え、型に入れたプリンを冷蔵庫に入れる。

冷蔵庫の中のプリンが冷えるのを待っているうちに、夕方になってしまっていた。

姉夫婦にお世話になっているので、毎日洗濯物を取り込む作業くらいは手伝っている。昴はいつものようにベランダに出た。その際に見た景色は、横にひろがるきれいな夕焼け空だった。

頬に当たる空気も、乾燥した爽やかなもので。

表情が落ちたまま、洗濯力ゴを持って居間に戻る。

柚季がソファーに寝転んだまま、うとうととしてしまっていた。天使のように純粋な寝顔を見てしまい、顔が綻びそうになった。

柚季に毛布をかけてやる。

ついたままのテレビに目を移し、チャンネルを無造作にかえていく。

知りたいのは、天気予報。

「……ずっと、晴れかよ」

掠れた眩きが漏れていた。週間天気予報は、雲の絵すら一つもない、晴れマークがずらりと並んでいた。

無意識に、舌打ちした直後、足が動いていた。冷蔵庫からプリンを取り出し、紙袋に詰めてから急いで家を飛び出す。

すぐに隣の家のドアの前にたどりついていた。

それでも荒くなっていた呼吸を吐き出し、ドアを拳で何度も叩く。

「水知！　おい、水知！　無事か！？」

インタフォンがあることも忘れて、昴は大声を張り上げる。

程なくして、ドアが開いた。

顔をのぞかせたのは、意外すぎる人物だった。

「うるさいわよバカ。何を大袈裟に騒いでるのよ？」

うろん気な眼差しで昴を見据えている美少女は、水知ではない。

「あ、君。昴だっけ。何か用？」

美園だった。

なんでまたここにいます？　昴は呆然とし、美しすぎる少女をしばらく見つめ続けた。

からからに渴いた喉と、混乱したままの思考で、なんとか声を絞り出す。

「鳥居美園、俺のハーレムに入らないか？」

わけもわからず、言った。

答えはもちろん、分かりきっていた。

目の前にいる美園が目を見開き、唇をワナワナと震わせ、怒りに表情を歪め。

一言も発することなく、ばたん、と激しくドアを閉めた。

ハーレム三人目？

昴は数分もの間、その場に呆然と突っ立っていた。

パニックの極みとはいえ、自分は先ほど、憧れの女の子になんと言ったのだ？

思い起こせば思い起こすほど、嫌な汗がじつとりと全身に浮かぶ。身動き一つ取れない状態だ。

悶え死にそうな時間を体験した後、驚いたことに、再びドアが開いた。

「ばあん、と、ものすごい勢いで開いたドアの先。

そこには、バスタオルを一枚巻いただけの水知が立っていた。

「なっ、おま、なん、その恰好……！？」

落ち着いてきていた動悸が、再び激しく脈打つ。ほぼ言葉にならない絶句状態で、昴は水知を凝視してしまう。

「よかったあ、まだいたあ」

とろけそうな笑顔を浮かべた水知は、やはりいつも通り、全身濡れている。細っこい腕や、水色の長い髪に水滴が付着して、地面に垂れ落ちていく。自分の身なりにも気がいかない程に、慌てていたらしい。昴の顔を見て、ようやく安堵した様子だ。

「今美園ちゃんがね、昴が家に来た、って声かけてくれたから、慌ててお風呂上がってきたんだよ」

水知の言葉が耳に届き、昴はやつとのこととで我にかえる。慌ててすぐに、水知から視線を逸らした。頬が燃え上がるように

熱い。

それでも視界の端に映ってしまうびしょ濡れ少女の身体は、火照っている様子がない。どうやら水風呂に浸かっていたらしい。やはり常に水の中にいないと、健康状態が保てないということなのか。

昴はなんとか冷静さを取り戻そうと、理性に訴えかけた。心臓が早鐘を打ちすぎて、痛いくらいだった。

「いつでも来ていいのに、全然遊びに来てくれないんだもん。よかったらあがってあがって」

「お前はさっさと服着てこい！」

顔を逸らしたまま、言い放つ。

先日、水知を泣かせてしまっただけ以来、昴は気まずさが先立つてしまい、水知の家に近付かないようにしていた。今もどんな顔をして水知の前に立てばいいのか分からない状態で、照れ隠しからむくれたような顔になってしまう。

水知はそんなことを全く気にしていない様子で、ニコニコと笑みを浮かべている。相変わらず、無邪気で、純粹で、天真爛漫な笑顔だった。ふつくとみずみずしい頬も、水が滴る鮮やかな水色髪も、いきいきと輝く大きな瞳も健全だ。昴は内心で安堵の息をつく。

直後、着ていたシャツのはじっこを掴まれていたことに気付く。

昴はそろそろと視線を水知に遣ってみる。

水知は眉を下げ、大きな瞳で昴を見上げていた。

「服着てる間に、帰らない？」

ぐわああ、と昴の中で何かが暴れ、吹き荒れた。凄まじい大嵐だった。抑え込むことに尽力せねばならなかった。

あらん限りの力で拳を握り締めて、自分の中の何かと必死に戦う。

「帰らない。だから、早く服着て来い」

なんとか自分との戦いに勝利をおさめ、無表情で眼鏡を光らせることに成功した。

「嬉しい！」

直後に、水知が最高の笑顔を見せてきて。

昴はドアのすぐ横にある壁に向き直り、ガンガンと頭を壁へと何度も打ち付けた。

「何してるんだよ昴？　眼鏡が割れてるよ？　額から血も出てる」

「いいからお前はとつとと服着てこい！　じゃなきゃ帰るぞ！」

今度こそ厳しく言い放つと、ようやく水知はドアの向こうに消えた。

昴はほつと息をつく。眼鏡を外して確認すると、ヒビが入ってしまっていた。しかも額からは血が流れ落ちてくる。どれだけ理性を抑えるのに苦労してるんだ、と自分自身に呆れ果てた。

それでもいまだ、心臓は激しく脈打ったままだ。

これから行く場所を、戦地に赴く兵士のような気概で向かうことを決意した。

一度ごくり、と喉を鳴らしてからドアを開け放つ。

「のわっ」

玄関には、ジト目の美園が仁王立ちしていた。先日会った時と同様に、少年のようなカジュアルスタイルだ。

「近付かないで変態。なんで入ってくるの？ 誰の許可を得て？」

完全に毛嫌いされてしまったらしい。虫でも見るような蔑みの眼差しを向けられ、それでも完璧に整った愛らしすぎる顔立ちを見ると、ドキドキしてしまう。

「家主の許可を得て……」

遠慮がちに告げると、美園はぐつと詰まった。偉そうにしているが、ここは美園の住まいではない。大体美園がここにいる意味が分からない。

玄関に立ち尽くしていても仕方ない。恐る恐る靴を脱ぎ、家へとあがる。

美園は気に入らない様子だったが、これ以上会話することすら厭わしいといった感じで居間へと引っ込んでいく。昴も続いた。

居間には誰もいなかった。水知もまだ着替え中らしい。イズミは押入れに隠れているのだろう。

……二人きりの空間は気まずい。

昴が床にどっかりと座ると、美園が遠く離れた壁に移動し、もたれかかった。

凄まじく殺気だった眼差しを向けられている。グラビアの彼女からは想像がつかない、般若のような顔だ。

先ほど美園に言ったセリフを考えれば、仕方ないことだ。昴は深い溜め息を吐き出した。

「……それ、何？」

しばしの重い沈黙を経て、美園が呟いてきた。

顔を俯かせていた昴は、美園を見る。可愛すぎて失神するかと思

った。

「甘い匂いがする」

「あ、ああ……このことか。プリンだよ。水知に分けてやろうと思ってる」

すっかりと自分が右手に提げていた紙袋の存在を忘れていた。紙袋には本日作ったパンプキンプリンが入っている。閉め切られた部屋の中に、甘ったるい匂いを微かに漂わせている。

「ふーん」

美園は興味なさげに漏らす。しかしその視線は、紙袋に釘付けになっている。釘付けになっている。じりじりと紙袋を焼け焦がす程に、釘付けになっている。

「……もしかして、食べたい、とか？」

「はあ！？ な、なな何言っちゃってんの君！？ 私が、このグラビアアイドルの私が、プリンなんて食べたいわけなんてないじゃない！ 甘い物は厳禁なの！ 食べたら太っちゃうから、絶対食べないようにしてるんだから！ だから、だから食べたくないの！」

「そうか。食べたくないなら別にいいんだけど」

「そんなに言うなら食べてあげてもいいわ！」

何一つ、そんなになんて言っていない。

昴は呆れて美園を見上げるが、顔を真っ赤にさせて泣きそうな美園を見ると、突っ込む気力は失せた。

ドカドカと大股歩きで近付いてきた美園が、光の速さで紙袋を奪い取っていた。昴は呆然と空になった自分の右手を見る。

昴の横にぺたん、と美園が座り、プリンを紙袋から取り出した。

「わああ、わああ……！ ふ、ふんっ、全然おいしそうじゃないけど、まあ毒味してあげるわよ！」

「ヨダレが垂れてるぞ」

昴の言葉はもはや美園に届いていないらしい。

子供のように目を輝かせ、綻んでしまう顔を隠すこともできずにニッコニコでスプーンを口に運んだ。その様子は柚季を上回るはやぎように見えた。

昴の横に座っていることも気付かないくらいに、無我夢中でプリンを食べている。

その途中で、水知が居間へとやってきた。

昴が目を向けると、制服姿の水知は、柔らかに微笑みかけてきた。

「昴のこと、ちっとも好きじゃないんだけどね、来てくれてとっても嬉しいんだよ！」

「……それはどうも」

昴は口元をおさえる。こっちはこっちで、無表情を保つことが、相当にキツイレベルになってきている。

「美園ちゃんね、毎日ここに遊びに来てくれるんだよ。相当な暇人なんだね！」

水知がにこやかにひどいことを言っている。

「でも嬉しい。わたしはあんまり外に出られないからさ、こっやってみんなが遊びに来てくれると、すごく楽しいんだ」

「……そうか」

昴は考える。

イズミの力が強くなれば、水知は外に出ても平気なくらい元気になるのだろうか。と。

そうすれば、一緒に外に遊びに行くことだって。

一緒に学校に行くことだって

そこまで考えて、何を血迷っているんだ、と首を振った。

プリンを一気に食べきったらしい。横にいる美園が、プハッと顔を上げた。その口元はベタベタになってしまっているが、この上なく満足気な表情だ。

「すつごくおいし　　くなかったもん！」

「なんで泣きそうになってんだよ」

涙目になっている美園が、じとり、と昴を睨み付けてくる。

「ねえ、これ、君が作ったの？」

「ああ、そうだけど」

昴は頷く。すると、美園の瞳がまたも輝きを帯びる。キラキラとした眼は、まさにアイドルに相応しい。

「……君のハーレムに入ったら、また手作りお菓子が食べられるの？」

「さ、さあな。柚季には毎日作ってやってるけど」

「君のハーレムに入ってあげてもいいわよ」

昴は目を見開き、美園を見る。

近くで昴の顔を見上げてくる愛らしい顔の少女の瞳は、期待に満ち満ちている。

あきらかに、お菓子目当てだ……！

わかりやすく伝わってくる本音に、昴は絶句する。水知は喜んではいないでいる。水知には、ヤキモチとかそういう感情はないんだろうか。なんて冷静な自分が考えていたりもした。

その時だった。

来訪者を報せるチャイムが、鳴った。

「あれ？ 誰だろうね？ 新聞の勧誘か何かかなー」

水知がぺたりぺたりと裸足のままで、玄関に向かっていく。

狭いアパートなので、居間から玄関までの距離は短い。昴や美園が座ってる場所からでも、玄関は見える。

「はい」

水知が軽い調子で言って、ドアを開く。

現れたのは、

「こんにちは水知ちゃん！ 恋の魔法使いコシヨー様が、救世主と

して登場したぞッ 落ち込んでいる暇なんてないんだから！ さ、舞踏会に行く魔法をかけてあげる！ 素敵なコーディネートで、王子様を恋に落としちゃおう！ てへへッ」

これから夜会にでも出かけるのであるとか、妖艶なドレスを身に纏った女性……

サイズが全く合っていない上、年齢的に間違えまくっているデザインのロングドレスは、ずるずると足元に引きずってしまっている。しかも貧相な胸を強調している。ゴテゴテとしたアクセサリー類も、一つ一つは悪くないのだが、装着しすぎて悪趣味だ。顔の半分はあるサングラスも、ずるりと落ちかけている。

つまりは、何もかもが間違ったファッションセンスで現れたのは、副委員長、宮代翔子だった。

「え？ コシヨー様？」

水知は固まっている。昴も固まっている。美園も固まっている。半分泣きそうな状態の翔子は、取り繕うように手をバタバタさせた。

「ごめんね、期待と違ったよね。私、ネットでは全然違う自分を演じてて……ネットのイメージ通りの服なんて着てみても、全然似合わないくっ。本当はこんななの」

翔子は顔を俯かせた。緊張でか、ガクガク震えていた。狭くなっ

てしまっている視界の中には昴や美園は映っていないらしい。

「みんなが私に頼ってくれるのが、嬉しかった。学校では、そんな風に注目を浴びることなんてないくらい地味で。でもネットでは言葉だけで、みんながついてきてくれる。信頼関係だって築ける。裏

切られない。気付いたらのめりこんで、嘘の自分を作り上げてた」

震える声で、翔子は告白を続けている。今まで溜め込んでいたものを吐き出すように。

「だから、水知ちゃんの家に来てほしいって言われた時、どうしたらいいのかわからなくなった。現実の私は、恋の魔法使いなんかじゃない。ただの地味な女子高生。がっかりさせちゃう、って思った……違う、がっかりされるのが、怖かったの。それでも、水知ちゃんのこと、助けてあげたくて……」

「コシヨー様……」

水知が呟き、一步近付こうとした。

と、その時、昴の横でやはり呆然としていたはずの美園が、ぷつと、ふきだした。水知も足を止め、振り返ってくる。

翔子も美園の存在にようやく気付いたようだった。

当然、横に座っている昴にも。

昴と目が合った瞬間、翔子は目を見開き、くしゃ、と顔を歪めて俯いた。その顔は真っ赤になってしまっている。

その間にも美園は笑いを堪えきれない様子でくっくつと、肩を揺らしている。

「あー可笑しい！ 何その恰好！？ 今からパーティーでも行くわけ？ 女子高生のする恰好じゃないと思うんだけど！」

美園が容赦ない言葉を突き刺す。

翔子が俯いている。

サングラスに半分隠れた瞳が、揺れているのが見える。部屋の中には美園の哄笑が続く。

昂はおもむろに、立ち上がった。

止まった時間を動かすように、翔子へと近付いて行く。
顔を下げ続けている翔子の前に立ち、その両肩へと手を置いた。

「副委員長、メチャクチャキレイだ。お姫様かと思った。舞踏会で会ったら、求婚してるレベルだ」

「え……？」

翔子が驚いた表情で、顔を上げる。

その瞳から、涙がこぼれ落ちていく。昂は翔子の横に立ち、肩を抱く。

目の前には水知と、少し離れた位置に美園が、啞然とした顔をこちらに向けている。

「俺のハーレムに入るのは、鳥居美園、お前じゃない。お前は受け付けない」

自然に、ニヤリ、と不敵な笑みが浮かんでいた。

「俺のハーレムに入るのは、宮代翔子だからだ」

言い放った。美園がこぼれ落ちそうなくらい目を見開いている。
水知が、口を両手で覆っている。

「え、え、え？」

そして翔子が、その場にぺたん、と膝をついてしまった。

「コシヨー様が、昂のハーレムに入るの？」

「そうだ。俺が仲良くしたいのは、翔子だからな」

無邪気に聞いてくる水知へと向けて、告げる。

今日、笑顔を見せる度に、何度も抱き締めてしまいそうになった少女を前にして、他の女の子と仲良くする宣言をしたことに、心苦しさを覚える。

水知は驚いているが、全く嫉妬感情は垣間見えない。

そのことに、少し、少しだけ、寂しく思ってしまう。それでもなんとか、表情を保つことには成功した。

色々ありすぎて、顔面が麻痺してしまっているのかもしれない。自分の感情に気付いてしまったのも、この瞬間だった。

俺は、水知に惚れている。

……もう、今更、そんなことは、言えない。

ハーレム四人目？

呆然とした面持ちで座っていた美園が、おもむろに、立ち上がった。

頬を紅潮させ、眉を吊り上げ、整った顔立ちはわかりやすく怒りに満ちている。ずんずんと大股歩きで、昂に近付いてきた。

「全然納得いかない！」

「な、何が？」

美園が昂の前に立つ水知を押しつけて、豊満すぎるバストが触れんばかりの距離で、ずいっと迫ってくる。間近で大きな瞳が昂を睨みあげている。

「だって、昂は私にハーレムに入れて言ったじゃない！　なんでいきなりしゃしゃり出てきたこの人を選ぶわけ！？」

美園がびしりと翔子を指差す。翔子の方はまだ玄関で靴も脱いでいない状態だ。その場に座り込んだまま、どうやら腰が抜けてしまっているらしい。サングラスに隠れ、半分だけ見える顔はそれでも分かるくらいに真っ赤に染まっている。

「あ、あ……ご、ごめんなさい……」

何故か翔子が力なく謝ってきた。

「アナタは黙っててくれる？　私は今、昂と話してるの」

美園が昴に視線をホールドさせたまま、ピシヤリと言い捨てた。
よほど腹が立っているらしい。

昴は咄嗟の感情任せで、翔子を巻き込んでしまったことを後悔する。別に翔子は昴のハーレムに入る為に、ここに来たわけではないのに。ただ水知を元氣付ける為にここにきて、美園に嘲笑われてしまった上、今度は美園の攻撃対象になってしまっている。美園の性格を把握しきれなかった。鋼鉄の自尊心を傷つけられた美園は、今にも昴に噛みつかんばかりの表情だ。

「そつかあ。美園ちゃん、そんなに昴と仲良くなりたかつたんだねえ。昴のこと、大好きなんだねえ」

緊迫した場を台無しにする、のほほんとした声があがった。

昴は呑気なことを言つてのける水知をそつと見遣ると、水知はホ
ワホワした平和な笑顔だ。

「大丈夫だよ、昴は許容範囲が広いから、女の子だったら誰でもいいんだよ。美園ちゃんだって受け入れてくれるよ」

「ちょ、ちよつと黙れ水知。何気に暴言だしな？ 火に油を注いでくれるな？」

思わず昴は水知を止めに入る。空気読めない水知には、美園がふるふると震えているのが見えていないらしい。

美園は俯いた状態で唇を噛み、必死に何かと戦っている様子だ。垣間見える形相のあまりの恐ろしさに、その場から逃げ出したくなるが、背後のドアは閉じている。

「コシヨー様も、昴が好きなんだね。えっへへ！ なんだらう！ すつごく元氣になってきたよわたし！ 二人の愛のパワーのおかげ

かな!？」

水知が腕をぐるぐるんとまわし、全身で元気っぷりをアピールしている。

変わらずに美園は肩を震わせ、翔子は頭から蒸気を出しているというのに。昂はこの修羅場をまとめあげるほどに、人間が出来ていない。ただ立ち尽くし、うろろ視線を泳がせるしかなかった。

「……ない……」

黙りこくっていた美園が、ぼつりと口を開いた。

聞き取れない低い声が、何を言ったのかは分からない。直後、顔を上げた美園が、すぐにその答えをくれた。

「許せない! もう許せない!! よくもみんなして私を馬鹿にしてくれたわね!? 許せない許せない許せないんだから!!」

真っ赤になって喚き散らしている美園は、完全に癇癪を起こした子供状態だ。

そのまま暴れだすのではないだろうか、と昂は身構える。翔子と水知はぼかんとした表情で美園を見ていた。

「特にアナタ! 私のプライドをズタズタに引き裂いてくれた責任を取ってもらうわ!」

「ひ、ひいつ?」

美園の攻撃対象は、やはり翔子のままだった。半分悲鳴のようなうわずった声で、翔子が反応する。

「今週の土曜日、十二時、ここに来なさい！ 絶対絶対絶対によ！」

「は、は、はい……」

なんとかかんとか翔子は頷いている。美園は一学年下の後輩の筈だが、上下関係では既に美園が上になっているように見て取れた。

「そして君！ 佐藤昂！」

「な、なんだ？」

今度は昂がビシリと指差される。

「私は、君のハーレムなんて、全く入りたくない！ 君のことなんかはつきり言つて、大嫌い！ 男なんて腐ればいい！」

「分かつてる分かつてる」

「絶対に、ずえーつたいに！！ 君のハーレムになんか入らないんだからね！！」

昂は肩をすくめた。そんなに顔を真つ赤にして力説されなくても、美園が昂に全く気がないことくらいは嫌でも理解できる。水知の言葉を真に受けられるのが、相当に嫌なのだろう。だったら水知に直接文句を言えればいいのに、そういえば水知はいつも、美園の攻撃対象から外れている。

その水知はというと、美園の暴走には気付いておらず、やっぱりニコニコ笑顔なのだ。

何がそんなに嬉しいのか、どうやら本当に元気になっているらしい。一人で浮かれ、「なんだかからだが軽いぞひゃっほう」なん

てピョコピョコ飛び跳ねている。

「……土曜日には、君にも付き合ってもらうから」

またも至近距離で迫られ、昴の鼓動が跳ねる。

性格が魔女も裸足で逃げ出すほどに最悪だろうと、プライドが天まで届きそうなほど高かろうと、やはり美園は完璧なスタイルを持った、完璧な美少女なのだ。彼女の素晴らしい容姿を前にして、逆らえる男など存在しないだろう、と昴は内心で息をつく。

「その、えーと、コシヨー……じゃなくて、宮代先輩と、君、私の三人で一緒にお出かけすることにしたから」

「……なんの為にだ？」

「分かりきったこと聞かないで。本当に素晴らしいのは誰なのか、世の 대중どもに見てもらおう為よ。君が私より、宮代先輩を取るっていうんだから、宮代先輩の素晴らしいさをみんなに見てもらいましょうよ」

……なんと悪趣味な。昴は絶句してしまふ。

それは未だへたりこんでいる翔子も同様だった。言葉を失い、ただ呆然と美園を見上げている。

彼女の目論見など、火を見るより明らかだ。

翔子と美園が並んで街を歩けば、大衆の視線は当然美園へと集中する。昴に同行をさせるというからには、大衆の面前でいちゃついたりするつもりなのだろう。そうすることで翔子という存在が豆粒よりも小さく、惨めに見えるだろうという目論見が。

さすがに昴は苛立ち、絶対に断ろうと口を開きかける。

「あいな、お前」

「わたしも行きたい！」

水知のはしゃぎ声に遮られてしまった。

「みなでお出かけするんだよね！？　だったら、わたしも、わたしもー！」

「いやちよつと待てお前は話に入ってくるなややこしいから」

「だってさ、コシヨー様と美園ちゃんが昴と一緒にいると、なんだかすごく元気になるんだよ！　だから、三人が一緒だったらわたしも外に出られると思うんだ！」

「……え、とだな。ちよつと考えをまとめさせてくれ」

水知の言葉に、昴の思考はこんがらがった。

水知が元気になるということは、昴は誰かに愛されているということだ。誰かの愛が昴へと向き、その相手が近くにいることで水知は元気になる、とイズミが言っていた。その愛を向けてくれている対象が、汚物を見るような眼差しを向けてきている美園だとは到底思えない。

……ということは……？

「行きましよう」

昴の思考途中、きつぱりと強い宣言をしたのは翔子だった。昴はとりあえず思考を止め、翔子を見遣る。

翔子はいつの間にか立ち上がり、身体の前でぐつと拳を固めてい

る。

「四人でお出かけしよう!」

「え、でも副委員長、いいのか……?」

思わず昴は、似合わない心配気な表情になって聞いてしまう。一番立場的に辛い思いをするのは、美園の攻撃対象になっている翔子のはずだ。水知はどうやらアホすぎて、空気が読めないのてどんな状況下でも楽しんでしまいそうだから、問題はないだろう。一番逃げ出したいだろう翔子が行くと言つてのけたことに驚きは隠せない。

「だって、水知ちゃんと佐藤君と一緒に、外に出られるんです!こんな嬉しいことはありません!」

翔子は唇をむんつと曲げ、真っ直ぐに前を見据え、強く言い放ってきた。

昴はじんわり、と胸に温かさを感じた。

翔子は弱い女の子でも、地味なだけの女の子でもない。それは自分の為に「学校に来てください」と言つてきた時点から、気付いていた。

先ほど水知に向かって、コンプレックスを吐き出した彼女自身は、気付いていないのだろう。

宮代翔子はとても誠実で、真っ直ぐな魅力を持っているということ。

昴は頬をポリポリ搔いた。

翔子の魅力に気付いているのが自分だけだとしたら、少しだけ優越感だった。

「ふ、ふん。じゃあ土曜日の十二時、ここに来るから遅れないで来

なさいよ」

水知がついてくるといふ目論見から外れた展開にはなったものの、美園は気が済んだのか少し表情がほぐれた。

「その二人、どいてくれる？ 私は帰るから」

ピシヤリと言われ、くつついて立っていた昴と翔子が離れる。わざとらしくかき分けるように美園が間に入り、狭い空間で無理矢理に靴を履いた。

「それと、昴、お出かけのお、オ、オヤツは忘れないで持ってきてなさいよ」

最後の捨てゼリフを早口で言い、美園が逃げるようにドアの向こう側に消えた。

嵐の後のようだった。

昴も翔子もしばらく、棒立ちのままだった。

「……私も、帰ります。今日はあの、お騒がせしてすみませんでした。それと、土曜日はよろしくお願いします」

深く頭を下げ、翔子が立ち去っていく。結局玄関から中に入ってくることなく、翔子は行ってしまった。あまりの出来事の連続で、彼女もパニックで脳の許容範囲を超えてしまったのだろう。ヨロヨロとした足取りだった。

結局、水知と二人きりで取り残されてしまった。

水知は元気いっぱいになっている。もう心配はいらないだろう。昴も袖季が昼寝から起きるだろう前に、帰らなければと思い立つ。水知を見た。

水知も、昴を見ていた。もうピョンピョン跳ねていなかった。いつもの底抜けなものじゃない、寂しげな笑顔を見せていた。昴は心臓をわし掴まれたような、そんな感覚を覚える。

「土曜日、楽しみだね」

「……俺はどんなことになるか考えると、ゾッとしてるよ」

「えっへっへ！ わたしにどーんと任せておきなさい！」

「任せたくない」

水知なんかに任せてしまったら、最悪な事態が更に最悪になるだけな気がする。昴は深く溜め息をついた。

しかも、昴は自分の気持ちに気付いてしまった。

二人きりの空間が息苦しいのも、ずっと胸が締め付けられそうなのも、晴れ空を見て溜め息が出るのも。

全部、水知を想ったことじゃないか。

今更そんなことに気付く自分の鈍さに呆れて、溜め息は止まらない。

水知に気持ちを告げれば、彼女はきっと喜んでくれるだろう。

でも、水知の感情は、昴の願いによって歪められ、造られた上での感情だ。それを思うと、自分の気持ちを彼女に言うことは出来ない。

そんなのは反則だ。

そして、同時に彼女が怖いという事実も変わらずにある。

もし両思いになれたとしても、昴には彼女に触れる勇氣すら持てない気がした。それほどまでに、昴の恐怖心は根深い。

だから、隠すしかなかった。ひたすらに、押し隠し、その感情すら殺してしまおうと思う。

「じゃあ、また土曜日にな」

昴はそれだけ言っで、背を向けた。

「……人間になれたら、いいのにな」

まるで昴の思考を見透かしたかのような、絶妙のタイミングだった。

昴は思わず水知を振り返る。寂しそうな笑顔は変わらず、昴の胸を締め付ける。

「なんだろね、さっきから胸がモヤモヤしてて変なんだ。わたし、美園ちゃんとコショー様がとつてもとつても、羨ましい。羨ましくて、嫌な気持ちになってる」

水知が自身の胸に両手をあてて、言う。

「二人のことが大好きなのに。わたしが、人間じゃないから、こんな嫌な気持ちになっちゃうのかな」

昴は眼鏡の奥の目を、細めた。眉間の皺だっでいつものままで、口は不機嫌そうに曲がっている。

「……お前は、人間じゃなくなっでいい。そのまま、いい」

昴はムツツリと、乱暴に言った。

それが精一杯だった。

それでも、水知がへへへ、と嬉しそうな笑顔を見せてくれた。

ハーレム四人目？

決戦の土曜日がやってきた。

昴は十二時になる少し前に、国生家を出た。待ち合わせ場所はすぐ隣である潮家だ。国生家の三人は、家族水入らずで仲良く外出中だ。昴は預かっている合鍵で国生家の施錠をしてから、潮水知の住まいの前に立つ。

本日の天気も、やはり晴れ。

雲がわずかに浮かぶものの、底抜けにいい天気だった。そろそろ梅雨が間近に迫っているというのに、全く空気に湿り気は感じない心地良い気候だ。本来なら、絶好のお出かけ日和である。本来ならば。

昴の中にある不安は拭えない。どこに行くのかは不明だが、外に出るということは水知にとってどれくらいの負担になるのか、想像がつかなかった。それに翔子の気持ち考えると、やはり憂鬱になってしまう。

もやもやとした気分を抱えたまま、それでも立ち尽くしてばかりもいられないのでインタフォンを押した。

ドアの向こうからダダダッと駆けてくる音が聞こえ、ドアはすぐには開けられた。

「こんにちは昴！ 待ってたんだよ！」

目を輝かせてこれ以上ないくらい幸せそうな笑顔の水知が、顔を出した。おそらくインタフォンの音に耳をすませて待ち望んでいた様子だ。それぐらいに反応が早かった。

「あ、ああ」

昂は視線を逸らし気味にして、眼鏡をかけなおし、それでも水知の姿を視界の端に捉える。

制服姿だった。想像の範囲内だが、彼女はきつとこの服しか持っていないのではないだろうか、と考える。いつも通り、元気いっぱい可愛い水知の姿が見られた。不安が少しだけ救われる思いに変わる。そして水知がリュックを背負っていることに気付き、嫌な予感に襲われた。

「こ、こんにちは佐藤君！」

水知の横からひょこつと顔を出したのは翔子だった。

翔子も制服姿だった。壊滅的にセンスがない私服のことを鑑みれば、彼女の制服姿が常であることも納得する。コシヨー様モードではなく、いつもの地味な副委員長モードになっている。案外に、嬉しそうに目を輝かせ、頬を紅潮させている。そして。

「全員そろったわね」

ふん、と鼻を鳴らして言ったのは、美園の声だった。

昂は視線を水知、翔子の頭を越えた向こうへと移す。

「おやつはきちんと用意してきたんでしょっね」

美園がたんまりと豊かな胸を組んだ腕の上にのせて、仁王立ちしてこちらを見据えている。

「あれ……」

昂は思わず呟きを漏らしていた。

美園は縁の分厚い四角い眼鏡をかけ、本日もやはり目立つとは言いにくい少年のような地味な姿だったからだ。ウェーブした長い髪の毛をサイドで軽くまとめている。目立っているのは大きすぎる胸だけだった。

街に出てみんなに見てもらおう、と言ったからには、かなり気合を入れたオシヤレをしてくるのだらうという昴の予想は見事に外れた恰好だった。

グラビア雑誌などで服を着ている彼女を目にすることもあった。いつも女の子らしいワンピース姿で、天使の笑顔を振り撒いている写真ばかりだ。それを考えると、現実の美園は仏頂面で地味な服装ばかりなことに違和感がないでもない。美少女に変わりはないのだけれど。

外見に騙されるな、性格は最悪だ、と自分に言い聞かせる。

「何よ？ 早く行くわよ」

じろり、と睨まれて昴は慌ててドアの前から身体をどけた。年頃の可憐な少女たちが三人、そろそろと出てくる。

先導して歩き出した美園についていくかたちで、翔子、水知も歩き出す。

少し距離を置いて、昴も歩き出した。女の子三人と一緒に歩くななんて経験がなかった昴には、一体どういう位置に立ったらいいのか分からない。これぞまさにハーレム状態じゃないか、なんて今更に気付いてしまつて唐突に緊張感が増した。

アパートを出て歩き出した女の子たちに遅れて、完全に不審者のようになつておどおどと猫背気味についていくことしかできない。

美園は惘然とした表情で、ひたすらに早足で先を急いでいる。翔子は一生懸命な小走りだ。水知は踊りだしそうにステップを踏みながら、美園や翔子に何やら話しかけていた。

水知の背中であつさわつさとリュックが揺れている。昴は眼鏡の

奥の目を眇め、そのリュックを見つめた。

何が入っているのか、考えるとゾツとした。振り払い、なんとか足を前に進める。

と、水知が振り返ってきた。ててて、と軽い足取りで昴の横に並んでくる。

「えっへっへ！」

水知の満開の笑顔を見て、昴も思わず顔が綻びそうになってしまった。

「……体調の方は、大丈夫なのか？」

「全然問題ないよ！ 今だったら世界一周旅行だってできそうな気がする！」

「油断するでないぞ」

ボソ、とリュックから可愛い声がかえってきた。

昴はげんなりと力が抜けていく。その声が天使のように美しいものだったからでは決してない。耳を顰める美声に、耐性はついてきた。

「やっぱりお前か」

昴が呟くと、リュックからひょこつと頭を出したのはカッパのぬいぐるみだった。

「水知が外に出るといつて聞かないんじゃない。仕方なかるう。我は水知のことが心配で仕方がないんじゃない」

周囲に気付かれないようにか、ボソボソと小声の早口でイズミが告げてきた。

「お前がついてくる方が、懸念事項が増えるだけだ。帰れよカップ」

「ハッ何を偉そうに！ 想われてるからって調子に乗りおつて！ お主なんて孤独になれ！ なってしまえ！」

捨てゼリフを吐いて、昴が何か言い返す前にイズミは素早くリュックの中に隠れてしまった。
水知が困ったように笑っている。

「孤独になったら困るのは、イズミちゃんなのにねえ」

のほほんと言つてのけている。リュックがびくり、と蠢いた。動揺しているらしい。

「それにわたしも。昴がみんなにモテモテじゃないと、困っちゃうんだよ」

「……お前はいいのかよ、それで」

「ん？ 何が？」

「なんでもない。行くぞ。大分離されてる」

気付けば歩道を歩く美園と翔子の背中が遠くなってしまっている。昴は早足になり、その背中を追った。

いちいち複雑な感情を抱えてしまい、でもそれをはっきりと口にすることができずにいた。そんな自分に苛立つ。

横を楽しそうに歩いている水知を見ても、ムツツリと難しい顔し
かできない。

こんな風に、二人で外を歩くことを夢見てたはずなのに。

ちつとも笑えない。

感情だけが膨れ上がって、爆発してしまいそうになっていた。そ
れを押さえつけるのに必死で、水知の笑顔を見る度、無茶苦茶にし
てやりたいとすら思う。

「……最低だな、俺は」

そんなこと分かりきったことなのに、今更、眩きが漏れた。

一行はアパートから一番近い、最寄駅前までやってきていた。そ
れは先日、翔子と一緒に歩いた場所でもある。

街で唯一の繁華街には、それなりに商店も建ち並んでいるし、規
模は小さいがデパートもある。

美園が行き先を選んだのは、その小さなデパートだった。

「シケた街よね。こんな店しかないんだから」

当の本人は爪を噛みながら、忌々しげに吐き出している。ブツブ
ツと悪態をついている美園の目的が未だ掴めずに、昴と翔子、水知
はひたすらついていくしかない。

人通りがそれなりに増えてきた頃から、視線が集中していること
には気付いていた。それはやはり、水知の水色の髪の毛が目立つこ
とが大きいのだろう。それに加えて、人間離れた完璧な造形の美

少女だ。実際人間ではないが。

美園は目立つ容姿を最大限におさえているし、翔子は最初から目立つタイプではない。すれ違う人々たちが必ず凝視してしまっているのは、やはり水知なのだ。水知自身はその視線に気付いている様子もなく、呑気に鼻歌スキップ状態だ。

デパートの二階にある、婦人服売り場でようやく美園が足を止めた。若い女の子たちが好むであろう、可愛い服が並んでいる。

そこで立ち止まった美園が振り返ってきた。

その視線が捉えているのは、翔子である。

びしり、と翔子に向かって指差しまでしてくる。

「さて、宮代先輩。覚悟は出来ているんでしょうね？」

「な、ななな、なんの覚悟でしょう、か……」

翔子は完全に気圧されてしまっている。見守る昴はハラハラせざるを得ない。いつでもこの対決の間に立って、翔子を連れて美園の魔の手から逃げ出す覚悟はあった。

「私のプライドを傷つけた責任を取ってもらう、って言ったでしょう？」

「あ、う、そ、そんな……」

青ざめて、逃げ腰になっている翔子を見て、昴は今がその時だとばかりに足を一步前に進めた。が。

シャツの端っこを、水知に掴まれていた。前に進みかけた足は、一歩だけで止まってしまう。

「何すんだよ水知」

背後に立つ水知を振り返ると、水知は平和な笑顔を浮かべている。呑気すぎる少女は、全く今の緊迫した空気を察していないのか、昂は舌打ちする。

「アイツ、副委員長にヒドイことを言おうとしてるだろ。止めなきや」

「美園ちゃんはヒドイ子なんかじゃないよ」

水知は、きつぱりと言った。その言葉だけは、凜、と響いて聞こえた。

「昂の大好きな美園ちゃんは、とってもいい子なんだよ。だから、昂も、美園ちゃんが好きになったんでしょ？」

「バカ言うな。俺が好きになったのは、アイツの外見だけだ。騙されてたんだよ、アイツは純粋な心で天使の笑顔を向けてくれる優しい女の子だっと思ってた、から……」

昂の言葉は途中で止まってしまふ。

視界に入ってきたのは、美園が翔子の手首を強引に掴みながら、店に入っていく姿だった。

真剣な眼差しで、仏頂面で、自分の外見なんて全く気にかけていない様子で、選んでいるのは

「ワンピースも悪くないけど、宮代先輩はけっこう大人びた顔してるから、こんなのもいいと思うのよ。あ、だからって、夜会パーティ系セレブドレスは却下だけだね。高校生なんだから、年相応の可愛さは入れとかなきゃ。やっぱリスカートかなあ。足長いからパン

「ッも捨てがたいけど」

美園がアワアワしている翔子に、一生懸命に服をあわせている。次から次に服を持ってきては、ブツブツとやはり悪態っぽく吐き出している。

それでも美園のしている行為に、悪意は微塵も見られない。

真剣に、一生懸命に、不器用に、翔子を可愛くしてやろうとしているのだ。

「とつてもいい子だよ、美園ちゃん」

水知が言ってきた。昂は横に並んだ水知へと目を移す。

してやったり、とにんまり笑みを見せる水知を見て、急激に頬が熱くなっていく。赤面してしまったことが恥ずかしくて、慌てて顔を逸らす。

完全に、勘違いをしていた。

美園は翔子を笑いものにする為に、お出かけに誘ったとばかり思っていたのに。

その間にも、何着も服を持ってきては美園が熱く語っている。

自分よりも、ずっと水知の方が人を見る目があるじゃないか、と気付いてしまい、そんな水知に愛しさが込み上げて、行き場のない感情にどうしていいかわからなくなつて、ただ顔を俯かせた。

「ほら！ 水知もこつち来てよ！ どっちが可愛いと思う！？」

怒っているような声で、美園が水知を呼びつけてくる。水知が「はあい行きまーす！」と元気よく返事して駆けていった。

「ついでに水知も私服買いなさいよ。選んであげるから」

「えーでもわたし、この服が好きなんだよ」

「好きでもなんでも、休日まで制服きてるバカ女子高生二人と一緒に歩くこっちの身になりなさいよ。なんか私だけ浮いてるみたいじゃないの！」

「ご、ごめんなさい。でも制服以外にはなかなか着る勇気がなくてですね……」

「美園ちゃんも制服着てくればよかったのに」

「黙れバカども。……水知にはコレなんか似合うと思うのよ」

……昴は一人、ぽつんと立ち尽くしていた。

完全に取り残されてしまっている。三人の女の子たちは楽しそうに服選びに夢中だ。

しかし嫌な気はしなかった。水知ではないけれど、みんな仲良く、なんて光景を目の当たりにして幸せを感じてしまったりもした。

ニヤニヤしてしまいそうになるのを必死で堪えていて。

だから、気付かなかった。

近付いてくる人物が、目の前にくるまで、可愛い女の子三人に夢中になっていて。

「昴、こんなところで会うなんて奇遇ね」

声をかけられ、昴の表情が瞬間で強張った。

声の聞こえた方からバツと思い切り身を引き、その人物を見遣る。

「久しぶり。……なんて、実の息子に言う言葉じゃない気もするけどね」

年齢を感じさせない美しい顔立ちの女性が、鋭い眼で昴を見ていた。

それは、昴の母親だった。母親であり、母親とは思いたくない人物だった。

昴は顔を歪め、唇を噛む。

「……なんの用だ」

いつもより更に低く、鋭く、昴ははねのけるように言う。
しかしいつでもそんな昴を見ていた母親に一切動じた様子はない。

「なんの用って、本当に偶然見かけたから声をかけただけよ。知らぬ間柄じゃないんだし」

「だったらさっさと行けよ。挨拶はすんだら」

言っと、母親が肩をすくめた。

「会えてちょうどよかったっていうのもあるのよ。話があつたから。由梨絵に伝えてもらおうと思つてただけだね。私たち、そろそろ離婚が成立しそうなの。由梨絵からは何も聞いてない？ あなたもいつまでも由梨絵の家にいるわけにはいかないでしょう？ そろそろ決断してもらわないと」

「……」

拳が震えた。

今までの幸せだった気分が全てぶち壊された。
メチャクチャに暴れまわってやりたい感情に駆られ、それでも昴

は泣きそうな顔で母親を見てしまっていた。

「私と一緒に住むにしても、父親と一緒に住むにしても。転校はしてもらうことになりそう。ま、どうせ今の学校に未練なんてないでしょう？　不登校なんだし」

「……」

「本当に、昂は私に何も言わないわね。まあ私のこと母親だなんて思っていないだろうから、仕方ないんだけどね。決めたら由梨絵に伝えておいてくれればいいから。一週間が限度ってトコだから、よろしくね」

母親がつらつらと無感情に言葉を吐き出し、背中を向けた。

「さよなら」

なんのためらいもない足取りで、母親が去っていく。

昂は視線を下に遣ることしかできない。

何も、結局、何一つ言葉にも、行動にもできなくて。

視界の端には楽しそうな女の子たちの姿も見える。でも、先ほどのように幸せな気分で見守る気分にはなれなかった。

「ッ」

激情に駆られ、持っていた紙袋をデパートの床に叩きつけた。

中からたんせい込めて作ったアップルパイが、飛び出してしまう。床に残骸が飛び散る。思い切りたたきつけたことによって、ぐちゃぐちゃになってしまっていた。

それは、今の自分みたいに見えた。

「昂？」

水知が声をかけてきた。

昂は、水知の声から逃げるように、その場から走り去っていった。

ハーレム四人目？

『鏡よ鏡、鏡さん、世界で一番美しいのはだあれ？』

持っている手鏡をのぞきこんで、分かりきつたことを呟いてみる。映っているのは自分の顔。二重で、強い色を宿す大きな瞳。長い睫毛、すつと通った小鼻、かたちのよい桜色の唇、凜とした眉、滑らかな肌。

見慣れた、自分の顔だった。

鏡に向かって問いかけてみたところで、返事なんて期待していない。

でも、鏡が応えてくれなくても、周囲がいつだって応えてくれる。

『美園ちゃん可愛い』

『美園ちゃんキレイ』

『美園ちゃん結婚して』

両親に蝶よ花よと育ててくれ、いつだって周囲はチャホヤしてくれて、自分が世界で一番美しいだなんて当たり前前の答えだと思っていた。女王様気取りでも、誰も咎めない、諫めない。私は、全てにおいて完璧なのだから。

なのに、なんでだろうか。

満たされためるま湯の世界は、全く、自分の心を満たしてなんかくれなかった。

ならば自分は一体何が欲しいのだろうか。こんなにも高みにいるのに、それ以上の何を求めているのだろうか。

もっと賞賛の言葉を？　もっと美しいプロモーションを？　もっ

と男を虜にすることを？

満たされきった世界で飢えきった美園は、更なる高みの世界に行けば自分が満ち足りるかもしれないという結論に達した。

だから、簡単にアイドルになってみせた。なんて適当な理由。でもアイドルになったところで、飢えた心は満たされない。

乾いて乾いて乾ききって。

このままじゃ、干からびちゃうよ、私。

そんな日々に、一滴の雫を落としてくれた人物がいた。

今でも鮮烈な映像として眼に焼きついて、美園の心を縛り付けたまま離れない。

入学した高校で、入学式に登場した、同じ新一年生の女の子。腰まである水色髪をさらりと揺らし、深く透き通った瞳で真っ直ぐに前を見据え、指先、足先まで洗練されきった、あどけない可憐な少女。

彼女を見た瞬間、電撃が身体を駆け巡った。

自分に足りなかったのは、賞賛の言葉でも体型を保つ努力でも男を魅了することでもなんでもない。

彼女だ。

自分以外の誰かを、はじめて美しいと思った。

もう鏡なんていらない。

自分じゃない誰かを心から、好きだと、手に入れたと思った。

初めての恋に落ちた瞬間から、美園は、戸惑いながらも心から彼女を欲した。何度も住まいへ足を運んで、なかなか訪ねていく勇気が持てなくて、遠くから見守る日々を繰り返していた。

彼女が言葉を紡ぐたび、心が震える。

彼女が笑いかけるたび、胸が締め付けられる。

それなのに。

今目の前にいる彼女は、走り去っていった彼女の大好きな人を見ている。眉を下げ、寂しそうに、見えなくなつた姿だけをひたすら追っている。

こんなにそばにいるのに、私には、彼女の心を手に入れることができない。

悔しくて、切なくて、哀しくて、噛み切れる程に唇を強く結び、彼女の背中を見る。

彼女の背負うリュックがもぞりと動いた。誰よりも彼女に近付こうと、彼女を知ろうとした美園は、リュックの中身がなんであるのかすらも知っているのだ。

美園は、服屋の店先に歩いて行き、落ちていた紙袋を拾い上げる。中にはぐちゃぐちゃに潰れたアップルパイが入っていた。りんごの甘い香りが鼻腔をくすぐり、妖艶に目を細める。

絶対に私の手に入らないのなら、壊してしまえばいいんだ。

だから美園は魔女のように口の端を吊り上げ、彼女へと歩み寄り、その耳元で囁いた。

「……ねえ、水知。昴の心を手に入れる方法を、教えてあげましょうか？」

昴は咄嗟にその場から逃げ出してしまったものの、すぐに後悔が押し寄せてきていた。

何も言わずに消えてしまったのは、さすがにマズイだろうか。多少は冷静さを取り戻しつつあったので、デパートの外に出てからようやく立ち止まる。

立ち止まったまま、身動きが取れなくなってしまった。

そのまま逃げてしまうことも、戻ることもできない。

棒立ちになって自分のどうしようもなさにも呆れさえ感じて、かなりの長い時間を消費してしまっていた。

いい加減どうするのか決断しようと思いついた時、シャツの胸ポケットに入れていた携帯電話が鳴った。

鼓動が跳ね上がる。恐る恐る取り出して確認してみると、着信相手は翔子だ。

息を深く吐き出し、動悸を少し落ち着かせてから電話を取る。

「はい」

『あ、佐藤君ですか？ どこに行っちゃったんでしょうか？ お買い物も終わりそうなので、みなでお昼ごはんでも食べようかって話してたんですけど……』

翔子の平和な物言いからは、昴の現状に気付いている様子はなかった。女の子三人で服選びに夢中になっていたことを申し訳なく思っている節も、感じ取れる。

昴は内心で安堵し、普通に話しかけてくれた翔子に感謝する。

「三人の方が楽しいだろうし、今日のところは、俺は帰る」

『えええ！？ そ、そそ、そんな、困ります！』

「なんでだ？ 女三人の方が気安いだろ。俺がいる意味がワカランし」

『分かるんです！ 帰っちゃダメです！ どこにいますんでしょ、今からそっちに行きますから、待っていてくれますか？』

「……なんでそんな必死になってるんだ？」

『だ、だって、だって、そのう……せ、せっかく美園ちゃんが選ん

でくれて、服、着替えたんです。その、とっても可愛い服を選んでくれて、嬉しくて、だから……」

昴は首を傾げる。翔子がしどろもどろになっている意味が分からない。

「なんだ？ 私服を俺に見てほしいってことか？」

「ッ、そ、そんなドキッパリと！ ち、ちちち違うんですよ！？ 自分が可愛くなったなんて決して思っていないですけど！ 服が可愛いんです服が！」

声まで裏返して相変わらず言い訳がましい翔子の言葉に、昴は思わず吹き出してしまう。

少しだけでも心が浮上していくのを感じる。今、この時、自分の抱える問題を思い起こす必要なんてない。美園、翔子、水知たちと楽しい一時を過ごしたら、きっと忘れられる。

昴は意地悪く笑み、携帯電話に向かって囁く。

「じゃあ可愛い可愛い副委員長を拌みにいくとするか。どこにいるんだ？ 俺がそっち行くわ」

「さっ、佐藤君はやっぱり意地悪です……」

翔子が真っ赤になっているのが容易に想像がついてしまい、昴の顔はますます嬉しそうに緩む。

『でもですね、やっぱり私と美園ちゃんがそっちに行った方がいいと思います』

「なんでだ？」

『……水知ちゃんが、佐藤君を探しに走ってどこかに行っちゃって。心配はいらなと思うんですが、早く合流した方がいいかと』

昴の緩んでいた表情が、途端に引き締まった。

水知が一人でどこかへと消えた。その事実を耳にして、冷静ではいられなかった。

「心配いらない！？ アイツは普通の状態じゃないんだよ！」

思わず声を荒げてしまう。

電話の向こうで翔子が息を呑む音が聞こえた。それほどに、鬼気迫る怒声になってしまっていた。

「普通の状態じゃない……？ だ、だって水知ちゃん、とっても元気いっぱいでした、よ……？」

舌打ちが漏れた。

水知は普通の、人間のように、晴れた日に元気に歩き回っている存在ではないのだ。

それに、自分は今一人でいるじゃないか。

きっと、水知やイズミにとって、苦しい状態になってしまっているはず。

今更その事実気付いてしまい、浅はかな行動を取った自分自身を呪った。翔子に八つ当たりしてしまったことに、自己嫌悪した。

「とにかく探してみるから、一回切るぞ！」

『え、ちょっと、佐藤く』

翔子の言葉を待たずに、携帯電話を切る。
顔を上げ、周囲に視線を巡らせる。

デパートの入り口付近には若者たちが集っていたり、自動ドアの向こうに吸い込まれていく光景が見られる。

更に視界をひろげていけば、併設する立体駐車場に道路から車が次々に入っていく。土曜日の駅前には多くの人間が、往来している。昂はその中で、水色の頭を探した。きよろきよろと眼鏡の奥の瞳を忙しなく動かし、次々に映る光景を切り替えていく。

水色の髪の毛。

その髪先が、ちらりと視界に入った。

昂はそちらへと向き直る。水知の背中が見えた。制服姿のままの水知は、何かを一生懸命に探している様子だ。

「昂う！ すーばーるーうー！ すばるうーっ！！」

何を探しているのかなんて、一目瞭然だった。

今までその声に気付かなかった自分を殴りつけたい気分になりながら、全速力で走っていく背中を追いかけた。

水知は必死に走っていた。だから、昂も一生懸命に走らなければならなかった。

背中に大声で呼びかければ気付いてもらえるのは想像がついたが、そんな恥ずかしいことはさすがに出来ない。何せ人通りが多い。しかも水知は目立ちすぎている。

昂は走りに走り、ようやく水知の肩に手が触れそうな距離まで追いつく。

「水知、俺はここだ！」

ようやく昂が声をかけると、水知がバツと瞬間で振り返ってきた。

昂は急ブレーキをかけ、立ち止まる。すぐに大粒の汗が浮かんできた。水知も汗だくになって、色白の頬が真っ赤になってしまっている。その上涙目で、泣きそうな表情で。

「よ、よかった、よかったよ……昂、何処かに行っちゃったと思って……」

安心したのか、ほんわりと表情を崩す。

それはいつも見せてくれる、何もかもを蕩かすような最上の笑顔だ。

昂は堪らなくなって、いつものように腹に力を込める。

「ば、バカかお前は。今生の別れでもあるまいに、あの叫びはなんだよ。クソッ恥ずかしすぎて他人だと思いたい」

そう言葉を吐き出している間にも、往来の人々の無遠慮な視線がじろじろと身に刺さる。可憐過ぎる女の子が捜し求めていた意中の人として、注目を浴びてしまっていた。限りなく恥ずかしい。

「だってさ……昂、遠くにいっちゃいそうな気がして……あの人と話してから、昂、すごく怖い顔してたよ」

「見てたのか」

「うん。あの人、昂のお母さんだよ。さっきわたし、少し話を」

「あんなやつ、母親だと思ってない」

昂は俯き、水知の言葉を遮って拒絶を示す。母親の話はしたくな

かった。心の中を占めているのに、それを誰かと共有したくなかった。

「そっか。……そうだ昂、はいコレ」

ずい、と水知が昂に紙袋を差し出してきた。

咄嗟のことで反応できず、ばかんとして水知を見つめることしかできない。

「とつてもおいしかったよ。ごちそうさま」

その言葉に嫌な予感がして、水知が差し出てきた紙袋の中を、恐る恐るのぞいてみる。

紙袋の中は、空っぽになっていた。

「お前……まさか、コレ、食ったのか？」

「うん！ やっぱり昂はお菓子作りの天才だね！ おいしすぎて一人で全部ぺろりと！」

「馬鹿野郎！ これ、これは、床に落ちてただろ！？ ぐっちゃぐちゃに潰れて、汚くて、めちゃくちゃだっただろうが！」

「お腹に入っちゃえば関係ないね」

ふふーんと何故か得意げな顔を見せる水知に、昂は頭を垂れてがつくりと脱力した。

「えっへっへ！……ア、レ？」

いつもの笑いが耳に届く。

外してしまった視界に、水色の髪の毛が見える。

それがゆっくりと、ゆっくりとスローモーションのように、下に落ちていく。

「……え？」

昴は顔を上げた。

水知は、その場に倒れていた。苦しげに顔を歪め、荒い息を吐き出していた。

これは現実なのだろうか、と呆然としている間も与えられず。

彼女の指先が、嘘のように、紙切れにでも変わってしまったかのように、乾いていく。

太陽が照りつける。広い空はどこまでも、どこまでも晴れている。

「水知!？」

昴は悲痛な叫びを上げ、水知へと駆け寄っていった。

ハーレム四人目？

周囲からもざわめきが上がった。人々の往来が多い昼下がり、幅の広い歩道に倒れたのは水色髪を持つ美少女だ。目立ってしまうのも仕方がない。

人の良さそうな中年の男が、心配気な顔を見せて近付いてくる。

「おい、君、大丈夫かい？」

おずおずと問いかけてくる男の視界からその姿を隠す為に、昂が水知の前へと庇うように立った。

「心配してくれなくても大丈夫だ。あっちへ行ってくれ」

昂は眼鏡の奥からでも分かりすぎるくらいに鋭い瞳を、じろりと男へ向けた。親切心で声をかけたらしい男は、昂の拒絶に不快感を露にした表情で、舌打ちして去っていく。

昂はもう誰も寄ってこないのを確認してから、水知へと向き直って腰を屈めた。

「大丈夫か水知」

掠れた声を絞り出し、水知の肩に触れ、その身体を弱く揺する。爽やかな涼しい風が頬を撫でているのに、昂の額には大粒の汗が浮かんでいた。

水知の方は、汗は完全にひいている。青白い顔に、嫌でも目に飛び込んでくる干からびた右手。身体も揺すってみても、実体なんてないんじゃないかと思うくらいに感覚がない。

今の水知の状態を、人目につかせるのは非常にまずいと感じた。

こんな街中でミイラ化なんてしてしまったら、確実に大騒ぎだ。

「クソ、どうすればいいんだよ!」

病院なんて人外である水知を連れて行けるわけがない。昴はパニックを起こしそうな自分の状態をなんとか落ち着かせようと、唇を強く噛んだ。

水知の瞼がわずかに上がった。どうやら意識が戻ってきたらしい。狭い視界の中に昴の姿を捉えていた。

「えへ。ごめん、なんか、迷惑かけてるね……」

「そんなこと今話すことじゃないだろうが。かなりマズイのか？俺はどうすればいい？」

「えっ、と……とりあえず、水のある、場所」

弱弱しく水知が言ってきたのを聞き届け、昴は意を決して水知を抱えあげた。まるで体重なんてない、それこそ本当に紙切れでも持っているような軽さだ。ますます昴の焦りは募っていく。

「クソッあのカップだって油断するなって言っただろうが！大体この肝心な時にあのカップはどこにいるんだよ!」

「……そいえば、いないね……」

水知が苦しげに紡ぎだしながらも、なんとか周囲を見渡そうとしている。

リュックをどこかに置いてきてしまったのだろうか。しかし今はイズミのことを心配している場合ではない。目の前にいる水知が、

最大の危機を迎えているのだ。

昂はがむしゃらに、走り出した。

なんでもいい、水のある場所に連れていかなきゃ……！

乾いた薄青色の空からは、雨の一滴だって降ってきそうにない。水のある場所に彼女を連れていかなばならない。水知は自宅にいる時も、いつだって水風呂に浸かっている様子だった。水に入れてやれば、今の状態を脱することは可能なのだ。

息が乱れて、喘ぐように浅い呼吸を繰り返す。足が縛れる。昂はあらん限りの全速力で走る。引きこもりによって運動不足になっている体には、相当な酷使だった。筋肉が軋んでいるようだった。

それでも走った。周囲なんて全く目に入らなくなるくらい、必死で、全力で、この腕の中で乾いていく女の子を、ただ助ける為に。目的地に定めていた公園が見えてきた。駅周辺にある広い公園内には、ありがたいことに噴水が設置されている。

昂は全速力のまま、公園に立ち入っていく。

休日の公園は、芝生で家族連れが遊んでいたり、カップルがバトミントンをしている光景が見られた。今の水知の状態とは天地の差ほどある、平和な光景だった。

そんな長閑な休日の光景の中で。

昂は、おもむろに、水知を噴水へと投入した。

ばしゃん、と大きな水の音があがった。公園内の人々が、一体何が起こしたのかと、状況を理解できずに、ぽかんとした顔で噴水に注目を集める。

昂は乱れきった息を吐き出し、全速力で走りすぎて嘔吐感が込み上げてくる状態で、噴水を見下ろした。

「水知、無事か……？」

乱れた呼吸の合間合間に、噴水に投入した水知へとなんとか言葉をかける。

水知の身体は、力なく水の中に沈んでいた。水にユラユラと髪の毛だけが浮いていて、まるで水死体のように見えてしまって、昴はゾツと心臓が冷えるのを感じた。

「お、おい、みず」

「ぷはー！」

おもむろに、水知が水の外へと顔をあげてきた。

「強引だよ昴。まさか投げ入れられるとは思わなかったよ」

浅い噴水内で水知は四つんばいの姿勢でいる。恨みがましい半目がじつと見つめてきて、昴はほーっと安堵の息を漏らした。その場へとずるずる腰をおろしていく。

「もう、大丈夫なんだよな？」

ずぶ濡れ状態ながら、ミイラ化していない可愛らしい水知の顔を見て、完全に力が抜けてしまった。昴は弱弱しく問いかける。

「……そうでもない、みたい」

水知が気まずそうに苦笑し、言ってきた。
昴は目をむく。

「え、だって、お前は水の中に入れば」

大丈夫なんだろう？ という問いかけは途中で止まってしまう。
水知が立ち上がり、ざばざばと昴の方へと近付いてくる。

「ほら」

右の手のひらを眼前に突き出してきた。

その手は、先ほどみた時と全く同じ状態だった。老人のようにしわくちゃに乾ききって、簡単にぽきりと折れてしまいそうな、干からびた醜い指先のままだった。

「な、んで……」

水知は困ったように眉を下げ、それでも笑顔を浮かべている。

「えっへっへ。どうやらわたし、もう限界みたいだね」

「限界ってなんだよ。お前は、俺がハーレム状態だったら元気だつて言」

「わたしに必要なのは、昴との夫婦の繋がりなんだよ」

水知が昴の弱弱い声音を叩き潰すように、言葉をかぶせてきた。

「ハーレム状態が必要なのは、イズミちゃん。わたしが必要なのは、昴との夫婦の繋がりなんだよ」

噴水の中と外で会話を交わす二人へと、公園内の人々の注目が集まってきた。昴は気づかずにいるのを感じた。

昴は気まずそうに眼鏡の縁をいじり、水知を直視できずにうつろうと視線を泳がす。

「な、なんだよそれ……」

「ごめんね、今まできちんと話さなくて。わたしのこの体の乾きを止めるには、昴との夫婦の繋がりが必要なんだよ」

「……」

愕然とし、その言葉を聞いていた。

だって、そんな、じゃあ

「俺と繋がろうとしてたのは、その為だったってことか……？」

「そうなるね。渴くのを止めるには、その方法しかないから。わたしとイズミちゃんの主従関係で繋がってるから、イズミちゃんのパワーが強くなればわたしも元気ではいられるんだけど。でも、この体質を止める方法は、その一つしかないんだよ」

諦めたように、水知が言ってくる。

「お前を助ける為には、え、と、その、俺と、その……」

「せつくすするしかないね」

「ハッキリ言っな！　ここは健全な公園内だぞ！？」

「なりふり構ってられないから。わたしには、もう、時間がない」

水に入っても干からびたままの手を見てしまうと、水知の言葉に重みを感じる。

昴は俯く。

「……お、お前の命が助かるんだったら……」

あまりに恥ずかしくて、顔から火が噴出しそうだった。肯定の言葉もうまく紡げずに、しどろもどろになってしまふ。

「昴、わたしと夫婦の繋がりを持ってくれるの？」

「っ、し、しょうがないだろ！？ 人の命がかかってんだぞ！人間じゃないけどな！」

「わたしに触れるの、怖くないの？」

「そ、そんなの、やってみなくちゃ、わかんねえよ……」

心の底から、彼女を抱き締めたいという衝動はいつだってある。輝く笑顔を見るたび、胸が締め付けられて、鼓動が高鳴って、自分はこの少女のことが大好きなんだと嫌でも思い知らされるのだ。それでも、

実際、身が竦んでいるのは確かだった。

干からびた右手を見て、畏れを抱き、彼女の存在自体にすら感じる恐怖は拭えない。

「じゃあ、証拠、見せてくれる……？」

珍しく水知の声に力がなかった。

噴水の中に入ったままの水知は、昴をおそろおそるといった様子で見つめている。その顔にはいつもの、真っ直ぐな瞳も、真っ直ぐな笑顔もない。

「証拠って、なんだよ」

「今ここで、キスして」

水知の言葉に、今度こそ完全に固まってしまった。

しばらく、呆然と水知を眺めてしまっていた。水知は恥ずかしげもなく、表情一つ崩さず、試すような瞳で昴を見ている。

なんで水知は、さっきから笑ってないんだろうか、なんて思考の片隅で考えた。

「キスしてくれたら、昴がわたしのこと怖くないって信じられる。わたしのこと助けてくれるって、信じられる」

「……ここじゃなくてもいいだろ」

「ここじゃなきゃ嫌だ。今すぐじゃなきゃ嫌だ」

じつとりと手汗が滲み、昴は拳を握り締めた。

駄々っ子のように言ってくる水知の顔はいまだに真剣そのもので、噴水の中から出てこようとしてもしない。注目は程よく集まりまくっている。この状況で、公衆の面前で、引きこもり不登校の自分が女の子にキスをするなんて、できるわけが

「やればいいんだろ」

プツツ、とどこかの線が飛んでしまったらしい。目は完全にすわってしまっている。

それは、水知の瞳の中に、哀しげな色を見てしまったからだだった。彼女を救えるのは、自分しかない。だったら、こんな自分でも、何かできるんだったら。

昴は覚悟を決めた。もう周囲の目は気にしないことにする。視界

をシャットダウンし、目の前で瞳を揺らす水知だけを見つめる。

一步、彼女へと近付く。

ざり、と地面が靴音を立てる。

びくり、と水知が身体を強張らせる。その両肩を、掴んだ。

折れてしまいそうな、華奢な肩だった。髪の毛から滴り落ちてくる雫が、昴の手の甲を濡らす。

肩を掴む指先が震えてしまっていた。水知の身体も、震えているように感じた。

「す、昴、本気？」

「ここまで来て引けるかよ」

おずおずと見上げてきた水知のあどけない顔が可愛すぎて、人目や恐怖心以前に、その誘惑に逆らえそうになかった。大丈夫だ、水知は怖くない。水知は、怖くなんかない。

自分に言い聞かせながら、ゆっくりと顔を近付けていく。ふっくらとした唇が見えた。

それが触れ合う寸前、昴は目を閉じる。

なのに。

胸を強く、どん、と押された。

「うあっ？」

正面からの唐突すぎる攻撃に、昴は抗うことが一切できずにその場にしりもちをついた。

「なにすんだ！」

目を開けて、水知を見上げた。水知は、既にくしゃくしゃに泣い

てしまっていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

子供のように泣きじゃくり、次から次に溢れてくる涙を手の甲で拭っている。その手の甲は、健康的なものに戻っていた。昴はすぐにその事実気付いて目を見開いていく。

「ごめんなさい……嘘、ついて、ごめんなさい……」

「嘘？」

「昴の気持ちを試したくって、わざと、ピンチなフリしてた。本当は、全然元気なのに」

「だってお前、実際干からびて……」

「こんなことだってできるんだよ」

水知が言葉を発した瞬間だった。噴水の中にいる水知が、その全てが瞬時にミイラ化した。昴はひっと息を呑む。瞬きの間に、水知は元の姿に戻っていた。公園内の人々も、一瞬のミイラ化状態は目の錯覚くらいに思っただろう。

「昴に心配してほしくて、わざと倒れたんだよ。わざと、手を乾かしたんだよ。昴の気持ちを手に入れたくて、だから、あんなこと……」

「夫婦の繋がり云々って話も、でたらめか？」

水知が手の中に顔を埋めたままで、首を振る。

「うっん、わたしの渴きを止める為に昴に近付いたのは、繋がりが必要なのは本当だよ。でも、こんな風に試して、嘘で固めて、そんなの、やっぱり嫌だよ……だったら、もう」

「いくじなし」

唐突に、言葉が差し挟まれた。

昴は声の聞こえた方を見遣る。水知も顔を上げて、昴の視線を追いかけてきた。

盛り上がった胸にカップのぬいぐるみを抱いて立っていたのは、美園だった。厳しい眼が、水知を見ている。

「あなた、死にたいの？ なりふり構ってられないんじゃないの？
今更怖気づいて、逃げるの？」

ずんずんと美園が近付いてくる。

昴は混乱極まって、棒立ちになるしかなかった。

何故美園が突然現れたのか、何故美園は、イズミを抱えているのか、翔子が見当たらないがどこにいるのか、何故美園は、事情を知っている口ぶりなのか

「毒リンゴを口に入れてあげたのに。王子様の救出を待たずにそれを飲み込んで、あなたは死のうつつっていうのね」

「おい、美園、お前は何を言って」

「そんなのは絶対に許さないわ」

美園が強く言ってくる。水知は俯き、頬にはまだ涙が伝っている。イズミはぬいぐるみのフリでもしてるのか、カチコチになっていた。しかし美園の迫力が恐ろしいのか、わずかに震えている。

「昂に近付いたのは、自分が助かる為。昂をハーレム状態にしたいのも、自分が助かる為。キレイごとなんてもういいから。いい加減認めなさいよ」

美園の言葉は、昂の胸にも突き刺さった。深く鋭い棘のように、チクチクと胸を苛む。

「……もう、君の許可なんていらないわ」

美園は強く宣言し、横に立つ昂を射殺するような眼差しで見上げてきた。

「な、なんだよ許可って」

おもむろに、だった。

美園が、昂の唇に、自身の唇を強く押し付けてきた。

「！？」

あまりに突然のことで、頭が真っ白になる。

その間、数秒ほど。昂にとっては、とてつもなく長い時間を感じられた。

寄り添ってきていた美園がすぐ様身体を離し、いかにも嫌そうに唇をごしごしと拭っている。頬は真っ赤に染まっていた。

大胆かつ乱暴な口付けは、あまりにぎこちなすぎて、見た目は遊んでいるように見えるが、実はキス経験すらないのではないかと

感じた。

もちろん、昂にとってもはじめてのキスだった。

「強制入場したから。これで私もハーレムの一員よ」

「……」

もう、ぽかん、として美園を見るしかなかった。

ハーレム四人目？（後書き）

更新が遅くて申し訳ないです。

残すは最終話のみです！ノロノロ更新かもしれませんが、最後まで付き合ってくださいと幸いです！

ハーレム？人目？（前書き）

遅くなってしまつて申し訳ないです……

最終話突入です。

久しぶりの更新が、一番暗黒シーンつて。最終話はやはり一気に読んでほしい。なるべく早めに完結まで更新していく努力をしてみます！

ハーレム？人目？

先ほどからアパートの玄関ドアを叩く音が、何度も聞こえる。

それでも昴は布団を頭まですっぽりとかぶったまま、そこから顔を出すことすらしなかった。厚い布団の向こうから、最初に聞こえてきたのは呼び鈴。続いて、ドアをはげしく叩く音。

「すばる、出ちゃダメなの……？」

布団の横で、柚季が寂しそうな元氣のない声を出している。昴にその姿は見えなかったが、きつと眉は下がり、いつもびよこびよこ揺れている触角髪ですらぺたん、としてしまっただけいそうな覇氣のない声だった。

「出るな」

昴はそれでも、容赦なくぴしゃりと告げる。

先ほど呼び鈴が聞こえてきた時と、同じトーンのまま。

これで三日目になる。

三日前、水知が倒れて昴は必死の思いで彼女を助けようとした。

それが水知の嘘であったと知り、美園が意味不明なハーレム参加表明をして。

昴は、限界を迎えた。その場から逃げ出して、そのまま自室の布団の中にこもり、必要最低限以外に布団の外に出なくなった。

バイトもずっと無断欠勤を続けている。姉も最初は無理矢理に昴の布団を引き剥がそうとしたけれど、あまりに頑なな態度に、諦めてしまった。この状態の昴に柚季を預けることを心配していたが、柚季自身が「昴といっしょにいたい」と姉に告げているのを聞いた。

だから、昼下がりの今も、布団の横で柚季がちょこんと座っている気配はずっと感じている。寂しそうに、それでも、多くの言葉はかけてこない。ただ、そばにいてくれていた。

ここ最近の自分がアクティブすぎたのだ。浮かれきって、バカみたいにはしゃいで。

本来の自分は、こんな奴だ。

誰かと仲良くなりたいなんて夢を見ていたのは、やっぱり夢でしかなくて。

人とのコミュニケーションが煩わしくて、そんな自分には一人が似合っている。そう思っていたはずなのに。

それなのに、他人との繋がりがなんて目には見えない不確かなものを信じて、動いて、そしてやっぱり裏切られた。

……あの時。

ぼろぼろ涙をこぼす水知から、自分の気持ちを手に入れる為にこんな手段を取ったのだ、と聞いた時に、胸が締め付けられるように苦しくなった。心が、メチャクチャに踏みにじられた気分になった。だって、知っているから。

水知は昴の願いによって現れた存在で。彼女は自分を無条件に好きで、何を言っても笑顔を絶やさず、怒らない、傷つかない、他の女の子と一緒にいても平気で、それを応援すらしてくれる。……なんて都合のいい存在。

でも、それすらも嘘なのかもしれない。水知は自分の身体を治す為に近付いた、と言っていた。

もう誰の言葉も信じられない。誰の言葉も、響かない。

昴は身体を可能な限りちぎこませて、布団を更に目深にかぶる。梅雨前のこの時期、気温は日に日に高くなってきている。厚い布団をかぶっていると、汗が滲んでくる。それでも昴はそこから出ない。出られない。

思い知ってしまった。

結局、全員、両親と一緒にじゃないか。昴が求めても、結局は昴の

ことなんか見てやしないのだ。誰しも自分が大切なんだ。他人に踏み込んだって傷つくだけじゃないか。

閉鎖された暗闇の中で、息苦しさに吐息が漏れる。この場所は安眠なんて全くなくて、それでも、もうこんな場所に逃げ込むしかなかった。

まるで昴自身みたいな、暗闇の中。

自身の息遣いと心臓の音だけが聞こえてくる。

もういらない。何も必要ない。みんな消えればいい。みんないなくなればいい。

ずっと、そうしていた。幼稚園から帰ってきた袖季だけがそばにいてくれていたけれど、あの日から水知がどうなったかは知らなかった。こういう時押しかけて騒ぎそうなイズミも、姿を見せない。

時折不安が押し寄せて心配になったが、すぐに振り払った。

もう関わりたくない。これ以上関わって、傷つきたくない。

携帯電話も電源を落としたままなので、唯一の友達登録されている翔子からの連絡もない。

今ドアを叩いている人物は、三日前からしつこく何度も押し付けてきているのだが、昴は彼女の呼びかけに反応する気もさらさらなかった。

「開けなさいよ昴！ 開けなさいって言うてるのがわからないの！
？ ふざけんなー！！」

愛らしい高い声が、自分を何度も呼んでいる。

アパートの安っぽくて薄いドアの向こうからの声は、布団の中の昴にもかすかに届いていた。だから、三日前からこの時間になると誰が来ているのかは知っていた。

美園が、必死に昴を呼んでいた。

でもそれがなんの為であるのかも知っている。自分の為じゃない。彼女は全ての事情を知っている様子だった。だから水知を助ける為

に、ハーレムに入ると言ってきたのだ。そんなのはいくら鈍い自分でも、ちよつと考えてみればわかることだった。

布団の中でそつと唇に触れてみる。

乱暴に押し付けられた唇の感触は、まだ残っている。それを思い出す度、動悸が早まる。でも、その昴の純情ですら利用されたにすぎないことを思えば、強く唇を噛んでその記憶を消し去りたいと思うだけだ。

引きこもりの自分がハーレムなんてちゃんちゃらおかしいと思っていたけど、おかしいどころか、こんなこと全て嘘だったのだ。騙されていたのだ。

「やっぱり……誰も、俺を好きじゃないじゃないか」

ぼそ、と呟きが漏れた。

ハーレム作る宣言されて、幼い柚季が意味もわからず入ってきて、自分の力を取り戻す為にイズミが入ってきて、その場の勢いで翔子を無理矢理入れて、水知を助けたい為だけに美園が参入して。

ハーレムを作るって言っていた本人も、自分の身体を治す為で。バイト先も、クラスメイトも、教師も、両親も、誰も自分を見ていない。

昴のハーレムには、最初から誰もいなかった。

自嘲気味に笑みが漏れた。

……俺、生きてる意味があるのか？

自分が他の人よりコミュニケーションを取るのが苦手だと知ったのは、小学生の時だった。

物心ついた頃から両親に笑いかけられたことがなくて、話しかけられても応えてくれなくて、必要最低限の生活の世話を面倒そうにこなしている母親の鬱気な横顔ばかり、見上げていた。

年の離れた姉は昴より少しだけ生き方が上手で、両親に対しては諦めていて、外に人との繋がりを求めている。小さい昴の面倒は見

てくれていたが、彼女もどうやって人と接するのかうまくは分かっ
ていなかった。だから昴に答えはくれなかった。

「どうやって話しかければいいんだろう？」

「なんでみんな、笑っているんだろう？」

「どうやって笑えばいいんだろう？」

「どうすれば、好きになつてくれるんだろう？」

「考えても、考えてもわからない。誰も答えてくれない。」

「沈んでいく。」

心がどんどん沈んでいく。水の中で溺れているみたいだった。何
もつかむものがなくて、全身をばたつかせて水しぶきをあげてなん
とか浮上しようとしても、水分を含んだ身体がどんどん重たくなっ
ていく。

いつも俯いていて、誰かが話しかけてもうまく応えられなくて、
同級生たちは離れていく。大人は眉をひそめる。

たった一人の自分を守る為に、ただ乱暴な言葉だけを身につけた。
そしてまた孤立していった。

「沈んでいく、沈んでいく。」

もう頭も身体も、すっぱり水の中だった。息が苦しくて、酸素が
欲しくて、水の上に這い上がろうとしても、伸ばした手は届かない。
両親は昔から不仲で、まともな会話をしているのは聞いたことが
なかった。たまに話していると、お互いを罵りあう汚い言葉ばかり
だった。成長するうち、なんであんなに仲が悪いのに一緒にいるん
だろうって疑問すら芽生えた。離婚という単語も覚えていたので、
母親に『なんで離婚しないんだよ？』と乱暴に聞いてみたことがあ
る。

『あなたがいるから離婚しないのよ』

忌々しげにそう言われた時、昴の心はくしゃくしゃに握りつぶさ
れたみたいだった。

沈んでいく、沈んでいく、沈んでいく

それでも愛のない両親は限界を迎え、離婚をする事になった。
どちらと住むのか聞かれた昴は答えが出せずに姉の家に逃げ込んだ。
学校からも逃げ出した。

そして、今も。

もう水上には上がれないほどに、沈んでしまっていて、
全てから逃げ出した昴は布団の中に引きこもって、
ドアの向こうから何度も自分を呼ぶ声を見殺しして、
助けようとしていた少女の存在を、自分の中から消すことに必死
で、

唇が震えて何度も切れそうなほど強く噛んでいて、
汗が滲んで苦しくて、
それでも布団の外に出るのが怖くて、
恰好悪すぎるくらいずっと涙が止まらなくて、

「すばる、大好きなの」

そんな中で聞こえてきた小さな声が、
自分の中に少しずつ、少しずつ、沁みこんでいった。

ハーレム？人目？

昂はハッとして顔を上げ、乱暴に自分の涙を拭った。

「ユズは、すばる大好きなの。大好きなの」

懸命に自分に向けて、言ってくる声が布団の向こうから届く。か細く幼い声は、それでもしっかりと気持ちを伝えてくる。何度か、何度もだった。

「大好きなの。大好き、大好きなの、すばるのこと、大好きなの……」

もう取り返しのつかないくらいどうしようもなくボロボロになってしまつて傷ついて泣いていることに、柚季は気付いているのだろうか。十年以上も抱えてきた心の傷を、少しでも癒したくて、それでも上手なやり方なんて分からないくらいに小さい女の子が、不器用に、何度も、何度も、何度だって。

柚季自身も泣いているみたいに聞こえてきた。

昂はそろそろと布団を持ち上げ、こっそり柚季の顔をのぞき見てみる。

柚季は大きな瞳に涙をいっぱい溜めて、顔を真っ赤にし、真剣な表情で芋虫状態の布団を見つめていた。昂がのぞき見ていることは、まだ気付いていないらしい。

「ユズね、ほんとだね、ずっと、ずっとさびしかった」

しゃくりあげながら、涙がこぼれるのを必死に堪えている様子で柚季が言葉を紡ぐ。

「ママもパパも、ユズといっしょに大きなおうちにすみたくて、それでね、おしごとがんばってるの。だから、ユズもパパとママのおじゃましちゃいけないの。いっぱいガマンするの。でも、でも、ほんとはずっとさびしくて……言えなくて。でもね、すばるといっしょにいるとね、さびしくないの。すばるがいっしょにいてくれて、うれしかったの」

拙い口調で一生懸命になって自分の気持ちを伝えてくる少女の姿は、昂には眩しいくらいに映った。

「だれも好きじゃないなんて、ちがうの。だってユズは、ほんとにすばるが大好きなの。うそなんかじゃないの」

少しだけ、沈んでいた身体が浮いたような感覚だった。

昂はそのそと布団から這い出る。柚季がびっくりしたように瞳をまんまるにさせて、昂を見つめてきた。

「なんか……ごめんな」

それだけ言うのが精一杯だった。掠れた小さな声をなんとか絞り出して、柚季を直視できなくて視線を逸らしたままポソポソと告げた。

柚季の気持ちまで嘘にしまった自分を、情けなく思う。こんな小さな女の子が、駆け引きなんてできるわけなんかない。だから彼女の言うことだけは、信じてやらなきゃいけないじゃないか。

自分と同様にずっと寂しい思いを抱えてきた、柚季という少女を守ってあげないと、そばにいてあげないと。

それだけの存在意義だけで、昂にはとてつもなく救いだった。おそろおそろ小さな頭にぼん、と手を置いてみる。

柚季は一層顔を歪めて、昴の懷に飛び込んできた。

「これからもずっと、いつしよなの！ どこにも行っちゃだめなの！」

昴は言葉にならなくて、ただ頷く。

胸に飛び込んでくれた少女の頭をぎこちなく撫でてやりながら、いつの間にか美園のとなり声が聞こえなくなっていることに気付いた。

顔を上げて、周囲の様子を探る。小さな住居空間は、柚季のしゃくりあげる声だけが時折聞こえるだけで、昼下りのアパートは静寂に満ちていた。

諦めて帰ったのだろうか。昴は少しの間、柚季の気分が落ち着くのを待ってから、外してしまっていた眼鏡を手にとった。

久々に眼鏡をかけてみて、世界の輪郭がくっきりと見えてきた。三日間も現実逃避していた。世界がはつきり見えてきた今でも、落ち込んだ気分は変わらない。傷ついた心は傷ついたままだ。それでも見返りを何一つ求めず付き添ってくれていた柚季の為に、少しでも元氣になったところを見せなくてはと、無理矢理に心を奮い立たせた。

立ち上がると、柚季が心配そうに見上げてきた。下がりはなしの眉を見ると、自然に苦笑が漏れる。こんな幼い子にまで心配をかけてしまうなんて、自分はどれだけ弱くて脆い人間なのだろうか。

「ちょっと様子見てくる」

柚季に告げ、なんとなく足音を立てないようにコソコソと、玄関ドアの前まで行ってみて。

鼻をすすっている音に気付いた。

ドアの向こうですんすんと鼻をすすっているのは、美園だろうと

すぐにわかる。

「なんで……なんでお前まだいるんだよ」

昴はドアを開けないままで、小さく呟いた。振り返って時刻を確かめてみると、訪問から軽く一時間は経過していた。

美園に昴の小さな声が聞こえたのか、鼻をすんすん鳴らしていた音がピタリと止む。

しばらく沈黙が続いた。

「……なによ、なによなによ今更。三日も無視してたくせに。あたしがハーレムに入るのがそんなに嫌なの？ キスまでしたのに、逃げ出して。取り残されたあたし、メチャクチャかつこ悪いじゃない。ファーストキスだったのに、あの子フラレたのね、って同情的な目まで向けられたのよ」

やはり初めてだったか。あの時の乱暴なキスのことを思い出して、凄まじい恥ずかしさが込み上げてきて、昴は俯く。

「お前さ、ハーレムの意味がなんなのか分かってるのか？ 俺のことう好きじゃないお前がさ、入るって明言したところで……意味なんかないだろ。カップパにしたって無意味にハーレム入る宣言してただけだな。ハーレムってそういうことじゃないんだよ、たぶん」

「そんなの、わからないじゃない。あのバカップパはあたしが正体見抜いたら開き直ってさ、あたしをそそのかして、全部説明して助ける為に昴のハーレムに入ってくれて頼んできたわ。バカップパが昴のそばにいれば元気になるって言うんだから、だから少しでもそばにいなきゃいけないのに……とことんあたしをバカにしてるわ。ずっと無視して……」

声に力がなくなっていく。ドアを挟みとする内容の会話ではないかと思ひ立ち、昴は一步ドアへと近付く。

「開けないで！」

昴が近付いてきた気配を聴く察知したのか、美園が厳しい言葉を放ってくる。

昴は足を止め、息をついた。三日間開けると懇願していたくせに、今度は開けるなっということだ。彼女の言動の滅茶苦茶さについていけず、肩を落とすしかない。

柚季が気付けば隣に立っていた。
不安げな眼差しでドアを見つめ、昴の手をぎゅっと握ってくる。

「おねえちゃん、すばるのこと、きずつけないでほしいの！」

唐突に柚季が強く声を張り上げたので、横に立つ昴はぎょっとする。

柚季は眉をしかめ、厳しい眼でそれでも不安げに瞳を揺らして、玄關ドアを見つめ続けている。

「すばるがへんになっちゃったのは、おねえちゃんのせいなの！
すばるがすきつてうそついたおねえちゃんのせいなの！ だから、
だからおねえちゃんはすばるのハーレムにはいつちゃだめなの！」

「お、おい柚季……」

ドアの向こうから、呻きのような力のない声が聞こえてきた。

「とことん最低な気分だわ……ここまで拒絶されるなんてね。それ

でも……助けたいの。あたし、なんにもできなくて……助けたかったの……なのに、なんでよ、あたし、なんにもできないの……？全部空回り。仕事キャンセルしまくって、こんなことばっかしてて、アイドル業すら危ういのよ。それなのに、なに一つ届かない。ハーレムに入るなって言うなら、あたしに何ができるっていうのよ」

美園が開けるなと言った意味が、この時ようやく理解ができた。彼女は泣いているのだ。声が震えないように必死で繕って、泣いていると気取られないようにしながら、それでもきつと溢れてくる涙が止まらないのを見られたくないのだろう。プライドの塊である彼女らしい。

「あんたもあの子も、あたしのことなんか必要ないのよね。仲良くそろって引きこもっちゃって、あたし一人で騒いで、バカみたい」

その言葉を聞いて、昴は瞬時に顔を強張らせた。

「あいつが引きこもってる？」

「そうよ。あんたと一緒よ。三日前からいくら呼んでも出てきてくれない。鍵かけちゃって開けてくれないの。バカッパすら返事がない」

美園の言葉を聞き届け、咄嗟に昴はドアノブに手をかけていた。一気にばあんと開け放つ。制服姿の美園が啞然とした顔で立っていた。

いきなりの昴の行動に、立ち尽くしていた美園が我に返り、真っ赤になって慌てて袖口で涙を拭っていた。

「な、ななな何よ！ 泣いてなんかいいわよ！ 誰が開けていいっ

て言っただのよ！」

美園の喚きをスルーして、昴は外へと飛び出す。久々に吸った外の空気は、特になんの感慨も抱かなかった。それどころではなかった。

靴もはかないまま、昴は隣の住居前へと駆ける。

インタフォンを押す。二度と会いたくない、存在すら忘れてしまいたいと思っていたはずなのに、無意識での行動だった。呼び鈴に反応はなく、焦燥感からドアを何度も拳で叩いた。

額に汗が浮かび、呼吸が乱れる。

どンドン、どンドン、と何度も拳を打ち付けるうちにひ弱な拳が真っ赤になっていった。

隣の住居に、人の気配は全く感じられない。

最初からそこには誰にも住んでなかったかのように、ドアの向こう側はひっそりと静まり返っている。

その時、ある可能性が浮かんできて、昴は拳を止めた。

昴の願望によって現れた存在であるならば、昴が否定してしまつたら、その存在ですら消えてしまうのでは？

そもそも、あの渴いていく少女は、偽りの水の神様は、本当に存在なんてしていたのだろうか。

昴はゾクリと背筋を凍らせ、おそろしい考えをなんとか頭から打ち消す。

彼女はいた。幻なんかじゃない。何度も会って、会話を交わした。その記憶ははつきりと自分の中にある。昴を振り回して、昴の心を掴んで、昴の心を傷つけて、昴もたくさん彼女を傷つけてしまつて、それでも浮かんでくるのは、花が咲くような満面の笑顔ばかりで、昴は急いで部屋へと舞い戻った。

美園と柚季も、慌てた様子でついてくる。でも、その二人に目を向けている余裕すらなくて、呼吸すら忘れて押入れを一気に開け放つ。

愕然とした。

押入れは、普通の押入れだった。使われていない布団がきちんと仕舞われており、昴の荷物やなんかがちやごちやと置いてある。特になんの特徴もない安アパートの一室に備え付けられたただの押入れ。

眼鏡の奥の瞳を可能な限り凝らしてみても、あるはずのものが見つからなかった。

「うそ、だろ……」

穴が開いているはずなのに。

押し入れを開けるたびに視界に入ってくる穴を見ては、溜め息をついていたのに。姉にばれたら殺される、と青ざめていたのもアリアリと思いつける。

それなのに、ぬいぐるみが一つ抜けられるぐらいに開けられたはずの穴は、なくなっていた。

振り向くと美園が怪訝そうな表情で昴を見ている。柚季が、不安そうに昴を見上げている。

「おい、美園。お前が大好きで助けたかった女の子の名前はなんだった？」

「ハア！？　べ、べべべ別に全然大好きとかじゃないけど！　ただかわいそうだから助けたかっただけで……って、あれ……」

頬を染めて必死に喚いていた美園の声が、徐々に小さくなっていく。

「どうしよう、どうしよう昴！？　あたし、あの子の名前がわからない！　思い出せない！！」

すがり付いてきた美園は、瞳を潤ませていた。
昂も瞳が揺れる。身体も震えてしまっていた。

俺の望みで現れた存在だから、彼女は消えてしまった？

「そんな、そんなのって……間に合わなかったの……？　もう、いないの……？」

美園がずるずるとその場にヘナヘナとへたりこみ、項垂れている。くしゃりと顔を歪ませ、今度こそ子供みたいにわあわあ泣き出してしまった。

美園の気持ちが手に取るようにわかってしまつて、昂は唇を噛んでつられてしまいそうになるそれを堪える。

ぎゅっと強く拳を握り締めた。不安な心を打ち消すように、震える身体を止める為に。

柚季が自分を見ている。

柚季の小さな愛は、自分の中に確実に届いている。だから。

まだ、消えてなんかいないはずだ。小さな愛が、暗く閉ざされた洞窟の中に少しでも光をもたらしてくれている限り。

昂は覚悟を決め、腹に力を込めた。

三日間ウジウジと悩み続けた自分の迷いが、吹き飛んでいく。

もう逃げるはやめだ。

どんなに傷けられたって、何度だって傷つけられたって、もう関係ない。

あの女の子の笑顔が見られなくなる方が、全てを上回るほどに辛い。

引きこもりで、不登校で、コミュニケーションが取れないくらい毒舌で、顔が怖くて、弱くて、情けなくて、脆くて。

そんな自分が、戦う理由を一つだけ見出す。

彼女を失いたくない。

だから、運命の神様にですら背いてやる気持ちで、洞窟の中に閉じこもってしまった彼女を助ける為だけに、昂は意を決して瞳に光を宿す。

「絶対に、消させるもんかよ」

そう言った。

ハーレム？人目？

「……事情は大体、把握しました」

呼び出しに応じて国生家に駆けつけてくれた翔子が、淡々と述べた。分厚い眼鏡の奥の瞳も、いつもより覇気がないように見える。覇気がない、というか若干怒っている仏頂面風にも見える。

昂の居候先である、国生家の六畳の和室。時刻は既に夜七時を過ぎてている。

状況は変わらないままだった。幼少の頃、昂が願ったことによつて産まれた水の神様、そしてその使い魔。その二人の存在はどこにいつてしまったのかわからないまま。しかし昂にも柚季にも美園にも、確かにその二人の存在は記憶として残っている。しかしその記憶も、手のひらにすくい上げた水のようにさらさらとこぼれ落ちていく感覚があつて、昂の中で焦りとなっている。美園はもうプライドもへつたくれもない状態で、ずっとぐずぐず泣き続けていた。

行動する、と決めた昂はまず翔子へアプローチを試みた。あの人外二人をよく知る人物といえば、もう翔子しか残されてない。しかも翔子は、インターネットで二人と頻繁にチャットのやりとりをしていた。きっと昂の知らない二人の側面も知っているはずだ。

携帯電話の電源を久々にONにして、翔子をここへ呼び出した。翔子はすぐにいつもの制服姿でここにやってきてくれた。帰宅してきていた由梨絵に丁寧な挨拶してから、昂の部屋へとやってきた。その表情はここに来た時からずっと仏頂面のままだ。

あの二人が人外で、昂の為に現れた存在であることは知らなかったらしく、口を挟むことなく話を聞いてくれていたが、ずっと動揺で瞳が揺れていた。

柚季は由梨絵と二人、夕食タイムで席を外している。由梨絵は「お友達も一緒にどう？」と夕食を一緒に誘ってきたが、今はとても

そんな気分にはなれない。制服姿のままの女の子二人も同じ気持ちだったらしく、翔子は丁重に断っていた。美園にいたっては由梨絵の存在は全く眼にすら入っていない様子だった。

美園は部屋の片隅で小さく体育座りをして、顔をうずめている。昴が翔子と話している間も、ずっとそうしていた。

「佐藤君は、どうしたいんですか？」

翔子が昴の方を見ないまま、抑揚なく聞いてくる。

「……俺は、あいつらを失いたくなんかない」

「でも、三日間ずっと塞ぎこんでましたよね。それは全てから逃げ出す為で。あの二人の存在がどうなっても構わないって、そう思っ
ての行動だったんじゃないんですか？」

「……確かに、そう、思ってた……」

翔子の厳しい物言いに、昴は顔を俯かせる。何一つ言い返せない。

「勝手すぎます。消えちゃいそうだからって、今更焦って。だって、なんで最初からきちんと向き合わなかったんですか。消えてから後悔したって、遅いんです。ずっとあの二人は、佐藤君に助けてほしかったんです。私にずっとそのことを訴えてた。それでも、全然佐藤君には届かなくて、響かなくて。だから今更佐藤君が何をしたらってどうにもならないんです。気付けなかったんだから。だから、」

翔子はそこで息を深く吸い込み、溜める。

「あの二人が消えるのを、あなたが止めることなんてできないんじゃないですか」

言い放ってきた。

昴は完全に言葉を失い、表情のない翔子を見つめる。翔子は昴と目を合わせようとしない。

「偉そうに分かった風な口聞かないでよ！ アナタはそれでいいの！？ あたしは、あたしは全然納得なんてできないわよ！」

美園が顔をがばりと上げて、真っ赤になって喚き散らしてきた。その瞳は潤みに潤んで、美少女が台無しになるくらい瞼が腫れ上がってしまっている。

「昴が望む望まないで全部決まっちゃうの！？ だって、あたしは、あたしのこの気持ちは昴とは全然関係なんかないわよ！ これはあたしの気持ちだもん！ その気持ちですら勝手に消されちゃうの！？ あたし、また元に戻っちゃうの！？ あの子を知らないあたしに戻っちゃうの！？ そんなの、そんなの嫌、嫌だよ……っ」

あんなに泣いていたのに、またも美園がくしゃりと顔を歪める。昴はその顔を見て、胸が張り裂けそうに苦しくなる。

「ほら」

翔子が昴を見ないまま、冷たく言ってきた。

「佐藤君の勝手な都合で、美園ちゃんもいっぱい傷ついています」

「……俺は……」

だったら、どうしたらいいんだ。

その答えは見つからない。先ほど燃え上がったはずの炎が燦り、翔子の冷たい言葉と態度によってめげてしまいそうになる。

そんな自分が情けなくて、悔しくて、誰にもぶつけられない感情で心が壊れそうな悲鳴をあげていた。

ぎり、と齒軋りをしていた。

また情けない自分に逆戻りしそうになっている。

決めたじゃないか。

どんなに傷ついたって、何度傷つけられたって、構わないって。昂は数秒の思考の後、顔を上げる。

「俺は、それでも、なんと言われても、罵られても、恨まれても、あいつを失いたくない」

今度こそ翔子を真っ直ぐに見据え、強く言った。

「……そうですか」

翔子がふいに、立ち上がった。その唇は不機嫌そうにへの字に曲がったままだ。

「本当は、こんなこと言いたくなかったんです。佐藤君がバカで鈍くて、どうしようもないから……」

顔を俯かせていた翔子が、キッと強く昂を睨んできた。初めて視線が絡み合い、ドキリと鼓動が跳ねた。

「私だって、私だってですね！ あの二人が消えていいなんて思ってるわけじゃないですか！」

昂は目を丸くし、息荒く声を張り上げた翔子を見つめる。美園もびっくりしたらしく、涙をひっこませて固まっている。

「でも、でも叱らなきゃいけなかったんです！ 誰かが叱らなきゃ、いけないんです！ 佐藤君は一人なんかじゃないんです！ 私も、美園ちゃんも、あの子たちも、柚季ちゃんも、佐藤君のお姉さんも、きつと……きつと、佐藤君の家族も！ みんなが佐藤君に関わって生きているんですよ！ 三日も塞ぎこんでた佐藤君のことを心配してないわけがないじゃないですか！ 自分だけで生きてるなんて思ったら大間違いなんです！」

「……翔、子」

思わずその名前を紡いでいた。

ここに来てからの態度の意味を、やっと悟る。翔子は教えてくれていたのだ。昂がどんなに人と深く関わっているのか、繋がっているのか。全てを拒絶しようとした昂に踏み込んで、嫌われるのを覚悟で怒ってくれているのだ。

涙がこぼれそうになって、込み上げてきたものを堪える。今は感傷に浸っている場合ではない。

それは翔子も同じ気持ちだったらしく、何度も深呼吸して気持ちを落ち着けている。

「計画を思いつきました」

呼吸が落ち着いた後、何か吹っ切れたらしい翔子が言ってきた。

「佐藤君は、今から私が話す計画に従ってもらいます。もちろん美園ちゃんも。二人とも、あの素敵な女の子を失いたくないでしょう」

？ 反論は、受け付けませんから」

昂は神妙な顔で、こっくりと頷く。美園も同様にだった。

その案を耳にして、覚悟していた決意が揺らぎそうになったりならなかったり。美園も、呆然としながら「本気なの？ 本当にそんなことするつもり？」と、ブツブツ独り言を呟いて現実逃避をはじめていた。

翔子は言いたいことを全部吐き出したのか、すっきりした表情になつて、帰り支度をはじめた。

部屋を出る間際、翔子が昂を振り返ってきた。その顔はなんだか拗ねているように見えた。

「実際、まだ佐藤君に対して怒ってるんです。でも、あの子の為に協力するんです。そのことは忘れないでください」

「悪かった。でも、来てくれて嬉しかった。ありがとう」

言つと、翔子は視線をうろろ泳がせて真っ赤になっていた。

「全部元通りになったら、またみなでお出かけのやり直ししましょう。……私服は金輪際見せませんけど！」

最後の一言は早口で言つて、翔子はさっさと逃げ出していった。

そういえば昂が完全に引きこもるキツカケになった日、翔子の私服を拝みに行くと電話口でニヤニヤ言っていたことを思い出す。

相当根に持っているらしい。一生翔子の私服は拝めないかもしれないな、と諦めから肩を落とす。

そうして振り返ると、美園が泣きつかれてスヤスヤ眠ってしまった。

「……無防備すぎるだろ、アイドル」

呟くも、天使の寝顔を見ると少し笑みが漏れた。

彼女は昴と一緒に気持ちを抱えて、どうしようもなく傷ついている。そして、これから運命に抗う為に一緒に戦う仲間だ。

柚季が救ってくれて、翔子が叱ってくれて、美園が同じ気持ちでいてくれている。

こんなにも自分には繋がりがある、と改めて知って。

それが昴の力となって、湧き上がってくる。

運命だってひっくり返す、奇跡だって起こしてみせる。

そんな風にだって、思えた。

翌朝、晴れ渡る青空の下で、昴は実に二ヶ月ぶりの学生服を着て、学校の門前に立っていた。

ハーレム？人目？

渴ききつた喉がはりついて、唾も呑みこめない。心臓の音が耳元でばかみたいにうるさくて、周囲の音すら聞こえない。

学校はもう始業の時間なので、固く閉ざされた門の前に生徒の姿は見当たらなかった。

昴が一人、全身に汗をふつふつと浮かべて立ち尽くしているだけだ。誰かに見咎められて心が折れる事態だけは避けられた。

久々に学校に行く。それだけのことが、自分にありえないほどのプレッシャーを与えている。

門の前に立ち尽くして数分。足はまるで凍り付いてしまったかのように動いてくれず、表情は険しく眉間に皺を寄せ、悪鬼のようになってしまっている。

のろのろと緩慢な動きで見上げれば、太陽が燦々と照りつけていて目が細まる。透きとおっているかのように薄い青空は視界いっぱい延々に続いており、雲はひとかけらも見当たらない。ここ数日ずっと快晴は続いており、雨の気配は全くなかった。

その空を見て、ようやく意を決する。

実際、一体自分がなんの為に頑張っているのかすら、曖昧になってきていた。それでも晴れた空を見ると、このままではいけない、という衝動が自分を突き動かす。

じり、と一歩前へと踏み出す。それだけで喉がごくりと鳴った。

校門のプレートには、自分の通う星妖学園せいようがくえんという校名が書かれている。二ヶ月間目を背けてきた学び舎は、昴の意思など関係なく今日も滞りなく学業の場として機能している。

顔を上げ、眼鏡を指で押し上げてから、逃げ出しそうになってしまいそうな情けない足をなんとか前へ前へと進めていく。

迷っている時間はない。今動かなければ、きっと何もかも失ってしまう。

昴は閉ざされた校門を軽々と乗り越え、目的の場所へとひたすら無心でざくざく歩みを進めた。

その大きな建築物はすぐに視界に入ってきた。目的地は、もう目と鼻の先だ。

もう何も考えるな。迷うな。逃げるな。

ここにたどりつくまでに何度も言い聞かせてきたソレを、もう一度自分に深く刻み込む。

扉の前に立つて、そこで立ち止まる。深く息を吸い込んだ。

そして力を込めて、その扉を一気に押し開いた。

ばあん、と鋼鉄製の重い扉が大きな音を立てた。

「え!？」

ざわり、と体育館内にいる人々が声を上げた。一気にざわめきはひろがっていく。

この日、この時間、この場所で朝の全校集会が行われるというのは、事前に翔子から聞いて知っていた。

昴の方へと一斉に集う、生徒、教師の戸惑いの眼差し。それは昴という人物を知っている注目ではなく、ただ全校集会に遅れてやってきたらしい生徒が派手に扉を開け放ち、堂々として入ってきていることへの困惑からだろう。

その視線をはねのけるようにして、昴はずんずんずかずかと体育館の中へと踏み込んでいく。

舞台では校長が話をしているところだった。

昴は足を止めない。唇を引き結んだまま進んでいく。足を止めたら挫けてしまいそうだったので、ヤケクソに大股歩きを続けた。既にどこかの線が切れてしまっているのかもしれない。

舞台へと続く短い階段をあがっていく頃には、さすがに校長も昴の存在に気付いて話を中断させていた。

「き、君、一体何を……どうして上がった？」

星妖学園の制服は着ているので、一応生徒としての認識はあるのか、困惑した様子の校長がかろうじて口を開いてくる。

舞台上上がった昴は校長の言葉を一切無視し、校長の持つマイクをおもむろに奪い取った。温厚な校長で助かった。この時に反撃されては計画遂行に支障が出てきてしまう。

マイクを手に持ち、生徒達が整列している方へと向き直る。

舞台の上から見下ろすと、呆然とする全校生徒の顔が見える。星妖学園の生徒数は多く、一人一人まで誰が誰とかは認識できなかった。ただ無数に向けられる白々しい視線に晒されているのは、肌でビリビリと感じる。

目の前が真っ暗になって、現実逃避から意識が朦朧としかける。動悸が早まりすぎて、痛いくらいだった。

「貴様、佐藤だな！？ なんのつもりだア！？ 今すぐそこから降りなさい！！」

聞き覚えのある担任教師の声が聞こえてきた。

さすがに昴の奇行に気付いた教師たちが、怒りに顔を真っ赤にさせて喚きながら、多数で押し寄せてきている。時間がない。

昴は、すつと軽く息を吸い込み、口を開いた。

「俺は二年八組の佐藤昴だ！！」

マイクに向かって、絶叫した。

さすがに教師たちも啞然として動きを止める。

絶叫した瞬間、何故だか心が平静を取り戻した。波風がたっていない大海原のような心もちで、不遜すぎる眼差しで、全校生徒を舐めるように見渡す。校長は呆然とし、石のように固まり続けている。

「お前らに告ぐ。お前ら、全員　俺のハーレムに入れ」

言った。言い切った。

体育館内が、水を打ったかのような静寂に包まれてしまった。

あまりの空気の固まりっぷりに昴も一瞬怯んだが、それでもなんと続ける。

「……いいか、よく聞け。俺はこの学校を二ヶ月以上不登校してた。友達はひとりしかない。自分が好かれるタイプだとは思ってない人に話しかけることですらうまくできない。どうしたら喜んでくれるのか、どう言えば共感してくれるのか、どう言えば一緒にいてくれるのか、全く何一つ分からない。それは今も変わらない。それでも、俺は決めたんだ　、っ!？」

一時呆然としていた教師が階段をのぼってきてしまった。すごい形相で昴へと近付いてくるのは、やはり因縁の担任教師だった。

昴へと掴みかからんとする教師へと、何かが弾丸のようにタツクルをしてきて。

それは、舞台袖で待機していた翔子だった。大きな体格の教師を、華奢な翔子が必死に羽交い絞めにしている。

「続けてください佐藤君！　思ってること全部、ぶちまけてちゃってください！」

昴は翔子の加勢に心の中で感謝し、すぐに生徒たちに向き直った。

「それでも俺は決めたんだ！　俺のハーレムを作ってみせるって！　約束だったから……！　だから、お前ら全員、みんな俺のハーレムに入れ！！　俺の友達になれ！！」

早口で絶叫する。

「今日学校が終わってから、俺の家に集まってくれ！！ 友達記念に、俺の手作りお菓子をふるまってやるから、頼むから、来てくれ！！」

ヤケクソになって叫び終えた。教師陣はもう翔子一人では止められないほど、押し寄せてきている。

乱暴にマイクを投げ捨て、階段の方ではなく、舞台からダイレクトに飛び降りた。

生徒たちの間を駆け抜けていく。体育館内のざわめきは最高潮に達していた。

不器用すぎて、こんな言い方しかできなくて。

でも、自分の言葉で、自分の意思を伝えた。やりきった。

駆け抜ける中で否定的な眼差しや、揶揄する声も届く。俯かせていた顔が、燃え上がるように熱くなっていく。

そのとき、

「行くわ！ あたし、佐藤昴のハーレムに入ってあげる！」

その声は一際大きく、凜、とその場に響いて聞こえた。

どよ、と更に生徒たちが騒ぐ。悲鳴に近い声も上がった。

「だってあたし、昴の作ったお菓子が大好きだもん！ みんなも、昴の手作りお菓子、食べてみたくない！？ 最高なんだから！！ あたしは行くわよ！ みんなも、ほら、お菓子食べに行くわよ！ このあたしと一緒にお菓子が食べられるってだけで、価値ある一時間が過ごせると思わない！？」

走る背中に届く、美園の言葉に口元が緩みそうになる。

見えないけれどきつと彼女は真っ赤になっているに違いない。昨晚あのまま眠ってしまった美園は、早朝に目を覚まして「なんで起こさないのよ変態！ スキャンダルになったって知らないわよ！」とプリプリ怒りながら慌てて帰っていった。何故か美園との関係ばかりが深まっている気がする。

その美園が、翔子の指示通りに今日の全校集会に来て、昂の応援をしてくれている。

『とってもいい子だよ、美園ちゃん』

そんな声がどこからか聞こえた気がして、やはり少しニヤケてしまった。

開け放たれたままの扉の向こうに出て、追いかけてくる教師たちの喚きを背中に、昂は全速力で走り続けた。

一気に学校の外に出て、隠してあった原付に乗り込む。エンジンをかけて走り出す。

振り返って確認すると、学園はもう遠く、教師たちの姿もとつくに見えなくなっていた。

ようやく今自分がしでかしたことに、沸々と現実感が込み上げてきて。

風を切って原付を走らせながら、恥ずかしさで悶え転がりたい衝動に駆られる。

「もう一生学校行けないな、こりゃ」

諦めたように、呟いた。

アパートに帰ってから、昴は大忙しだった。

宣言したからには、全校生徒が訪ねてくるくらいの気持ちでお菓子作りをしなければいけない。

材料は帰り道のスーパーで大量購入してきた。小麦粉、砂糖、バター、卵、はちみつ、牛乳など諸々。大量購入によって、今まで少しづつ貯めてきたバイト代が儚く消し飛んでいった。

なんでこんなことに必死になってるんだろうか、なんて冷静な自分が頭の中で言っているのを無視する。

エプロンを装着、いつもの装備完了だ。

慣れた手つきでボールに卵を何個も割りいれていく。砂糖を入れて、泡だて器でかきまぜていく。その手先は見えないくらいに素早い。

作業途中で、携帯電話が鳴った。

手を休めずにポケットの携帯電話を取り出し、器用に耳と肩で挟み込む。

『お疲れ様です佐藤君』

柔らかい声が耳に届いて、安堵感が込み上げた。

『ああ、翔子も。どうだった？ 怒られたら？』

『はい。こつてりしられました。でもまあ全校集会をメチャクチャにした犯人は佐藤君ですし、私はその場で感銘を受けて手伝っただけで、佐藤君とはなんの関係もありませんと言っておきました』

『全部仕組んだのはお前だろ』

『ま、まあそれはいいじゃないですか。佐藤君のおうちで午後のお茶会主催のチラシ、徹夜で作成したんですよ。今美園ちゃんや美園

ちゃんファンクラブの人に手伝ってもらって、先生にばれないようにさりげなく配布してるところです』

どうやら今は休み時間らしい。他の生徒の声も遠く聞こえてくる。翔子は成果の報告を電話してきてくれたらしい。

全ては昨夜、翔子が計画したことだった。

昂はとにかく一人でも多くの人間に、好かれなくてはいけない。人を集めなくてはいけない。

その方法として全校集会ジャックを提案してきたのだ。一人でも多く、生徒の心を揺さぶって昂の周囲に集まってくれば計画は成功だった。

人気者の美園がその場で行くと声高に言えば、つられる生徒もいるかもしれない、と翔子が言っていた。その為に美園はプライドを捨てて協力してくれた。

一体何が目的だったのか、朝になった時点で曖昧にはなっていた。ただ誰かを助けたくて、誰かに会いたくて、どうしても焦がれていた。

「俺の為なんかに、集まる、かな……」

自信なさげに言ってしまったことに恥ずかしさが込み上げて、頬が熱くなった。

余計なことは考えるな。今はただ、お菓子を作ることに集中しろ。自分は自分のできることに、全力を出し切るだけだ。何よりも自分の為に。

昂は自身に言い聞かせ、表情を引き締めた。

そこで、ふふ、と好意的な笑い声が聞こえてきて、耳まで燃え上がっていく。

『集まるかどうかは今はまだ分かりませんが、私たちは頑張れる

だけ頑張ってみます。佐藤君も信じて頑張ってください。私も密かに楽しみにしてるので。美園ちゃん曰く、プロのパティシエ以上に素晴らしい味らしいですから』

「そんな吹聴してるのかアイツ……」

思い切りハードルを上げられているらしい。げんなりとした。

『それに、誰も来ないってことはありえません。私は行きますから。絶対に』

「ああ、うん。色々ありがとな、翔子。すごく感謝してる」

言つと、翔子が電話越しに声を詰まらせている気配を感じた。

『……やっぱり佐藤君は、鈍いです』

そう小さく言って、電話は切れた。

午後三時。

朝からドタバタが続いていてすでに精根尽き果てた昴は、現在居間の中心で、柚季と並んで腕を組んで仁王立ちしている。

柚季は三十分ほど前に由梨絵に連れられて帰ってきた。机の上にはありとあらゆる皿を使用して大量すぎる焼きドーナツの山が出来ている。各種さまざま鮮やかなパステルカラーの柔らかなドーナツは、壮絶に甘ったるい匂いを国生家に充満させていた。

ドーナツの一つをつまんで「こんなにだれが食べるのよ？」と不審そうにしながら、由梨絵は仕事に戻っていった。

完成品を前にして、時計や玄関ばかりが気になって仕方ない。落ち着かない気分で山盛りドーナツの前で立ち尽くしていたら、柚季も並んで立ってきたのだ。その顔は何故か真剣そのものだ。ドーナツに手をつけようとしてもしない。

「食べないのか？」

聞いてみると、柚季の視線がものほしそうにドーナツへと移る。しかし首を大きく振って、誘惑を振り払っている様子だった。

「ダメなの。これはたいせつなおかしなの。これを食べたひとはおいしくてすばるのハーレムにはいっちゃうの。ユズはもうすばるが大好きだから、いらないの」

そんな風に言ってくる柚季があまりに愛おしくて、昴は頭を撫でてやる。触覚みたいな二つに縛った髪がくしゃくしゃと揺れる。

「お前のオヤツでもあるんだから、食べ」

言ったと同時に、ピンポンと呼び鈴が鳴った。瞬間で昴の顔が強張る。

恐る恐る玄関ドアへと目を移し、気配を殺しながらゆっくりと近付いて行く。ドアを開けるのが怖いなんてもう今更すぎる恐怖心を無理矢理ねじ伏せ、ドアノブに手をかけた。

それをゆっくりゆっくり開くと　美園が立っていた。

「約束通り来てやったわよ」

豊かな胸元をふんぞりかえらせながら、傲慢に強引に昴を押しつけるくらいの勢いで、住居に立ち入ってくる。

その後ろから、ぞろぞろと続いてきたのは大量の男子生徒だった。

「お邪魔しマース」「お邪魔しますっ」「お邪魔します!」「お邪魔しまーすっ」と続々野太い声の男子生徒たちが玄関で靴を脱ぎ、入ってくる。昴の顔はたちまちに引き攣っていく。

あきらかに美園ファンクラブの面々たちは、昴に敵意の眼差しを向けてくる。そうしながら、持参してきた紙コップやお茶、ジュースをわけてドーナッツ試食会がはじまった。既に国生家の居間は満員御礼だ。

「これじゃ俺のハーレムじゃなくて、美園のハーレム……」

口元をひくつかせながら昴は呟く。ごつい野郎たちの登場に恐れをなした柚季にいたっては、昴に抱っこしてもらって涙目だ。

「そんなことないですよ」

その声が背後から聞こえて振り向くと、いつの間にか大勢の野郎に混じって翔子が立っていた。

「思ったよりもたくさん、そりゃ全校生徒は無理かもしれないですけど、ほんとにたくさんの方が来てくれます」

ニッコリ、と翔子が満面に笑った。

「マジか」

昴は柚季を抱っこしたまま、慌てて玄関の向こうに出てみる。驚いた。本当に、驚いた。玄関の外階段、それどころか見下ろせる駐車場までいっぱい、星妖学園の生徒が集っていた。

昴の登場に、わつと生徒たちが歓声をあげる。

「おー佐藤！ 来てやったぞ！」「お菓子早くよこせよ！」「美園ちゃんはどこにいるんだ！？」「すごいウワサになってるよーパティシエ以上の味なんだって！？」「食べたい食べたい！！」

なんて、口々に生徒たちが声をかけてくる。

「マジかよ……」

その光景が目に入って、なんだか泣きそうになってしまった。

昴は唇をぐつと噛んで堪え、とりあえず部屋に舞い戻る。玄関の外まで溢れ出ている生徒たちは、全く国生家の中におさまりそうにない。

そこで美園フアンクラブの面々が動いてくれていた。外に溢れ出た生徒たちにドーナッツやジュースを配ってくれて、お茶会がはじまる。お茶会なんて上品なものではなくて、もはや高校生たちのどんちゃん騒ぎだった。集った生徒たちも一体何が目的なのかよくわかっていないに違いない。

それでもこれだけの人が、昴の為に来てくれた。

きつと友達になってくれるつもりで、来てくれた。それだけで、なんだか笑みがこぼれそうになるのだ。

床にそのまま座り込んで談笑する生徒たちや、合コンのノリみたいな生徒、歌を歌いだすものまで現れてどんちゃん騒ぎが過熱していく。柚季は女子生徒たちからの「可愛い可愛い可愛い」攻めにあっていた。

おそらく近所から苦情が出るのも、時間の問題に思えた。

大騒ぎの中でせつせとドーナッツを配っていた昴は、一旦休憩する為に自室である和室の方にまで戻る。

襖を開けると、美園が背中を向けて一人で立っていた。ワガママ

女王様な彼女は、一人でこの場所を占拠していたらしい。翔子は一生懸命にお茶会を盛り上げてくれているというのに。

昴は肩をすくめながら自室に入っていく。

背中を向けていた美園が、昴の気配に気付いたのか、くるりと振り向いた。

その胸の中には。

「なんてうるさいんじゃない！　あまりにうるさくて気になって見に来てしまったではないか！　気持ちよく眠っていたのに！　少しは近所迷惑というものを考えるのじゃバカモノめが！」

愛らしく透き通るようなキレイな声で、美園の胸に抱かれてジタバタと怒りを全身で表現をしている、緑色のぬいぐるみがいた。

「よおイズミ、久しぶりだな」

昴は震えそうになりながら、なんとか平静を装い、紡ぐ。

その名前も、見慣れた姿を目にした瞬間、その声を聞いた瞬間、鮮やかに蘇ってきて。

もちろん、彼女の名前も。

美園が無言のまま、ブイサインをしてくる。その目の端には涙が浮かんでいた。

それでも彼女は、やっぱりアイドルにふさわしい、完璧なエンジェルスマイルを見せてくれた。

ハーレム？人目？

……久しぶりに、意識が淡く戻ってきたのを感じる。
もう目覚めることはないと思っていた。

身体はもう指先一ミリも動かない。何もかも渴ききって、動けなくなつて、意識が途絶えてしまつて、どれくらいの時間が経つたのだろうか。

視界は真つ暗だった。もう目を開くこともできないから当然だった。何も映らなくて何もわからなくて、少しこわかった。

そうしたら、彼のことを思い出した。

こわがりの昴。幽霊妖怪人外がこわくてこわくて、そういえばコンビニの駐車場で再会した時も声が震えていた。あのとき、昴に会う為にあの場所にいたことを言えば、更にこわがらせてしまうんだろうか。

昴と最初に出会ったのは、入学式だった。

元々、佐藤昴を探していた。イズミちゃんに召喚された自分の役目は、佐藤昴の願いを叶えることだった。身動きの取れないイズミちゃんに代わつて、入学手続き、佐藤昴の住居の隣を借りる手続き、生活の手続き、全部今はもうない魔力でどうにかなった。

でも、入学式で、あの場で彼に会ったのは本当に偶然だった。彼が佐藤昴だなんて、知りもしなかった。

そんな彼に、あろうことが一目惚れしてしまった。

なんて醜態。自分が恋に落ちると、その恋した相手と夫婦になるまで身体が渴いていく体質で、魔力すら全て失ってしまうこと、分かっていたのに。

これじゃあ佐藤昴の願いを叶えてあげられない。

とにかく彼を探さなければならなかった。何故か入学式の翌日から姿を見せなくなつてしまった彼を数日間、探し求め続けた。

焦っていた。渴いていくから。どんどん、どんどん渴いていつて

しまつから。

コンビ二でバイトしている彼を見つけた時には、もう身体が動かなくて、遠くから気付いてくれるのを待っているしかなかった。

強い風に吹かれて、コンビ二の駐車場まで転がっていったのは幸運だった。

彼が気付いてくれた。彼から注がれた水は、すぐに自分を元の姿に戻してくれた。

そうして、どうしようもなく恋焦がれた相手に、求婚した。産まれて初めての愛の告白は、想いのたけを全てぶつけて緊張で胸が張り裂けてしまいそうで、

あつさりと、玉砕した。

自分が好きになった相手が佐藤昴本人であると知ったのは数日後。少し絶望した。

佐藤昴の願いを叶う為にきた自分が、佐藤昴本人に恋して力を失ってしまふなんて、浅はかで、ばかみたいで、完全に不可抗力だった。

イズミちゃんも呆れてた。なんでよりによって佐藤昴なんじゃ、と。

彼に恋してしまつたら、彼の願いを叶えることに支障が出てくるばかりで何一ついいことなんかない。一番好きになつてはいけない人だった。

それでも、恋する気持ちをコントロールなんてできなかった。これはわたしの本当の気持ち。嘘偽りない、恋だったから。

自分が好きになった人を、みんなに好かれるようにしなきゃいけないなんて、正直な話、嫌な気持ちばかり込み上げてきて。

本当は、自分だけを見てほしいに決まってるじゃないか。

胸が苦しくて苦しくて痛くて張り裂けそうで締め付けられていつも泣きそうなのを必死で隠してて。

こんな気持ち、知らなければよかった。

……でも。

昴はずっと泣いているから。いっぱい苦しんでいるから。ずつとずつとあの人のことを想っているから。

だから、わたしは、あの人に会いにきて。

ここまでたどりつけたけど、やっぱり身体が限界だった。

玄関先で干物みたいになってるわたしに、その人は不審げな一瞥をくれただけだった。

一言、伝えたかったのに。

それが伝えられたら、もう消えちゃっても構わなかったのに。

昴にはいっぱいこわいものがある。

幽霊や妖怪じゃなくなつて、人間だつてこわくて。いつもおびえている。きつと誰より、人の顔色をうかがっているひと。

それから全部、守ってあげたいって思う。こわいのは、ぜんぶ、なくしてあげる。

昴のことをこわがらせちゃってるわたしも含めて、ぜんぶ、ぜんぶ。

今でも、こんな状態になつても、やっぱり思う。ひたすら願う。昴に笑ってほしいなあ、なんて。

ぽつり、と優しい雫が、頬に一滴、あたった。

昴は原付を走らせていた。無我夢中で、限界までスピードをあげていた。

すさまじい風圧を全身で感じる。今転倒したら即死レベルの速度だ。それでも速度を緩めることができない。

夕陽が沈んでいき、夜の闇に包まれ始めた風景がすごい速さで流れていく。

道路をのろのろ走る車を容赦なく追い越していきながら、意識を取り戻したイズミの言葉が、脳裏を過ぎった。

『時間がない』

三日前、イズミが眠りに落ちる寸前、彼女は出て行ってしまった。イズミはその姿を見ても、止めることもできないくらい強制的に意識を奪われてしまったらしい。おそらく、昴が彼女たちの存在を心の底から否定しはじめたことで、イズミの力が弱まってしまったのだろう。

自然と舌打ちが出る。

彼女はどこに行ったというのだ。意識がなくなるほどイズミの力が弱まってしまったのなら、彼女だって平気なはずがない。

実際イズミは青ざめ、言っていた。

『もう完全に消えかけている。気配すら、ほとんど感じない』

半分泣きべそ状態でイズミが言ってきて、美園がイズミの首をぎゅづぎゅ絞めて、イズミは復活とともにその小さなともし火を消されそうになっていた。

美園がまたベソベソ泣き出して、和室は重苦しく沈痛な雰囲気包まれてしまい、昴は苛立っていた。

とにかく彼女を見つけないといけない。それだけは確かだった。ここでのんびり話している時間すら惜しく、昴はヘルメットを手に取り、自室を飛び出そうとした。

『今の我だったら！ 今の我だったら助ける為に奇跡だって起こしてみせる！ おぬしたちのおかげで、いっぱい力が蓄えられたから！ だから、その力全部使ってもいい！！ なくなってしまうでもいいから……昴、お主も……っ助けてやってくれ！！』

頭を下げて、涙声で訴えてきたイズミの姿を最後に見て、昴は国

生家を飛び出した。

駐車場に出ると、既に解散ムードで帰り始めていた生徒たちを必死に引き止めている翔子がいた。

昴の姿に気付いた翔子が駆け寄ってきたので、柚季のことを頼んで原付に乗り込んだ。

昴の行動の意味は分かっているまいだろうが、たくさんの生徒たちから激励の声を背後に受けて、昴は走り出した。

こうして原付の限界まで速度をあげて走っている今も、とにかく苛立つて仕方がなかった。イズミと一緒にいてくれればよかったのに、何故彼女は出ていったりなんか。

きつともう渴ききってしまったっている彼女を思うと、やるせなくてどこにいるかなんか全く分からなくて。流れていく景色に、目を凝らすことしかできない。暗くなっていくにしたがって視界は悪くなる一方で、昴の苛立ちは最高潮に達していた。

自分の働くコンビニに行ってみた。学校にも行ってみた。原付を停めて自分の足で駆けずりまわり、そこらじゅうに目を凝らして探し回った。その名前を何度も呼んだ。彼女は見つからなかった。

時間だけが刻々と容赦なく、過ぎていく。

もう間に合わないかもしれない絶望に心がぐしゃぐしゃになって、泣きそうになっている自分が諦めているみたいで嫌で、とにかくいつものように顔を般若のようにさせてなんとか保っていた。

太陽が完全に落ちて、夜がやってきて。

……その中で、昴は、自分の家の前に来ていた。

なんでここに来たのかは、分からない。般若みたいな顔をつくっているつもりだったのに、情けないくらい眉が下がってしまったているのが、自分でも分かる。

家の前に原付を停めて、降りて、ヘルメットを座席において、自分の生まれ育った家を見上げていた。

こんな時に、なんで、自分はここに

「昂？」

その声が聞こえて、昂は視線を声の方向へとゆっくり移す。家に帰ってきたのであろう、スーツ姿の女性が不思議そうな顔をして自分を見ていて、気付いてしまった。

どうしようもない絶望と苛立ちで、もうダメかもしれないなんて泣きそうになった時に、やっぱり自分は

「助けてほしかった」

ずっと、助けてほしかった。

その女性が面くらったように、息を呑んで立ち止まっている。その姿を正面に捉え、昂は顔がくしゃりと歪んでしまっていくのが分かる。拳が震えてしまっているのが分かる。

「俺はずっと、アンタに助けてほしかったんだ」

紡いだと同時に、パタリ、と頬に雫があたった。

次は額に。次は腕に。次は眼鏡に。次々と落ちてきた雫は、徐々にその数が増えていき、すぐにどしゃぶりの雨へと変わった。

昂は呆然と空を見上げる。真っ暗な夜空だった。先ほどまでは太陽が出ていたはずなのに、きれいに晴れ渡ったオレンジ色だったのに、今の空には星は一つも見えない。気付けば黒い雨雲が空一面を覆っている。その黒雲から、注ぐように大量の雨が降ってくる。

イズミが、奇跡を起こしてくれた。

すぐに昂はその事実気付く。その優しい雨は、まるで誰かを守るかのよう、あたたかかったから。

「……すげえな。やっぱり、神様だったんだ……」

流れ落ちていく涙と雨が混じりあい、頬から顎に伝い、垂れ落ちていく。泣いているのを隠すように、優しい雨は降り続ける。

泣いているのに、笑ってしまいそうだった。

昴の姿を呆然と見ている女性は、家の前なのに雨で全身が濡れそぼり、それでも身動き一つ取れないまま昴を凝視し続けていた。

「だって、だって昴はそんなこと、一言だって、言わなかったじゃない。……言わなきゃわからないわ」

その言葉に、昴は俯く。

嗚咽が漏れそうになって、唇を噛む。喉が震える。

「そうだよな……ずっと、何ひとつ、俺は言わなかったから」

ボロボロになってしまった心は届かなくて、やっぱりこの人を前に絶望だけで。感情のない瞳を母親に向けた。

帰るよ、と諦めて口を開こうとした、瞬間だった。

ぎゅう、と右手を握り締められた感触に、昴は目を見開いていく。

「ううん、そんなことないよ？ 昴はずっと、ずっとずっとずっと、言ってたよ。わたしにはずっと伝わってきたよ」

その声が耳に届き、涙は流れ続けていたのに、更に溢れ出てくる。

「あのね！ 昴はね、お母さんがとつてもとつてもとーっても！ 大好きなんだよ！」

降りしきる雨の中、服が水分を含んで重たく張り付いている。水滴で眼鏡が見えなくなってしまうていて、昴は左の袖でゴシゴ

シと眼鏡を拭う。

横を見ると、鮮やかな水色の髪が見えた。自身たつぷりにささやかな胸をそらせて、いつもの制服姿の彼女は、やっぱり全身濡れていて。

そしてやっぱり、満面の笑顔だった。

「これを伝えたかったんだよ！ ああもう、これを言う為に死ぬ気の大冒険しちゃったよ！ えっへっへ言ってやったえっへっへ！」

満面の笑みを見せてくれる彼女の右手を、強く握り返した。泣くのを必死で堪えた。涙が溢れてくると視界がぼやけてしまって、彼女自体が消えてしまふんじゃないかって怖くて。

やっぱり自分は怖がりなままだ。

母親に向き直ると、母親は気まずそうに視線を逸らせてきた。

きっとこの人も、自分と一緒になのだ。

伝えることも、繋がり方も、わからなくて、ずっと戸惑っていて胸の中がずっと晴れていくようだった。彼女が手を握っていてくれることで、彼女が言ってくれたことで、全てを洗い流してくれたように。

昂は軽く笑みをこぼす。涙はまだ止まらなくて恰好悪くて情けない顔のままだったけど、今度こそ笑ってしまった。

産まれてからずっと壊れたままだった関係は、簡単には修復なんてできない。

母親は目を逸らしたままで、何一つ言葉をくれない。

でも、バケツの水をひっくり返したような大雨の中で、母親はずっと昂の前に立って逃げないでいてくれた。

今はもう、それだけでよかった。

「帰ろう、水知」

だから水知に向かって言った。

水知は最初、びっくりしたように昴の顔を見上げてきて、一瞬くしやりと泣きそうになって、最後にやっぱり笑った。

「うん！一緒に、帰ろう！」

「あ、」

何か言いかけた母親がやっぱり俯いたのを見てから背中を向け、歩き出す。

原付のハンドルを握って、引っ張っていく。

水知は元気いっぱいに雨水をはねさせている。

全身は濡れすぎて気持ち悪いを通り越してどこか爽快ですらある。

奇跡の雨は、まだまだやみそうにない。

だから昴は願うのだ。ひたすら願うのだ。

ずっとずっとこの雨が、やみませんように

エピローグ

帰宅後、凄まじい落雷に打たれてしまった。

「これは一体どういふつもりなのよおおおお！？」

顔面蒼白で絶叫したのは、姉である由梨絵だった。

国生家は惨澹たる有様に変貌していた。高校生が大人数でどんちやん騒ぎした祭りの後は、そりゃあもう凄まじい散らかりようだった。

食べ散らかしたドーナツの残骸、いつの間にか買い足してきたのか市販のお菓子の袋やら食べカス、紙コップやらがそこかしこに転がり、床はジュースをこぼしたのかべつとべと。泥棒に入られたかのように家の家具はもれなく荒らされ、ひっくり返され、安アパートの壁にはひびまで入ってしまったている。

「大家さんに呼び出しくらったんだけど！　なんかメチャクチャ怒られたんだけど私が！　なんで私が怒られるの！？　今度やったら追い出すとまで言われた！　死ね！　とりあえず死んで詫びろ！！」

怒り心頭の由梨絵は、もう帰ってしまった高校生たちへの怒りを昂へと一極集中させていた。

濡れたままで帰ってきた昴はぼこぼこに殴られ蹴られ、現在、一人寂しく後片付けをさせられている。シャワーすら浴びさせてくれない。

「……なんで俺だけ……俺は結局孤独なままかよ……」

帰ってきて水知の姿を見た美園はというと、もうメチャクチャに

泣いた。わんわん泣いて泣いて水知に抱きついてしがみついて離さなくて、水知を苦笑させるほどだった。

水知はそのまま美園と一緒に潮家の方へと帰っていった。きっと潮家に戻ったら、イズミもわんわん泣いたのではないだろうか。というか、あんな奇跡を起こしたイズミは無事なのか。気にはなるけれど、由梨絵の監視下に置かれていて様子を見に行くことすらできそうにない。

その場に残っていた翔子は前日から徹夜続きのせいか、フラフラだった。集まってくれたみんなが、昴によろしく、また来るね、またやろうね、とたくさんのお言葉を残してくれたと教えてくれて、ほんのり胸があたたかくなった。

実際、あの場あの時だけ昴に対して気持ちが集まっただけのことであり、本当に友達になったとは言えないのだろうけど。それでもよく知りもしない昴の為に協力してくれた生徒たちには感謝していた。いつか、本当の友達になれる日だってくるかもしれない。

フラフラの翔子は片付けを手伝うと申し出てくれたが、半分しか目が開いていない翔子を見るとさすがに可哀相になって、今日は帰って寝てくれ、と言った。翔子は半分寝ているような状態で頷いた。

『私、佐藤君のこと待ってます、えと、学校に来るのを待ってるんですよ。決して個人的に何かに気付くのを待ってるとかじゃなくて、えーと……とにかく、おやすみなさい』

と、頭もまわっていない状態らしく、ぶつぶつと呟きながら帰っていった。

柚季はもう就寝している。愛らしく寝息を立てて、安らかに、気持ち良さそうに眠っている。その姿を見ると、実は前日からほとんど寝てないのは昴も一緒に、少し羨ましくもあった。

雨はまだ続いていた。

なんとなくついていたテレビに目を遣ると、ちょうどやっていた

天気予報でこの地方が梅雨入りしたとキャスターが話していた。

さあさあと雨の音が聞こえてきて、安心する。それだけのことで頑張っただけだ。

数時間も片付けに費やしていると、由梨絵もさすがに手伝いにまわってくれていた。

「……あのさあ、結局、どうするつもり？」

ひっくりかえされた衣装タンスの中身をせっせとしましながら、由梨絵がぼつりと聞いてきた。

あまり楽しい話題ではないのか、視線を気まずそうに泳がせている。その挙動で佐藤家の問題のことを聞いているのだと気付く。

離婚した両親のどちらにつくのか。その問題から逃げる為に昂は由梨絵の家に居候させてもらっているのだ。そろそろ答えを出さなければならぬ時期だと、母親が言っていたことを思い出す。

「……俺さ、ずっと言えなかったんだけどさ、両親に別れてほしくなんかなかったんだ」

昂は床を雑巾で拭きながら、本音を吐き出す。

「自分でも気付かなかった。さっき気付いた。もっとはやく気付いてれば、俺がもうちょっと頑張れば、二人のことを止めることができたのかな」

そんな風に呟いていたら、ばかり、と後頭部をはたかれて、痛みで顔をしかめて振り仰ぐと、もっと怖い顔をした由梨絵が自分を見下ろしていた。

「ばーか。何一人で背負っちゃってんの」

「ぶい、と不機嫌そうに由梨絵が離れていき、作業を再開させた。

「私も手伝ってあげるわよ。私だって、同じ気持ちなんだから。最悪だって思われても、全力で抗ってやるわよ」

「……ああ」

「だから、まあ、正直迷惑だけど、両親どっちにもつけないって言うなら私のとこにいていいから」

「……ああ」

「家が建つまでね。あ、それと生活費は今まで通り入れること。柚季の世話も頼んだわよ」

「あ……ああ？」

「なんだか和やかないいお話の雰囲気が出た感じが台無しにされた気分だったが、まだこれからしばらくは柚季との愛を育み続けられることを思えば、何だって乗り越えられる気がした。

「ちなみに余談だが、水知を探しまくっている間に寄ったバイト先で、店長にクビを言い渡された。

「三日も無断欠席し続けて、携帯電話の電源を落としていたのだから当然の結果だといえば、当然の結果だった。

「……新しい職場を探さなければ。

「水知やイズミのことも実際解決なんてしてなくて、家族はバラバラのままで、昴はやっぱ昴のままで、結局何一つ変わってなんかいないのかもしれない。

「でも、きつと、いつかはみんなで楽しく笑って過ごせる日が来る

んじゃないかって

そんな風に思っても、いいんじゃないかな。

「……あれ？　っ、昴、ちょ、あんた何一人で寝落ちしてんの！？　ずるいわよ！　まだまだやることはいっぱいあるんだから！　寝るなああ！！」

由梨絵の声が徐々に遠くなっていき、意識が朦朧としてきて、雨の音が耳に心地良くて……

昴はその場にうつ伏せになって、気持ちよく寝息をたてていた。

翌朝のこと。

ピンポーン、と呼び鈴がなった。

昴はその音で目覚め、目をぱかりと開けた。床で眠ってしまったていた身体が全身鞭打ちのようになって痛くて、この痛みは由梨絵による暴行が原因であることを思い出した。

むくりと起き上がり、背中にかかれていた毛布が落ちる。

眼鏡をかけたままだったし、あんなに雨に打たれたというのに、シャワーで身体を洗うことなくしかも制服のまま寝てしまっていた。最悪な気分が目覚めだった。

ぼんやりしたまま、しつこく何度も鳴る呼び鈴に苛立つ。

「はいはい今行きゃいいんだろが」

ぐちぐちとこぼしながら、重い身体をなんとか動かす。

玄関までたどりつき、ドアを開けた。

「おはよう昴！」

「あ」

水知が制服姿でニコリ笑って立っていた。その水知の肩には、両手をかけたイズミがむっつりとのっている。

イズミの全然無事そうな姿を見て、少し安堵した。しかし寝起きの気分の悪さで不機嫌な方がはるかに大きい。

水知が現れた意味もよくわからなかった。刺すように鋭い眼を水知へと向ける。

どうやら由梨絵や由梨絵の夫や柚季は、もう家を出た後だ。

昴は一人、ニコニコの水知と向き合っていた。

「昴、学校いこ！」

そうしてニコニコの水知が信じられないセリフを吐いてきた。

「……は？」

昴は固まる。

昨日まで死にそうだったはずのミイラ女が元気になった直後、愛らしい顔を満面の笑顔にして水色髪を元気に揺らし、現在ゾンビ化している昴に「学校に行こう」なんて言ってくる事態が予想できるはずもなく、頭の中が真っ白になった。

「しばらく梅雨で雨続きだから大丈夫って言って聞かないのじゃ。我の力もまた底をついておるしな、こんな状態で水知を危険に晒すのは本意ではないのだが」

「うん、だから、昴と一緒に行ってくれれば大丈夫だよ！」

なんてイズミの言葉を叩き潰して、天真爛漫に言ってくる。

「……俺が、お前と……学校に？」

「うんうん！」

水知は嬉しそうに瞳を輝かせ、何度も頷く。

「昂様ハーレム計画は、まだまだ進行中なんだよ！ 学校でいっぱい昂のハーレム人員ゲットだよ！ だから、わたしとイズミちゃんを助けるつもりで、ほらほら！」

怒りが沸々込み上げて、身体がぶるぶると震えてくる。眼には殺意すらこもる。ふざけるな、と怒鳴ってしまいそうになる。

……それなのに。

水知が差し伸ばしてきた手を、取ってしまった。

「えっへっへ！」

そんな風に笑ってくる水知に勝てるわけなんかなくて、昂は、一歩外へと踏み出してしまった。

これが惚れた弱味ってやつか。なんて自虐的になりながら、ガビガビになってしまっている髪の毛をぐしゃぐしゃかきまわしていた。

水知と一緒に歩いて行く。

前日から同じ恰好のままで、学校に行けば昨日の重大事件を誰もが忘れてるわけなんかなくて、しかもカツパオプシオンつきで、歩を進めれば進めるほどに憂鬱さが増していく。

それでも、水知と手を繋いで歩いて行くのは、ただ君のいるハーレム生活を続ける為に。

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4332s/>

君のいるハーレム生活

2011年8月11日08時13分発行